平成 24 年度名古屋大学大学院文学研究科
学位（課程博士）申請論文

タイに伝わるパーリ語蔵外仏典の研究

—仏像と地獄救済に関する説話を中心として—

第 1 部 研究篇

名古屋大学大学院文学研究科
人文学専攻インド文化学専門

山本 聡子

平成 24 年 12 月

目次

目次 ..... i-v

第 1 部 研究篇

序論 1

1. タイのパーリ語蔵外仏典研究 1
2. 研究対象 3
3. 研究目的 5
4. 本研究の意義 5
5. 本論文の構成 6

第 1 章 パーリ語蔵外仏典の仏像起源伝説
―タイ版『ヴァッタングリ王物語』の源泉資料とその展開― 8

1. 仏像起源伝説に言及する漢訳仏典 8
   1.1. ウデーナ王に帰する伝説 9
   1.2. ウデーナ王とパセーナディ王に帰する伝説 9
   1.3. パセーナディ王に帰する伝説 10
   1.4. 漢訳仏典の仏像起源伝説 11
2. 仏像起源伝説に言及するパーリ語蔵外仏典 11
   2.1. 「パンニャーサ・ジャータカ」集 11
      2.1.1. タイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集 12
      2.1.2. ビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集 14
   2.2. タイ版『ヴァッタングリ王物語』 15
      2.2.1. タイ版『ヴァッタングリ王物語』の梗概 15
   2.3. ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』 16
      2.3.1. ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』の梗概 16
      2.3.2. ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』の先行研究 17
   2.4. スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』 18
      2.4.1. スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』の梗概 18
      2.4.2. スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』の先行研究 18
   2.5. 仏像起源伝説に関する先行研究 19
3. タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』 20

3. 1. タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』の梗概 21
4. 仏像起源伝説に言及するパーリ語蔵外仏典の比較 22
4. 1. 形式・構成の比較 22
4. 2. 仏像起源伝説の比較 23
4. 3. 前世物語の比較 25
4. 3. 1. 『ヴァッダナ物語』の梗概 26
4. 3. 2 前世物語 1 の比較 26
4. 3. 3. 前世物語 2 の比較 28
4. 4. 造像の果報の比較 32
5. 小結 33

第 2 章 造像と像供養の功徳 35
1. 仏像起源伝説を説くパーリ語仏典の造像の功徳 35
1. 1. スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』 35
1. 2. タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』 35
1. 3. タイ版『ヴァッタングリ王物語』 36
1. 4. ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』 36
2. 『目連尊者の問い』 38
2. 1. 『目連尊者の問い』の梗概 38
2. 2. 『目連尊者の問い』とその他パーリ語蔵外仏典との比較 39
3. 小結 40

第 3 章 地獄からの救済者 マーライ尊者と目連尊者
―『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料とその展開― 41
1. 「プラ・マーライ」文献群について 41
1. 1. タイプ 1 41
1. 2. タイプ 2 43
2. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』 45
2. 1. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』の先行研究 45
2. 2. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』の梗概 45
2. 3. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料に関する先行研究 48
2. 4. スリランカ所伝仏教説話集について 49
2. 5. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』と「チューラガッラの物語」 51

2. 5. 1. *Sah* 所収「チューラガッラの物語」の梗概 51
2. 5. 2.『マーレッヤデーヴァ長老物語』と
「チューラガッラの物語」との比較 52
2. 6. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』と「弥勒の物語」 53
2. 6. 1. *Sīh* 所収「弥勒の物語」の梗概 53
2. 6. 2. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』と「弥勒の物語」との比較 54
2. 7. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料 56
3. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』の展開 57
3. 1. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』 57
3. 2. 『マーレッヤデーヴァ長老物語註』 58
3. 3. 『プラ・マーライ・カム・ルアン』 60
3. 4. 『プラ・マーライ・クロン・スワット』 62
3. 5. 諸「プラ・マーライ」文献の引用関係 62
4. 目連尊者 64
4. 1. 目連尊者の地獄遍歴 64
4. 2. 目連尊者と餓鬼 64
4. 3. 目連救母伝説 66
4. 3. 1. 『仏説盂蘭盆経』 66
4. 3. 2. 『大目乾連冥間救母変文』 66
4. 3. 3. 盆踊唄正本『目連尊者地獄巡り』 67
4. 3. 4. 目連尊者による救済 67
4. 4. 『目連尊者の物語』 68
4. 5. 目連尊者とマーライ尊者 69
5. 小結 70

第 4 章 『マーレッヤデーヴァ長老物語註』について 72
1. 『マーレッヤデーヴァ長老物語註』における注釈 72
2. 『マーレッヤデーヴァ長老物語註』の成立年代 76
2. 1. 先行研究 76
2. 2. 『マーレッヤデーヴァ長老物語註』に引用される仏典名及び著者名 76
3. 小結 78

第 5 章　『スピナクマーラ前世物語』―出家による救済― 79
1.　『スピナクマーラ前世物語』 79
1. 1.　『スピナクマーラ前世物語』の梗概 79
1. 2.　『スピナクマーラ前世物語』の主題 80
2.　類似するタイトルの仏典 81
2. 1.　『夢による予言前世物語』 81
2. 2.　「パンニャーサ・ジャータカ」集所収『スピナ前世物語』 82
2. 3.　『サーマネーン・スピンの物語』 83
2. 4.　『スピナクマーラ前世物語』との関連 86
3.　『スピナクマーラ前世物語』と『目連尊者の物語』 87
4.　小結 88

結論 89

略号・訳号 92

参考文献 94

（別冊）

第 2 部　テキスト・翻訳篇

目次（第 2 部） ..... i-ii

はじめに 1
1.　貝葉写本 1
2.　コム文字 1
3.　ローマ字転写 2
4.　コム文字パーリ語の特徴 6
4. 1.　先行研究 6
4. 2.　特異なパーリ語の例 7
4. 3.　タイ文字のパーリ語 9
4. 4.　コム文字・タイ文字・タイ語からの影響 10
5.　校訂方針 11
5. 1.　既刊テキストの問題点 11

5. 2. 本論文の校訂方針 12
5. 3. 底本の選定 13
5. 4. 写本の校合 15
5. 5. 校訂案の提示 16
6. 翻訳方針 16
7. 写本情報 17
7. 1. 『ヴァッタングリ王物語』 18
7. 2. 『コーサラ国仏像縁起譚』 19
7. 3. 『目連尊者の問い』 20
7. 4. 『マーレッヤデーヴァ長老物語註』 21
7. 5. 『目連尊者の物語』 24
7. 6. 『スピナクマーラ前世物語』 24
8. 略号 25

テキスト・翻訳 27
1. *Vaṭṭaṅgulirājasuttavaṇṇanā* 28
『ヴァッタングリ王物語』 47
2. *Kosalabimbavaṇṇanā* 55
『コーサラ国仏像縁起譚』 77
3. *Moggallānabimbapañhāsutta* 89
『目連尊者の問い』 108
4. *Māleyyadevattheravatthu* with *Māleyyadevattheravatthudīpanīṭīkā* 118
『マーレッヤデーヴァ長老物語』・『マーレッヤデーヴァ長老物語註』 247
5. *Mahāmoggallānattheravatthu* 316
『目連尊者の物語』 321
6. *Supinakumārajātaka* 323
『スピナクマーラ前世物語』 333

序論

1.タイのパーリ語蔵外仏典研究

タイで信奉されている仏教は、上座部仏教（Theravāda, เถรวาท）である。この上座部仏教の文献学的研究は、西洋諸国がアジア諸国に進出し、植民地支配した時代に、西洋人が多くの仏教写本を収集し、19 世紀前半から西洋諸国で研究が進められた。1882 年以降はロンドンの The Pali Text Society（以下 PTS と略す）から組織的にパーリ三蔵やその注釈文献などの重要なパーリ語文献（ローマ字校訂テキスト）や英訳が出版されている。西洋での研究に影響を受け、日本での南方上座部仏教研究が開始され、漢訳仏典とパーリ三蔵との対応が精査され、大乗仏教へと展開する源流、釈尊の言葉を残す原始仏教として研究された。1935 年から 1941 年には三蔵などの重要なパーリ語仏典の和訳が『南伝大蔵経』として出版され、その後、パーリ三蔵やその注釈文献を中心とする文献学的研究が進められてきた。

スリランカや東南アジアに残る仏教写本は、スリランカではシンハラ文字、ミャンマーではビルマ文字というようにそれぞれの地域で異なる文字を用いてパーリ語を記してきたため、それらの文献を統一的に研究するため、欧米人や日本人研究者の多くは PTS から出版されたローマ字校訂テキストを用いている。一方、スリランカや東南アジアの上座部仏教国では、それぞれの地域の文字で書かれた三蔵やその注釈文献などの重要なパーリ語文献やその翻訳が出版され、僧侶らにより学習され伝持されている。

上座部仏教国ではパーリ三蔵やその注釈文献を重んじる一方、パーリ語や現地語の蔵外仏典を新たに創造し、伝承してきている。本論文において、「蔵外」と言及する場合には、パーリ三蔵だけではなく、パーリ三蔵の注釈文献や *Milindapañhā* などの古典的なパーリ語仏典を除く非古典的な仏典という意味で用いることとする。

タイにおいて、出家者は今もなお僧院や僧院大学においてパーリ語を学習し、パーリ三蔵に親しんでいるが、在家信者である一般民衆はいくつかのパーリ語の経文を諳んじることはできても、パーリ語文法や単語の意味の一々を理解しているのではない。一般民衆は、難解なパーリ三蔵よりも仏教の教えをわかりやすく説く仏教説話に親しんでいる。タイの一般民衆は、我々研究者がパーリ三蔵とそれ以外の仏典とを区別するように、蔵外仏典を「三蔵以外」の仏典と認識して受容しているのではなく、仏典はすべて ไตรปิฎก（trai pidok、三蔵）であり、彼らはその仏典が三蔵であるか否かに関わらず、等しい価値のあるものと捉えている。

タイに伝わる蔵外仏典を紹介したものとして、Saddhātissa［1974: 211-225］があるが、ここに挙げられる文献は、年代記や著者が明確な文献を中心としたものにすぎず、十分なリストではない。Saddhātissa［1974: 212］が、15 世紀・16 世紀北タイの都チェンマイで幾人かのパーリ語の学識者がいたのに対し、南の都アユタヤでは、ビルマに襲撃された際に写本が散逸した可能

性もあるが、パーリ語をタイ語に翻訳することのできる学識者がいただけで、この地域からの独自のパーリ語文献は我々には知られていない、と述べているように、タイ撰述の蔵外仏典の多くは、北タイの年代記の記述や伝承によりチェンマイを都としたラーンナー王国において製作されたと考えられている。しかし、現在のタイ領土内に現存する写本は、北タイの文字によるものだけではなく、コム文字、タイ文字などでも書写され伝承されている。確かに蔵外仏典のいくつかはチェンマイで創作されたものもあるであろうが、チェンマイにおいてすべてのパーリ語蔵外仏典が成立したとは考えられない。蔵外仏典チェンマイ起源説は、決して明確なものとは言えない。

東南アジアに伝わる蔵外仏典研究は、この地域を植民地支配したフランス人研究者が中心となり、「インドシナパーリ語」文献の研究を進めていたが、カンボジアの内戦などの影響により研究は以後縮小された。一方、日本では、蔵外仏典は釈尊の言葉を伝える原始仏教ではない、という考えから文献学の研究対象とされることは非常に少なく、長らく等閑視されてきた。

東南アジア撰述とされる蔵外仏典の中で唯一継続的に研究されてきたのは、「パンニャーサ・ジャータカ」集という釈尊の前世物語の集成である。Feer［1875］が、この「パンニャーサ・ジャータカ」集は、東南アジア独自のジャータカの集成があることを指摘したことに始まり、Finot［1917］においてその集成の内容が紹介され、そして、Jaini［1981, 1983, 1986］によってビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集の校訂テキストと英訳が PTS から刊行された。

日本における東南アジア蔵外仏典の文献学的研究の先駆けも「パンニャーサ・ジャータカ」集中の『スダナ・ジャータカ』に関する研究（田辺［1980: 930-925］）である。また、タイ王室寄贈のパーリ語貝葉写本を所蔵している大谷大学図書館は、1995 年に貝葉写本目録を出版し、大谷大学図書館所蔵写本のうち「パンニャーサ・ジャータカ」集について、東方研究会田辺和子博士と吉元信行教授を中心とする大谷大学とによって共同研究が進められた。その研究成果として、2004 年には、大谷大学図書館写本に基づく「パンニャーサ・ジャータカ」集の第 12 話から第 18 話、第 22 話から第 39 話の 25 話の物語のローマ字転写テキスト（Otani University［2004］）が出版された。その後も「パンニャーサ・ジャータカ」集研究は断続的に進められ、近年では、Otani University［2004］に収められていない「パンニャーサ・ジャータカ」集の第 19 ~ 21 話、第 7・46・47 話のローマ字校訂テキストと和訳が畝部［2008a, 2012］に報告されている。

「パンニャーサ・ジャータカ」集を除くと、PTS から出版されたタイに伝わる蔵外の仏教説話の校訂テキストは、*Paṭhamasambodhi* という蔵外の仏伝（Cœdès［2003］）や PTS の雑誌に掲載された *Braḥ Māleyyadevattheravatthu*（Collins［1993: 1-96］）など極僅かである。

また、蔵外パーリ語仏典の一部は、現地文字の校訂テキストとして出版されていることもある。しかし、これらは希少文献であり、入手困難なものが多い。また、これら現地で出版されたテキストは、いかなる写本に基づく校訂テキストであるのか、どのような校訂方針のもとで

校訂を加えたのかが、明記されていないこともしばしばあり、一次文献として使用するのが困難な場合が多いのが実情である。

近年に至って、パーリ語蔵外仏典の有用なカタログとしてタイ国立図書館所蔵写本カタログをベースに、欧米の図書館のカタログや近年の研究書などの情報を付加し、タイに伝わるの三蔵とパーリ語蔵外仏典のほぼすべての情報を網羅している Skilling＆Santi Pakdeekham［2002, 2004］が出版された。これらのカタログにより、中部タイにどのような仏典の写本が伝承されていたのか、また、それらの仏典の研究の進捗状況が明らかとなった。さらに、上述のカタログ出版以後、The Fragile Palm Leaves Foundation からいくつかのタイのパーリ語蔵外仏典のローマ字校訂テキストが出版され[1]、タイのパーリ語蔵外仏典の重要性、研究価値が一部の研究者によって指摘され始めている。

また、校訂テキストによる資料の共有化ではなく、写本資料そのものを共有できる環境を整えようという試みがラオスでなされている。ラオス国立図書館が所蔵する写本は、web 上（http://www.laomanuscripts.net/en/index）に公開され、我々はそれらを共有できるようになっている。一方、タイ国立図書館は何万もの写本を所蔵しているが、ラオスのようにそれらを web 公開するという動きは皆無であり、むしろ、2007 年に制定された The National Research Council of Thailand (以下 NRCT とする)の規約により、タイ国内において外国人が研究調査を行うには、NRCT から研究許可を取得しなければならないのが現状であり、タイ国立図書館は、外国人による研究調査には閉鎖的である。また、タイ国立図書館の写本情報はコンピュータデータ化すらされておらず、未だ目録カードを用いた運営であり、写本の写真撮影なども禁じられている。

タイのパーリ語蔵外仏典研究は、近年に至り数人の研究者によって積極的に研究され始めているが、既刊のローマ字校訂テキストは極僅かであり、さらに、タイ国内での写本調査も困難が多く、研究を遂行するのに十分な環境ではない。

2.研究対象

本論文で研究対象とする蔵外仏典は、タイに伝わるものの中でもコム文字（古代カンボジア文字）と呼ばれる文字で書写された中部タイに伝わるパーリ語蔵外仏典である。コム文字で書写されているからといって、その仏典が中部タイで成立したと考えることはできないが、少なくともコム文字を用いて書写していた地域に伝承されていたことは明らかである。従来の研究、特に日本におけるタイの蔵外仏典研究は、田辺博士将来写本と大谷大学図書館所蔵写本に基づき進められた研究であるため「パンニャーサ・ジャータカ」集の研究に留まっていた。本研究

[1] Santi Pakdeekham［2009］・Cicuzza［2011］・Kieffer-Pülz［2011］.

では、タイ国立図書館での写本調査を実施し、新たなパーリ語蔵外仏典も研究対象とした[2]。タイ国立図書館では、仏像と地獄救済に言及する 5 話の蔵外仏典の写本を調査した。それらは、『コーサラ国仏像縁起譚』(*Kosalabimbavaṇṇanā*)、『目連尊者の問い』（*Moggallānabimbapañhāsutta*）、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』（*Māleyyadevattheravatthudīpanīṭīkā*）、『目連尊者の物語』（*Mahāmoggallānattheravatthu*）、『スピナクマーラ前世物語』（*Supinakumārajātaka*）である。本論文ではこれらに田辺博士の将来写本による「パンニャーサ・ジャータカ」集所収『ヴァッタングリ王物語』(*Vaṭṭaṅgulirājasuttavaṇṇanā*) を加えた 6 話のローマ字校訂テキストと和訳を提示する。『マーレッヤデーヴァ長老物語註』と『ヴァッタングリ王物語』の 2 話は、タイ文字校訂テキストが修士論文としてタイの僧院大学であるマハーチュラロンコン大学に提出されているが[3]、これら 6 話のローマ字校訂テキストはいずれも出版されていない。また、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』と『ヴァッタングリ王物語』の 2 話はタイ語訳が出版されているが[4]、英訳および和訳は出版されていない。

本論文で研究対象とする上に挙げた諸文献は、仏像と地獄救済に言及するものである。これらの題材は、仏教文化上、上座部仏教圏はもちろん、汎仏教的に見ても非常に重要な位置を占めるものであるにも関わらず、パーリ三蔵では説かれることがない。したがって、上座部仏教圏において文献上どのように扱われたのかを確かめるためには、蔵外仏典の研究が不可欠なのである。

現在、上座部仏教国でも大乗仏教国でも、仏像を造ることや仏像を供養することは積徳業とされている。仏像のなかった時代の初期仏教では、造像を奨励も否定もせず、全く仏像に言及していないが、タイにおいて上座部仏教が受容されたのは、既に仏像が造られ信仰されていた時代である。仏教の教えとともに仏像ももたらされていたのであるから、造像や像供養が釈尊によって認められた善業であると記された仏典が伝承されていても不思議なことではない。しかし、パーリ三蔵に言及されないことから、上座部仏教では仏像起源伝説は説かれないという結論がなされてきた[5]。

また、輪廻転生という仏教の教えを機能させるために、地獄は重要な役割を担っている。地獄での責苦が激しく厳しいものであればあるほど、地獄へ堕ちることの恐怖をうながし、悪業をなさないように、善業を積むよう促す。タイの寺院では地獄の様子が描かれており、地獄が

---

[2] 平成 22 年 3 月から 1 年間、優秀若手研究者海外派遣事業（日本学術振興会）によりチュラロンコン大学（バンコク）において客員研究員として研究に従事した。その折、NRCT より研究許可を得て、タイ国立図書館の写本調査を実施した（Project ID: 2010/027）。快く研究協力を引き受けてくださいました Dr. Suchitra Chongstitvatana (Chulalongkorn University)、写本調査にご協力頂いたタイ国立図書館の司書の方々に深謝申し上げます。

[3] Phannava［2006: 93-150］、Khamkamon［2003: 201-217］。

[4] Phannava［2006: 151-205］・Mi Chuthong［1973］、Sinlapabannakhan［2006: 287-304］。

[5] 高田［1983(1967): 9］

いかに苦しく辛い境涯なのかを、生々しく描写し、見る者に地獄がどんなに恐ろしいところなのかを如実に知らせている。律蔵などにおいて、どのような悪業によって、どのような地獄へ堕ちるのかが言及されるが、地獄に堕ちてしまった者を他者が救済する方法はパーリ三蔵では説かれない。一方大乗仏教では、地獄救済の役割を担う地蔵菩薩の存在が想起されるであろう。タイの蔵外仏典では、地蔵菩薩とは異なる、独自の救済方法を説いているのである。

3.研究目的

Skilling＆Santi Pakdeekham［2002, 2004］に提示されているように、タイには膨大な量の蔵外仏典写本が伝承されている。これらの蔵外仏典がいつどこで成立したのかはわからないが、写本が残されていることから、実際にタイに伝承されていたのは事実である。しかし、これらの蔵外仏典のほとんどは、ただ写本として伝えられているにすぎず、いかなる教えを伝えるものであるのか現在では知られていない。頼ることのできる既刊テキストがない限り、ここに説かれる教えを知るには、写本を読み解く以外に術はないのである。これらの蔵外仏典には、一体どのような教えが記されているのだろうか。膨大な量の蔵外仏典の一端にすぎないが、本論文において、タイ国立図書館所蔵写本による統一された方針のもとで作成された校訂テキストと全訳を提示し、全容を解明する。

パーリ三蔵が、結集により微動だにしない揺るぎない存在であるのに対し、蔵外仏典は、仏教が受容されていく中で、創造され、変化を受け入れてきたものである。蔵外仏典は何を源泉に、どのように展開してきたのだろうか。パーリ三蔵から源泉資料を切り出し、加筆増広したのだろうか。あるいは、正典であるパーリ三蔵には手を加えず、タイの土着の説話を源泉資料とし、パーリ三蔵の知識に基づき加筆増広したことによって、蔵外「仏」典としたのだろうか。中国から到来した華僑の信仰する大乗仏教の影響を受けた蔵外仏典なのだろうか。本論文では、仏像と地獄救済に関する 2 つの蔵外仏典の源泉資料と展開を明らかにする。

4.本研究の意義

本論文で取りあげる蔵外仏典は、タイ人研究者によって研究がなされている一部のテキストを除くと、これまで全く文献学研究の対象とされていないテキストである。これらのテキストの研究を通して、蔵外仏典だからこそ説かれる仏像と地獄救済についてタイ仏教の理解を明らかにする。また、綿密な文献学的研究により、これらのパーリ語蔵外仏典が「タイで創造された偽経」ではなく、スリランカに伝わる現地語の説話から発展した物語であったり、非常に重要で希少な伝承を残す仏典であることを示す。パーリ三蔵、サンスクリット文献、漢訳文献など諸言語で伝承された説話の比較研究において、パーリ三蔵に言及されていないために上座部仏教には伝承されていないと結論付けられていた説話が、タイの蔵外仏典の説話として伝承さ

れていることが明らかとなり、仏教説話のさらなる広がりを明示することができると考える。タイの蔵外仏典の説話は、難解な教義を説く三蔵とは異なり、タイの上座部仏教徒、特に一般民衆の信仰を促す役割を果たしてきたものである。これらの蔵外仏典は、儀礼で読誦されたり、寺院壁画などに描かれたり、タイの一般民衆にも身近な仏典である。文献学的研究がなされてこなかった蔵外仏典の説話が明らかになれば、民衆がどのように仏教を理解しているのか、僧伽が民衆にどのように仏教を理解させようとしたのか、民衆にとっての上座部仏教を明らかにする手がかりとなると考える。また、蔵外仏典が既刊テキストの知識では網羅しきれないほどに他の蔵外仏典から影響を受けて成立しており、蔵外仏典の成立を明らかにするにはその他の蔵外仏典の研究の進展も不可欠であり、新たなテキストに着手することの必要性が明瞭となる。本研究により、蔵外仏典にだからこそあらわれ得た非常に興味深い思想を伝える重要な文献が多く伝えられていることが認知され、これまでの蔵外仏典を等閑視する考えを一掃し、蔵外仏典研究の重要性を示し得ると考える。

5.本論文の構成

本論文は、第 1 部 研究篇、第 2 部 テキスト・翻訳篇の 2 部構成である。

第 1 部 研究篇 第 1・2 章では、仏像に関する仏典について論じる。上座部仏教徒にとって仏像は欠かせない信仰の対象である。しかしながら、彼らの保持するパーリ三蔵で造像や像供養が言及されることはない。一方、法顕や玄奘の見聞録や漢訳仏典では、仏の姿を偶像化することは、釈尊自身によって認められ、釈尊の時代の波斯匿王（コーサラのパセーナディ王）、あるいは、優填王（コーサンビーのウデーナ王）によって最初の仏像が造られたという仏像起源伝説を伝え、造像・像供養は功徳ある行いであると説く仏典が伝承されている。これら仏像の起源や造像・像供養を説く仏典は、上座部仏教には伝えられていない、と考えられてきた。

第 1 章では、タイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集第 20 話『ヴァッタングリ王物語』の源泉資料とその展開を明らかにするため、スリランカ・ビルマに伝わる仏像起源伝説に言及するパーリ語蔵外仏典の先行研究 Gombrich［1978］・Jaini［1983, 2001］に『コーサラ国仏像縁起譚』を新たに加え再考する。

第 2 章において、仏像起源伝説を説くパーリ語蔵外仏典に目連尊者と釈尊による造像と像供養の功徳に関する問答『目連尊者の問い』を加え、パーリ語蔵外仏典に説かれる造像と像供養について比較検討する。

第 1 部 研究篇 第 3・4・5 章では、地獄救済に言及する仏典について論じる。タイにおいても「善業善果、悪業悪果（ทำดีได้ดีทำชั่วได้ชั่ว）」という因果応報の教えが説かれ、悪趣へ堕ちないよう善業をなすよう教えられている。それでも、悪業をなし悪趣へ堕ちてしまう者たちがいる。悪趣へ堕ちた者たちを他者が救済することはできるのだろうか。パーリ三蔵では、布施の際、

亡き親族や縁者が享受するよう施したとしても、享受できるのは餓鬼だけであると説いているが、タイでは、パーリ三蔵に根拠を持たない様々な独自の地獄救済方法を説いている。

第 3 章では、地獄からの救済を助ける役目を担う「プラ・マーライ（マーライ尊者）」と呼ばれる長老にまつわる説話に言及する。マーライ尊者は、しばしば寺院壁画に地獄を遍歴する姿で描かれる僧侶である。パーリ語やタイ語などで様々に伝承されるマーライ尊者にまつわる諸「プラ・マーライ」文献のうちパーリ語の『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料について先行研究 Denis［1965］・Collins［1993］・Brereton［1995］に基づき再考し、諸「プラ・マーライ」文献の地獄救済の場面を取り上げ、目連尊者による地獄救済を説く『目連尊者の物語』を提示し、諸「プラ・マーライ」文献の展開について論じる。

第 4 章では、諸「プラ・マーライ」文献のうちパーリ語で書かれた『マーレッヤデーヴァ長老物語』の注釈文献『マーレッヤデーヴァ長老物語註』が、どのような語句に対して、どのような文献を典拠にし、注釈しているのかを明らかにする。さらに、その成立年代を再考する。

第 5 章において、沙弥となったことにより地獄から母を救済し、比丘となったことにより、餓鬼界から父を救う物語『スピナクマーラ前世物語』の関連文献を探る。

第 2 部 テキスト・翻訳篇では、コム文字などについて解説し、凡例に代えて校訂方針と翻訳方針を明示し、先述した 6 話の蔵外仏典のローマ字校訂テキストと和訳を提示する。

第 1 章
パーリ語蔵外仏典の仏像起源伝説
―タイ版『ヴァッタングリ王物語』の源泉資料とその展開―

仏像起源伝説と言えば、コーサンビーのウデーナ王（優填王）が釈尊を思慕して初めて仏像を製作したという伝説が広く知られている。漢訳仏典には、ウデーナ王だけでなくコーサラ国のパセーナディ王（波斯匿王）に仏像の起源を帰する伝説も説かれている。これらの仏像起源伝説について、高田［1983 (1967): 9］は、「北伝、それも大部分は漢訳仏典に見出されるもので、南伝の全然説かないところであるのに注意したい」と述べている。このように、仏像起源伝説は南伝上座部仏教には説かれないとされてきた。仏像は大乗仏教国においてのみ崇拝されているのではなく、スリランカやタイなど上座部仏教国でも仏像が造られ、崇拝の対象となっている。高田［1983 (1967): 9］が指摘した如く仏像起源伝説は上座部仏教国には伝承されていないのであろうか。

本章では、漢訳仏典に説かれる仏像起源伝説を踏まえ、仏像起源伝説に言及するパーリ語蔵外仏典の先行研究として、継続的に研究がなされてきた唯一のパーリ語蔵外仏典「パンニャーサ・ジャータカ」集に収められているタイの *Vaṭṭaṅgulirājasuttavaṇṇanā*（以下、訳号：タイ版『ヴァッタングリ王物語』、略号：*T-Vrsv* とする）、ビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集所収の物語（Jaini［1983: 414-432］）、スリランカに伝わる仏典（Gombrich［1978］）に言及する。さらに、*Kosalabimbavaṇṇanā*（以下、訳号：タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』、略号：*T-Kbv*）という新たなテキストを提示し、タイ版『ヴァッタングリ王物語』の源泉資料と展開を再考する[1]。

1.仏像起源伝説に言及する漢訳仏典

漢訳仏典において仏像起源伝説が言及される場合、コーサンビー国のウデーナ王一人に帰する伝説、ウデーナ王が造像し、さらにそれに倣ってコーサラ国パセーナディ王が造像したという伝説、コーサラ国パセーナディ王一人に帰する伝説の 3 つに大別される。以下、高田[1983: 9-19]・中村[1995: 425-433]・畝部[2008b: 10]に基づき漢訳仏典に言及される仏像起源伝説について見る。

[1] 本論文において類似する偈文を比較する場合、パーリ語テキストは校訂を加えず、それぞれの底本に従う。また翻訳も載せない。校訂および翻訳については、本論文第 2 部テキスト・翻訳篇を参照されたい。

1.1.ウデーナ王に帰する伝説

最も広く知られている仏像起源伝説が、コーサンビー国のウデーナ王に帰するものである。以下に『大方便佛報恩経』巻第 3 の記述を挙げる。

> 爾時如來爲母摩耶夫人并諸天衆。説法九十日。閻浮提中亦九十日。不知如來所在。大目揵連神力第一。盡其神力。於十方推求。亦復不知。阿那律陀天眼第一。遍觀十方三千大千世界。亦復不見。乃至五百大弟子。不見如來。心懷憂惱。優填大王戀慕如來。心懷愁毒。即以牛頭栴檀。摽像如來所有色身。禮事供養。如佛在時無有異也[2]

釈尊が母に説法をするために三十三天へ昇っている間に、釈尊を思慕したウデーナ王（優填王）が牛頭栴檀で造像したことを簡潔に記している。また、『観佛三昧海経』巻第 6 でもウデーナ王が造像したことに言及しているが、ここではその仏像は金製であり、金像を象に載せて釈尊を迎えたことが記されている。仏像の起源を説く独立した仏典として知られる『作仏形像経』・『造像形像福報経』・『大乗造像功徳経』においても、その起源はウデーナ王に帰せられている。これらのうち『作佛形像経』と『造立形像福報経』は、釈尊が母に説法しに三十三天へ昇っているという出来事に関連させずに説いている。また、『廣弘明集』巻第 15 では、梁の武帝が郝騫らを派遣して祇桓寺から将来させたのはウデーナ王が最初に造った像の模像であったと言及されている。

1.2.ウデーナ王とパセーナディ王に帰する伝説

ウデーナ王が最初に造像し、それに倣ってコーサラ国パセーナディ王が造像するという伝説を伝えているものもある。以下に『大唐西域記』の記述を挙げる。

『大唐西域記』巻第 5 憍賞彌國（コーサンビー）

> 城内故宮中有大精舍。高六十餘尺。有刻檀佛像。上懸石蓋。鄔陀衍那王（唐言出愛。舊云優塡王訛也）之所作也。靈相間起。神光時照。諸國君王恃力欲擧。雖多人衆莫能轉移。遂圖供養。俱言得眞。語其源迹卽此像也。初如來成正覺已。上昇天宮爲母説法。三月不還。其王思慕願圖形像。乃請尊者没特伽羅子。以神通力接工人上天宮。親觀妙相雕刻栴檀。如來自天宮還也。刻檀之像起迎世尊。世尊慰曰。

[2] 『大正』No. 156, 136b.

教化勞耶。開導末世寔此爲冀。[3]

『大唐西域記』巻第 6 室羅伐悉底國（サーヴァッティー）

中有佛像昔者如來昇三十三天爲母説法之後。勝軍王聞出愛王刻檀像佛乃造此像。[4]

『大唐西域記』巻第 5 では、釈尊が母に説法するために天界へ昇っている間に、釈尊を思慕したコーサンビー国のウデーナ王（憍賞彌國の鄔陀衍那王）が栴檀製の仏像を造らせ、釈尊の帰りを迎えた、と記され、さらに巻第 6 では、サーヴァッティーのパセーナディ王（室羅伐悉底國の勝軍王）がウデーナ王が造像したことを聞き、仏像を造るに至った、という見聞を記している。同様の記述を見出せるのは、『増一阿含経』巻第 28・『三宝感應要略録』巻之上であり、この両テキストでは、パセーナディ王が造った像は紫磨金製であると記されている。

1.3.パセーナディ王に帰する伝説

仏像の起源をコーサラ国のパセーナディ王だけに帰する代表的な漢訳仏典は『高僧法顕伝』である。以下に『高僧法顕伝』の記述を挙げる。

佛上忉利天爲母説法九十日。波斯匿王思見佛卽刻牛頭栴檀作佛像置佛坐。處佛後還入精舍像卽避出迎佛。佛言。還坐。吾般泥洹後可爲四部衆作法式。像卽還坐。此像最是衆像之始。後人所法者也。佛於是移住南邊小精舍。與像異處。相去二十歩[5]

釈尊が母へ説法するために天界へ昇っている間に、パセーナディ王（波斯匿王）が釈尊を思慕して牛頭栴檀製の仏像を造り、釈尊が天界から帰るのを出迎えた、と記されている。『高僧法顕伝』以外にもパセーナディ王の造像に言及する漢訳仏典としては、『大寶積經』巻第 89・『出外國圖記』を出典とした『經律異相巻』第 6 がある。『大寶積經』巻第 89 では、パセーナディ王の造像の功徳について迦葉と釈尊とが問答しているが、先述した『高僧法顕伝』のように釈尊が母を説法するために三十三天へ昇っている間に、釈尊を思慕して仏像を造ったということには言及していない。

---

[3] 『大正』No. 2087, 898a.
[4] 『大正』No. 2087, 899b.
[5] 『大正』No. 2085, 860b.

1.4.漢訳仏典の仏像起源伝説

漢訳仏典に見られる仏像起源伝説をまとめると以下の表のようになる。

造像の王	出典	昇三十三天為母説法の言及
ウデーナ王	『大方便佛報恩経』巻第 3（No. 156, 136b.）	○
	『観佛三昧海経』巻第 6（No. 643, 677a-678b.）	○
	『作佛形像経』（No. 692, 788a-c.）	×
	『造立形像福報経』（No. 693, 788c-790a.）	×
	『大乗造像功徳経』巻上（No. 694, 790a-791b.）	○
	『廣弘明集』巻第 15（No. 2103, 202b）	×
ウデーナ王 パセーナディ王	『増一阿含経』巻第 28（No. 125, 705b-706a.）	○
	『三宝感應要略録』巻之上（No. 2084, 827a-c.）	○
	『大唐西域記』巻第 5（No. 2087, 898a.）	○
	巻第 6（No. 2087, 899b.）	○
パセーナディ王	『大寶積經』巻第 89（No. 310, 512b.）	×
	『高僧法顕伝』（No. 2085, 860b.）	○
	『外国圖記』を出典とした『經律異相』巻第 6（No. 2121, 30a.）	○

仏像起源伝説に言及する漢訳仏典の中で、ウデーナ王に帰するものが多数派で、パセーナディ王に帰する伝説が少数派であり、多くの場合昇三十三天為母説法の伝説に関連させて説かれていることがわかる。

2.仏像起源伝説に言及するパーリ語蔵外仏典

以下、仏像起源伝説を説くパーリ語蔵外仏典として、東南アジアにのみ伝わるジャータカの集成「パンニャーサ・ジャータカ」集に収められる諸『ヴァッタングリ王物語』、さらに、スリランカに伝わる『コーサラ国仏像縁起譚』について先行研究に基づき言及する。

2.1.「パンニャーサ・ジャータカ」集

「パンニャーサ・ジャータカ」集とは、東南アジアにのみ伝わるジャータカの集成である。パーリ語、ニッサヤ形式（地方語とパーリ語）、地方語の様々な文字と言語で伝承されている。「パンニャーサ・ジャータカ」集は、三蔵のジャータカのように偈文のみの集成は存在せず、偈文と散文からなる集成であり、偈文それ自体が物語を構成していることもある。現存する「パ

ンニャーサ・ジャータカ」集は、一つとして同じ集成がなく、物語の数もその順序も異なってる。主なパーリ語の「パンニャーサ・ジャータカ」集としては、タイに伝わる集成とビルマに伝わる集成が知られている。次にタイとビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集についてみる。

2.1.1.タイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集

タイに伝わる集成は、それぞれの集成によって所収の物語やその順序が異なり、スキリング［2004: 31］が、「完全なセット」とはいかなるものであるかについては、全く不明なのである、と述べているように、タイに伝わる集成は確定されておらず、いくつかの物語に対する文献学的研究はなされているが、集成全体を扱うことが困難なテキストである。本論文において、タイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集と言及する場合には、便宜的に以下に記すタイ国立図書館から出版された 61 話からなるタイ語訳の集成を指すこととする。このタイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集は、田辺［1981］ら日本人研究者により先駆的に研究され、いくつかの物語の校訂テキストや翻訳が出版されている。これらの研究は、田辺博士により将来された国立図書館所蔵写本及び大谷大学所蔵写本に基づく研究である。

以下にタイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集の主なテキストと翻訳を挙げる。

・*Panyasachadok*, 2 vols., Bangkok: Sinlapabannakhan, 2006 (1956).

1923 年タイ国立図書館がダムロン王子の指揮の下 28 分冊で出版したタイ語訳が 1956 年 2 冊本で再版された。「前分（pathom phak）」は 50 話（第 48 話までが第 1 巻に収録）、「後分（pacchima phak）」は 11 話と付加的な短い物語 3 話から成り、章分けされていない。いくつかの寺院に収められていた写本を合わせて編集したものである。ダムロン王子はこの集成の成立年代を仏暦 2000 から 2200 年（西暦 1457 から 1657 年）としている。

このタイ語訳では、偈文の多くがパーリ語でも表記されているが、非常に乱れた難解な偈文については削除されていることもある。

・*Paññāsajātaka*, 5 vols., Ganthamālā 10, Phnom Penh: Éditions de l'Institut Bouddhique, 1953-1962.

プノンペンの仏教学研究所により 1953 年から 1962 年にかけて 25 話が 5 分冊で出版された。カンボジアのチュリエン文字の校訂テキストである。

・ タイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集 全 61 話のタイ文字校訂テキストが 2003 年から 2005 年にかけて 7 名の学生によりタイの僧院大学マハーチュラロンコン大学に修士論文として提出されている。

"Panyasachadok ruangthi 1-7: kantruatchamra laesuksachoengwikhro", edited by Klomklang (Phramaha Mana Muniwangso), Bangkok: Master's Thesis, Mahachulalongkorn University,

2004.

前分の第 1 話から第 7 話までの校訂テキスト。

“Panyasachadok ruangthi 8-27: kantruatchamra laesuksachoengwikhro”, edited by Khamkamon (Phramaha Thanin Aathitwaro), Bangkok: Master’s Thesis, Mahachulalongkorn University, 2003.

前分の第 8 話から第 27 話までの校訂テキスト。

“Panyasachadok pathomphak ruangthi 28-44: kantruatchamra laesuksachoengwikhro”, edited by Thongpan (Phramaha Prasit Ahingsako), Bangkok: Master’s Thesis, Mahachulalongkorn University, 2004.

前分の第 28 話から第 44 話までの校訂テキスト。

“Panyasachadok pathomphak ruangthi 45-50: kantruatchamra laesuksachoengwikhro”, edited by Triphongsin (Phramaha Prasanchai Thewangkaro), Bangkok: Master’s Thesis, Mahachulalongkorn University, 2004.

前分の第 45 話から第 50 話までの校訂テキスト。

“Pannyasachadok pacchimaphak ruangthi 1-4: kantruatchamra laesuksachoengwikhro”, edited by Keawsai (Phramaha Akhom Samaneeko), Bangkok: Master’s Thesis, Mahachulalongkorn University, 2005.

後分の第 1 話から第 4 話までの校訂テキスト。

“Pannyasachadok pacchimaphak ruangthi 5-8: kantruatchamra laesuksachoengwikhro”, edited by Chalao Techawanto Tathongduang (Phramethi Sutaphorn), Bangkok: Master’s Thesis, Mahachulalongkorn University, 2004.

後分の第 5 話から第 8 話までの校訂テキスト。

“Pannyasachadok pacchimaphak ruangthi 9-11: kantruatchamra laesuksachoengwikhro”, edited by Buachukan (Phramaha Caran Uttmathammo), Bangkok: Master’s Thesis, Mahachulalongkorn University, 2003.

後分の第 9 話から第 11 話までの校訂テキスト。

- *Paññāsajātaka: Thai Recension Nos. 12-18, 22-39 kept in the Otani University Library Transliteration from Manuscripts in Khumer Script*, Kyoto: Pāli Manuscripts Research Project, Shin Buddhist Comprehensive Research Institute, Otani University, 2004.

  大谷大学図書館に所蔵されている写本（第 12 ~ 18 話、第 22 ~ 39 話）に基づくローマ字転写。

- “Three Stories From the Thai Recension of the Paññāsa-jātaka: Transliteration and Preliminary Notes”, by Toshiya Unebe in Collaboration with Yoshitaka Hayakawa, Mikiasa Ishino, Toshiki Maruyama, Satoko Yamamoto and Xia Zhou, in *Journal of the Scool of Letters, Nagoya*

University 3 (2007): 1-23.

上記、大谷大学図書館所蔵写本に基づくローマ字転写で欠けていた第 19 話から第 21 話のローマ字転写。

2.1.2.ビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集

ビルマには 10 話ずつ 5 つの章からなる 50 話のパーリ語の「パンニャーサ・ジャータカ」集が伝わっている。章立てされ 50 話からなるのは、ビルマの集成のみである。この集成は、ビルマでは『チェンマイ・ジャータカ』（*Zimmè Paṇṇāsa*）という名で知られている。しかしながら、スキリング［2004: 43］が、チェンマイ起源だという伝承には何か真実が含まれているのであろうか？その可能性はあるが、証明は不可能である、と述べているように実際にチェンマイ起源であるか否かは、明らかではない。Jaini［2001: 333］は、この集成の成立年代を 13 あるいは 14 世紀としている。

以下にビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集の主なテキストと翻訳を挙げる。

・ *Zimmè Paṇṇāsa*, Rangoon: the Hanthawaddy Press, 1911.

ラングーンのハンタワッディー出版社から 1911 年に出版されたビルマ文字による刊本（以下、ハンタワッディー版とする）[6]。このハンタワッディー版には編集者や使用した写本についての情報は記されていない。

・*Paññāsa-Jātaka or Zimme Paṇṇāsa*, vol. 1, vol. 2, edited by Padmanabh S. Jaini, London: The Pali Text Society, 1981/1983.

上記ハンタワッディー版とモーニュウェー（Monywa）のジェータウン（Zetawun／Jetavana）のジェータウン僧院で発見された完全な写本とによるローマ字校訂テキスト（以下、PTS 版とする）。

・ *Apocryphal Birth-Stories (Paññāsa-Jātaka)*, vol. 1, by I. B. Horner and Padmanabh S. Jaini, London: The Pāli Text Society, 1985.

Apocryphal Birth-Stories (Paññāsa-Jātaka), vol. 2, by Padmanabh S. Jaini, London: The Pāli Text Society, 1986.

上記 PTS 版の英訳。

・*Chiang Mai Chadok*, 2 vols., Bangkok: Fine Arts Department, 1997.

上記ハンタワッディー版のタイ語訳。

[6] 筆者未見。

2.2.タイ版『ヴァッタングリ王物語』

タイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集の第 20 話に *Vaṭṭaṅgulirājasuttavaṇṇanā* という物語が収められている。このテキストについては、カンボジアのチュリエン文字の校訂テキスト Éditions de l'Institut Bouddhique［1958: 38-50］、タイ文字の校訂テキスト Khamkamon［2003: 201-217］があり、翻訳としてはダムロン王子監修によるタイ語訳（Sinlapabannakhan［2006: 287-304］）がある。また、ローマ字転写（Unebe et al.［2007: 16-23］）は出版されているが、ローマ字校訂テキストは、本論文第 2 部で示すテキストの元になった筆者によるものが畝部［2008a: 52-62］に収められている。本論文でタイ版『ヴァッタングリ王物語』に言及する場合は、本論文に収録した *Vaṭṭaṅgulirājasuttavaṇṇanā* を底本とする[7]。

このテキストは、'evaṃ me sutaṃ'という経典の冒頭に見られる句で物語が始まり、22 偈を含み、大部分は散文で構成されている。

2.2.1.タイ版『ヴァッタングリ王物語』の梗概[8]

【仏像起源伝説】

① 釈尊の不在時にコーサラ国のパセーナディ王はジェータヴァナを訪れ、釈尊に会えず落胆して都へ帰り、仏像を造りたいと考えた。

② 王は翌日ジェータヴァナを訪れ、釈尊に仏像を造りたいと懇願すると、釈尊は承諾した。

③ 王は都へ帰り、栴檀で仏像を造らせ、祠堂の中の獅子座に座らせた。再びジェータヴァナを訪れた王は、釈尊が仏像を見たなら輝くだろう、と告げた。

④ 釈尊が仏像に近づくと、仏像は釈尊が存命の時に高座に座ることはふさわしくないと考え獅子座から下りようとした。釈尊はそれを遮り、仏像は獅子座に座り直した。パセーナディ王が造像の果報を釈尊に尋ねると、釈尊は何製であっても仏像を造れば偉大な果報が得られる、と答え、過去に仏像の指を修復したボーディサッタが閻浮提唯一の王となり、その後一切知性を得たことについて語り始める。

【前世物語 1（仏像の指を修復した商人）】

⑤ クラバッダクマーラという名の商人は折れた仏像の指を見つけ、修復し、覚者となることを願い、死後天界に再生した。

【前世物語 2（ヴァッタングリ王）】

---

[7] 『ヴァッタングリ王物語』については Yamamoto［2008］・山本［2008］においてテキスト及び翻訳を報告している。本論文では、校訂・翻訳方針を改め、本論文第 2 部テキスト・翻訳篇 pp. 28-54 に収録した。

[8] 本論文第 1 章で梗概に言及する際、便宜上すべてタイ版『ヴァッタングリ王物語』で付した段落番号に従う。

⑥ その後バーラーナシーの王の息子ヴァッタングリ(Vaṭṭaṅguli)として生まれ、父の死後、法に基づき統治していた。

⑦ ヴァッタングリ王の評判を聞きつけた閻浮提の百人の王が宣戦布告してくると、大臣が王の代わりに戦うことを進言した。しかし、王は大臣の言葉を退け、一本の指で敵を追払うと明言した。

⑧ 敵軍はヴァッタングリ王が応戦しに来たことを知り進み出たが、ヴァッタングリ王の一本の指で、敵軍はそれぞれの乗り物から落ち、逃げ回り、敵はみな屈服し、ヴァッタングリ王に仕えた。

⑨ヴァッタングリ王の行いを知った帝釈天が天界から下り、前世での善業を問うと、ヴァッタングリ王が前世で仏像の指を修復したことにより現世の勝利があり、来世では覚者となるだろう、とヴァッタングリ王が答えた。すると、帝釈天は、ヴァッタングリ王が来世で覚者となる、という授記を与え天界に帰還した。

【釈尊による説法】

⑩釈尊が造像の果報を説き、前世物語を現在時に結び付けた。

2.3.ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』

ビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集の第 37 話に *Vaṭṭaṅgulirāja–jātaka*（以下、訳号：ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』、略号：*Zp-Vrj* とする）という物語が収められている。このテキストについては、Jaini によるローマ字校訂テキスト（Jaini［1983: 414-432］）及び英訳（Jaini［1986: 103-121］）があり、タイ語訳（Fine Arts Department［1997: 406-432］）も出版されている。

第 1 偈の最初の部分をテキストの冒頭に据えるというジャータカ形式が採られ、203 偈を含み、偈文自体が物語を構成している。

2.3.1.ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』の梗概

【仏像起源伝説（前半）】

①コーサラ国パセーナディ王は、釈尊の不在時にジェータヴァナを訪れ、釈尊に会えず落胆して都へ帰った。

②–1 パセーナディ王は、翌日ジェータヴァナを再訪し、釈尊に仏像を造る許可を請うと、釈尊はそれを承諾し、昔仏像の指を修復して幸福を得た人について語り始める。

【前世物語 1（仏像を修復した商人）】

⑤アングリという名の都にバンダマーナヴァという名の商人がいた。バンダマーナヴァは商いのために航海に出て、ある島で壊れた仏像の指を修復し、一切智仏となることを願った。

その後、バンダマーナヴァは、寿命を全うし、天界に再生した。

【前世物語 2（ヴァッタングリ王）】

⑥その後、バーラーナシーのアンガ王の息子ヴァッタングリクマーラ（Vaṭṭaṅgulikumāra）として生まれ、アンガ王の死後、法に基づき統治した。

⑦ヴァッタングリ王は閻浮提の百人の王に使者を送り、贈り物や娘を献上するよう告げた。百人の王はヴァッタングリ王の言葉に激怒し、軍隊を連れて戦を仕掛けて来た。ヴァッタングリ王が戦を受けて立とうとすると、大臣が、王の代わりに戦うことを進言するが、ヴァッタングリ王は自らが戦うと明言した。

⑧ヴァッタングリ王が一本の指を挙げると、敵軍は飛散し、逃げ回った。敵軍は屈服し、ヴァッタングリ王に仕えた。

⑨ヴァッタングリ王の威光によって帝釈天が天界から下り、王が前世でなした善業を尋ねた。王は、前世で仏像の指を修復したことにより、現世での勝利があり、来世には仏性を得るだろう、と語った。帝釈天は、ヴァッタングリ王が覚者となるだろう、という授記を与え、さらにボーディサッタである王が、仏像を造ることによって得られる果報を語り、それを聞いた帝釈天は天界へ帰還した。

【仏像起源伝説（後半）】

②–2 釈尊が仏像を造ることをパセーナディ王に許可し、仏像を造ることによって得られる偉大な果報を説いた。

③釈尊の説法を聞いてパセーナディ王は都へ帰り、栴檀で仏像を造らせ、祠堂を造らせ、その中の高座に座らせた。ジェータヴァナにいる釈尊のもとを訪れ、仏像を見てほしいと、釈尊に懇願した。

④釈尊が祠堂に入ると、仏像は釈尊を見て、高座に座ることはふさわしくないと考え、一歩を踏み出し釈尊を出迎えようとした。すると釈尊は、右手を差し出し、出迎えようとする仏像を遮った。

⑩釈尊が造像の果報を説くと、パセーナディ王は誓願をなした。それを聞いた釈尊は、パセーナディ王が覚者となるだろう、という授記を与え、前世物語を現在時に結び付けた。

2.3.2.ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』の先行研究

この物語について Jaini［1983: xxxii-xxxiii］は、スリランカの *Kosala-Bimba-Vaṇṇanā*（Gombrich［1978: 289-295］）とビルマ版『ヴァッタングリ王物語』が失われた共通する文学的源泉を持つのかもしれない、と指摘している。さらに、Jaini［2001: 335］において、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』で『高僧法顕伝』に言及されるような昇三十三天為母説法の伝説を欠いていることは注目すべきであり、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』が『高僧法顕伝』など漢訳仏典に

依存しない源泉を持つという見解を示している。

2.4.スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』

Jaini［1983: xxxii-xxxiii］によって言及された *Kosala-Bimba-Vaṇṇanā* は、仏像起源伝説に言及するパーリ語仏典として最初に発表されたものである。スリランカに伝わる *Kosalabimbavaṇṇanā* で、Gombrich［1978］が 10 本の写本によるローマ字校訂テキスト及び英訳を出版している（以下、訳号：スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』、略号：*S-Kbv* とする）。このスリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』は 26 偈を含み、前世物語がないにも関わらず、第 1 偈の始まりを物語の冒頭に据えるというジャータカ形式を採る。

2.4.1.スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』の梗概

【仏像起源伝説】

① コーサラ国パセーナディ王は釈尊の不在時にジェータヴァナを訪れ、釈尊に会えず落胆して都へ帰った。

② 翌日再訪し、釈尊に仏像を造りたいと懇願すると、釈尊は承諾し、誰であっても何製であっても仏像を造れば、計り知れないほどの果報を得るでしょう、と造像の果報を説いた。

③ 王は都に帰り、栴檀で仏像を造らせ、祠堂に置き、再びジェータヴァナを訪れ、釈尊が仏像を見たなら輝くだろう、と告げた。王は王宮に帰り、祠堂を建て、道を飾り、再び仏像を見てほしいと懇願した。

④釈尊が仏像に近づくと、その仏像は釈尊を見て座所から立ち上がろうとした。釈尊は、仏像が座所から立ち上がるのを遮り、仏像は座り直し、釈尊をはじめとする多くの者たちが、仏像を供養した。

【釈尊による説法（造像と写経）】

⑩ 釈尊がパセーナディ王とアーナンダ長老に懇願され、造像と写経の果報を説いた。

2.4.2.スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』の先行研究

Gombrich［1978: 281-282］は、『高僧法顕伝』に類似する記述があることを指摘し、『高僧法顕伝』のようにパセーナディ王に仏像の起源を帰する言及をスリランカ以外で知らないが、もし全く存在しないのであれば驚くべきことである。さらなる研究が他のヴァージョンを導き、我々のテキストに光を注ぐであろう、と述べ、さらなるテキストの出現を予測している。

また、*Kosala-Bimba-Vaṇṇanā* からの引用が *Saddhamma-saṅgaha*（以下 *Saddhamma-s* と略す）にある、という Malalasekera［1928: 246, 1960: 698］の言及について Gombrich［1978: 283］は、Malalasekera が *Kosala-Bimba-Vaṇṇanā* のテキストを見たという証拠はなく、*Saddhamma-s* に引用

されている、という記述は正確ではない、と指摘している。橘堂［1997: 21］によれば、この *Saddhamma-s* は、スリランカで受戒したタイ人の長老 Dhammakitti Mahāsāmī による 13 世紀から 14 世紀の作品である。この作品には、第一結集からはじまる仏教史、注釈書、スリランカの説話なども収録されている。この *Saddhamma-s* の第 10 章の第 10 偈と第 11 偈の間に「*Kosalabimbavaṇṇanā* の中で釈尊が詳細に説いた仏像の功徳をここで取り上げて、三蔵を書写することの功徳が語られるべきである」[9]と *Kosalabimbavaṇṇanā* の名に言及している。しかし、*Saddhamma-s* でこの後に説かれる偈文では、三蔵を書写すれば、造像の果報と等しい果報が得られると言及し、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』の第⑩節と類似する内容を伝える偈文はあるが、完全に一致する偈文はない。従って、Gombrich［1978: 283］の指摘通り、*Kosala-Bimba-Vaṇṇanā* が *Saddhamma-s* に引用されている、という Malalasekera［1928: 246, 1960: 698］の記述は正確ではない。*Saddhamma-s* では、*Kosalabimbavaṇṇanā* というタイトル名が引用され、*Saddhamma-s* の著者が知る *Kosalabimbavaṇṇanā* は、造像と三蔵の筆写に言及したテキストであったことがわかる。すなわち、後述するタイに伝わる *Kosalabimbavaṇṇanā*（タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』）ではないと考えられる。

Gombrich［1978: 283-284］は、*Kosala-Bimba-Vaṇṇanā* のシンハラ語版 *Kosala-Bimba-Varṇanāva* について、Coomaraswamy［1956: 71］を引用し、16 世紀あるいは 17 世紀の散文の作品で、開眼供養の始まりに読誦されていた、としている。また、シンハラ語版 *Kosala-Bimba-Varṇanāva* は、様々な写本が伝えられ、出版もされている[10]。この出版本は、パーリ語版に見られる出来事に言及していなかったり、たくさんの話を増広しているが、最もパーリ語版に近い、としている。多様なシンハラ語版が伝承されていることについて、Gombrich［1978: 284］は、スリランカ版がパーリ語版からそれぞれ異なる時に書かれたことを示している、としている。

中村［1995: 427］が、Kern［1974: 94］において言及される Hardy［1860: 199］の記述により、スリランカの人々は仏像がコーサラ国王によって造らされたと伝えている、と言及している。この言及は、おそらくスリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』あるいはそのシンハラ語訳 *Kosala-Bimba-Varṇanāva* に基づく伝承であると考えられる。

2.5. 仏像起源伝説に関する先行研究

漢訳仏典に説かれる仏像起源伝説は、ウデーナ王やパセーナディ王に帰するもので、多くの仏典で昇三十三天為母説法の伝説と関連させて説いている。このような仏像の起源を説く伝説は上座部仏教には伝えられていない（高田［1983 (1967): 9］）、と考えられてきたが、その後、

---

[9] *Saddhamma-s*, p. 66: Kosala-bimba-vaṇṇanāyaṃ yaṃ bimbānisaṃsaṃ bhagavatā vitthārena desitaṃ tam idhāharitvā piṭakattayalekhanānisaṃsaṃ kathetabbaṃ.

[10] *Kosalabimbavarṇanāva*, by M. Sudharma Karuṇātilaka, Kägalla: Vidyākalpa Press, 1939. 筆者未見。

Gombrich［1978］がパセーナディ王に仏像の起源を帰するスリランカのパーリ語蔵外仏典 *Kosala-Bimba-Vaṇṇanā*（スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』）を発表し、『高僧法顕伝』に類似する仏像起源伝説がスリランカに伝承されていることを明らかにした。ビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集所収 *Vaṭṭaṅguli-rāja-jātaka*（ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』）が Jaini［1983: 414-432］により明らかにされ、Jaini［1983: xxxii-xxxiii］は、スリランカに伝わる *Kosala-Bimba-Vaṇṇanā* と共通する文学的源泉を有すると指摘した。タイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集にもビルマ版『ヴァッタングリ王物語』に相当する物語があることは知られていたが、ローマ字校訂テキストが未出版であるためか、パーリ語蔵外仏典の仏像起源伝説の考察の対象とならなかった。タイ版『ヴァッタングリ王物語』もビルマ版と同様にパセーナディ王の造像の伝説、仏像の指を修復しヴァッタングリ王という転輪聖王となる釈尊の前世物語が説かれている。これら 3 話のパーリ語蔵外仏典では、コーサラ国パセーナディ王の造像を説いており、Jaini［1983: xxxii-xxxiii］の指摘通り、これらは共通する文学的源泉があると考えられる。しかしながら、これら 3 話に共通して現れる偈文などの明確な証拠はなく、さらに、これらの物語がどのように関連しあっているのかは明らかではない。以下、*Kosalabimbavaṇṇanā*（以下、訳号：タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』、略号：*T-Kbv*）というスリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』と同様のタイトルの新たなテキストを提示し、タイ版『ヴァッタングリ王物語』の源泉資料と展開を再考する。

3. タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』[11]

タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』についてタイ国立図書館の目録 The National Library of Thailand［1921: 33］では、タイトルは โกสลพิมฺพปญฺหา（kosalabimbapañhā）で、その内容は、仏像を造ることについてコーサラ国王が釈尊に問う物語とされ、1 束からなる写本であると記されている。また、タイ国立図書館の目録カードにもカタログと同様 โกสลพิมฺพปญฺหา（kosalabimbapañhā）のタイトルでリストアップされている。

タイ国立図書館所蔵写本そのものに記されたタイトルはすべて *Kosallabimbavaṇṇanā* となっている。コーサラ国を意味するパーリ語がタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』本文中でも “kosala” と “kosalla” が混在しており、表記が一定していない。コーサラ国について、*DPPN*, vol. 1, p. 695 では、“Kosala”としているが、タイに伝わるパーリ語としてどちらの表記が一般的であるのかは判断できない。本論文では *DPPN* に従い *Kosalabimbavaṇṇanā* のタイトルを用いる。

[11] テキスト及び翻訳は第 2 部テキスト・翻訳篇 pp. 55-88 を参照されたい。

3.1.タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』の梗概

【仏像起源伝説】

① コーサラ国パセーナディ王は釈尊の不在時にジェータヴァナを訪れ、釈尊に会えず落胆して都へ帰り、仏像を造りたいと考えた。

② 王は翌日ジェータヴァナを再訪し、仏像を造りたいと釈尊に懇願すると、釈尊は、誰であっても何製であっても仏像を造れば、計り知れないほどの果報を得るだろう、と造像の果報を説き、仏像を造ることを許可した。

③ 王は都へ帰り、大工を呼び寄せ、栴檀で仏像を造らせ、祠堂に飾らせた。再び釈尊のもとを訪れ、釈尊が見たならその仏像は輝くだろうと告げた。

④ 釈尊が仏像に近づくと、その仏像は釈尊を見て、釈尊が存命の時に高座に座ることはふさわしくないと思い、座所から立ち上がろうとした。すると釈尊は、右手を差し出して仏像が立ち上がろうとするのを遮り、仏像は座り直した。釈尊は、パセーナディ王に問われ、造像による果報について説き、昔仏像の一本の指を修復したボーディサッタが転輪聖王として再生し、その後一切智性を得たことについて説き始める。

【前世物語 1（仏像を修復した商人）】

⑤ クラヴァッダクマーラという名の商人が、折れた仏像の一本の指を修復し供養し、覚者となることを願い、その結果、天界に再生した。

【前世物語 2（ヴァダングリ王）】

⑥ その後、バーラーナシーの王の息子ヴァダングリ (Vaḍhaṅguli) として生まれ、父の死後法に基づき統治した。

⑦ ヴァダングリ王の評判を聞きつけた閻浮提の百人の王が、ヴァダングリ王の王国を奪おうと戦を仕掛けてきた。ヴァダングリ王が、その戦を受けて立とうとすると、大臣が王の代わりに戦うと進言するが、王は一本の指で追払うと明言した。

⑧ 敵軍の王は、ヴァダングリ王が応戦しに来たことを知り進み出たが、ヴァダングリ王の一本の指により敵軍は乗り物から落ち、逃げ回った。敵軍は屈服し、ヴァダングリ王に仕え、ヴァダングリ王は転輪聖王となった。

⑨ ヴァダングリ王の行いを知った帝釈天が天界から下り、王に前世でなした善業を尋ねた。ヴァダングリ王が、前世でなした善業を明らかにし、来世で覚者となるだろうと告げると、それを聞いた帝釈天もヴァダングリ王は来世で覚者となるだろう、という授記を与え天界に帰還した。

【釈尊による説法】

⑩ 釈尊が造像の果報を説き、前世物語を現在時に結び付けた。

4.仏像起源伝説に言及するパーリ語蔵外仏典の比較

以下、タイ版『ヴァッタングリ王物語』の源泉資料と展開を再考するため、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』・タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』・タイ版『ヴァッタングリ王物語』・ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』の 4 話を形式・構成、仏像起源伝説、前世物語、造像の果報について詳細に比較する。

4.1.形式・構成の比較

まず、4 話のタイトルを見ると、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』は、同タイトル *Kosalabimbavaṇṇanā* である[12]。スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』は、そのタイトルは *-jātaka* ではなく、前世物語に言及しないにもかかわらず、第 1 偈の最初の部分をテキストの冒頭に据えるジャータカ形式を採っている。また、タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』では、前世物語を説くにもかかわらずジャータカ形式を採らず、帰依文から始まる。一方、タイ版『ヴァッタングリ王物語』とビルマ版『ヴァッタングリ王物語』とは、双方とも「パンニャーサ・ジャータカ」集に収められるが、*Vaṭṭaṅgulirājasuttavaṇṇanā* と *Vaṭṭaṅgulirājajātaka* という異なるタイトルである[13]。タイ版『ヴァッタングリ王物語』では、経典の冒頭の定型句 ‘evaṃ me sutaṃ’ で始まり、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』は、そのタイトル通り *Jātaka aṭṭhakathā*（以下 *Ja* と略す）に倣ったジャータカ形式である。

スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』を除く 3 話では類似する前世物語が語られ、物語の最後に現在時と前世物語との連結があり、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』が最も詳細に現在時と前世物語との連結を説き、タイ版『ヴァッタングリ王物語』は非常に簡潔である。

ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、前世物語の挿入される場面が異なる。タイ版の両話では、パセーナディ王が仏像を造らせた後、釈尊によって前世物語が説かれるのに対し、ビルマ版では、パセーナディ王が実際に仏像を造る前に釈尊によって前世物語が語られ、それを聞いた後パセーナディ王が仏像を造る、という順序で語られ、物語の進め方が大きく異なっている。また、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、偈文自体が物語を構成していることが多く、その偈文数も他の 3 話と比較すると非常に多い。

---

[12] 写本上のタイトルではタイト版『コーサラ国仏像縁起譚』は、*Kosallabimbavaṇṇanā* である。

[13] Sinlapabannakhan［2006: 287-304］などの出版物では、タイト版『ヴァッタングリ王物語』のタイトルは *Vaṭṭaṅgulirāja–jātaka* としている。

形式・構成比較表[14]

	S-Kbv	*T-Kbv*	*T-Vrsv*	*Zp-Vrj*
タイトル	*-vaṇṇanā*	*-vaṇṇanā*	*-suttavaṇṇanā*	*-jātaka*
冒頭	ジャータカ形式	帰依文	経典形式	ジャータカ形式
前世物語	×	○	○	○
現世との連結	×	○	○	○
偈文数	26 偈	80 偈	22 偈	203 偈

前世と現世との連結

	T-Kbv	*T-Vrsv*	*Zp-Vrj*
母	マハーマーヤー	×	マハーマーヤー
父	スッドーダナ	×	スッドーダナ
帝釈天	アヌルッダ	×	アヌルッダ
王妃	ヤソーダラー	×	ヤソーダラー
使者	×	×	アーナンダ
閻浮提の王	仏の従者	仏の従者	仏の従者
ヴァッタングリ	釈尊自身	釈尊自身	釈尊自身

4.2.仏像起源伝説の比較

ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』だけは仏像起源伝説の間に前世物語が挿入されている点が大きく異なるが、釈尊が仏像を造りたいというコーサラ国王の願いを許し、仏像を造るという仏像起源伝説は似通った内容である。パーリ語仏典で説かれる仏像起源伝説では、漢訳仏典のような昇三十三天為母説法へ言及していない。以下、仏像起源伝説（第①～④節）に絞って、比較する。

[14] 以下に示すの諸比較表において、○：言及有り、×：言及なし、*：共通偈あるいは類似偈、を意味する。

第①節

4 話とも同じ内容を伝えているが、その表現が一致している訳ではない。その例として、釈尊に会えず落胆したパセーナディ王の言葉を挙げる。

S-Kbv, p. 289: “aho vihāraṃ suññam iva khāyatī”

「ああ精舎が空虚のように見えます」

T-Kbv, p. 58: “sambuddhena vinā etaṃ suñaṃ jetavanaṃ”

「正覚者のいないこの空虚なジェータヴァナよ」

T-Vrsv, p. 29: “aho suñño jetavanan”

「ああ空虚なジェータヴァナよ」

Zp-Vrj, vol. 2, p. 414: “idaṃ hi bhonto Jetavanaṃ Smmāsambuddhena ca vinā suññam eva hotī”

「ああ尊者たちよ、このジェータヴァナは正等覚者がおらず空虚です」

第②節

スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』は、造像の果報に言及しているが、タイ版『ヴァッタングリ王物語』では、造像の果報を全く説かない。また、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、第②節が二分されており、前世物語の後に造像の果報が説かれ、そこで語られる説法は 4 話の中で最も詳しい。また、スリランカ版の第④節では造像の果報は説かれず、第⑩節では造像と写経の果報が説かれているため、造像の果報にのみ言及するのは第②節だけである。

また、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』第②節に現れる以下の偈文は、タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』では、その梗概の第④節、仏像を造り終えたパセーナディ王が仏像を造ることによって得られる果報を問い、それに釈尊が答えるところに現れる。この偈文は『ヴァッタングリ王物語』の両話には現れない。

“karoti kārāpayati jinabimbaṃ naro idha

sele lepe paṭe kaṭṭhe mahantaṃ khuddakam pi vā” ti.

「この世において人は、石で漆喰で布で木で[15]、大きいあるいは小さい勝者の似姿（仏像）を造り、造らせます」

第③節

スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』にのみ王宮とジェータヴァナの間の道を飾ったという言及がある。

[15] “sele lepe paṭe kaṭṭhe” で仏像の材料を表していると解釈したが、レリーフや仏画を描くことを意味している可能性もあるだろう。

第④節

スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』以外の 3 話では、造像の果報が説かれる。スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』では、造像の果報は説かれず、釈尊だけでなく帝釈天たちも仏像を供養し、それによって、須弥山がお辞儀をするなど天変地異が起きる、という描写がある。このような描写は他の 3 つのテキストには見られない。タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』とタイ版『ヴァッタングリ王物語』は、ほぼ同じ内容を伝えているが、タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』は、偈文を多く用い、タイ版『ヴァッタングリ王物語』は散文で表されている。ビルマ版では第④節で造像の果報が語られ、第⑩節へ続くため、第④節と第⑩節が連続している。ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、苦みを伴わない再生についてや天界で得る幸福についてというように、得られる果報が分けて詳細に説かれている。

仏像起源伝説比較表（第① ~ ④節）

	S-Kbv	*T-Kbv*	*T-Vrsv*	*Zp-Vrj*
①王が釈尊に会えず落胆	○	○	○	○
②造像の許可	○	○	○	○
造像の果報	○*	○	×	○
③造像	○	○	○	○
道中を飾る	○	×	×	×
④釈尊と仏像の対面	○	○	○	○
造像の果報	×	○*	○	○
供養と天変地異	○	×	×	×

4.3.前世物語の比較

前世物語では、商人として生まれたボーディサッタが仏像の指を修復した前世（第⑤節）とその後ヴァッタングリ王として生まれた前世（第⑥ ~ ⑨節）の 2 回の前世が語られている。ここまで見てきたテキストでは二度目の前世物語に重点が置かれているが、ビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集には一度目の前世物語に重点を置いた物語が収められている。それは、第 44 話 *Vaḍḍhana-jātaka*（以下、訳号：『ヴァッダナ物語』、略号：*Zp-Vḍj* とする。）であ

る[16]。『ヴァッダナ物語』では、パセーナディ王が登場するものの先述した仏像起源伝説には言及しない。また、ビルマ以外のタイやラオスなどで今までに調査されたどの「パンニャーサ・ジャータカ」集にも『ヴァッダナ物語』は収められておらず、*Vaḍḍhanajātaka* というタイトルの写本の報告もない。前世物語を説く 3 つのテキストにこの『ヴァッダナ物語』を加え、一度目の前世物語（第⑤節）を比較する。まず、『ヴァッダナ物語』の梗概を見る。

4.3.1.『ヴァッダナ物語』の梗概

コーサラ国パセーナディ王が、釈尊のもとを訪れ、仏像を造ることの果報を問うと、釈尊は誰であっても仏像を造る、あるいは、造らせれば、喩えようのない幸福を得るだろうと告げ、前世物語を語り始める。

アンガヴァティという名の都にヴァッダナという名の商人がいた。その商人は、大船を造らせ、その船に商品や財を積ませ、従者と一緒にその船に乗り、商売をしに航海に出た。そして、ある島に着き、そこにある仏像堂に入り、仏像を供養すれば幸福を得るだろう、と考えて、仏像を供養した。そして仏像の折れた指を見て、それを修復すればさらなる幸福を得るだろう、と考えた。その商人は一人の従者に岸辺にある美しい土を取って来るよう頼み、その従者は土を取って来て仏像の指を修復した。その仏像を見て、商人は大変喜び、一人の女に供養のために布施し、仏像を供養するよう依頼した。さらにその商人は、幡を布施し、これらの善業によって来世に覚者となることを願って帰路についた。そして、竜王と竜王の従者が種々の宝を持って来て商人の船を満たした。さらに、マニメーカラーという名の天女が大海原からその船を守り、船を宝で満たし、無事に都へ到着させた。そして、その商人は船に乗った宝を家に運ばせ、さらに一体の仏像を造り、日々供養した。

仏像を供養したことを知った帝釈天が天界から下り、商人の前に現れ、商人になぜ富を得たのかを尋ねた。その商人は、自身のなした善業を答えた。それを聞いた帝釈天は、未来において覚者となるという授記を与え、天界に帰還した。その後、商人は命を全うし、天界に再生した。

釈尊はパセーナディ王に前世物語を語ると、王のために造像の果報と像供養の果報を説き、前世物語と現在時を結びつけた。

4.3.2 前世物語 1 の比較

第⑤節

商人として仏像の指を修復した前世物語 1 を比較すると、タイ版『ヴァッタングリ王物

[16] *Zp-Vḍj*, pp. 525-534.

語』とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』では商売に出た道中で雨に濡れて壊れた仏像の指を見つけたことになっているが、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』と『ヴァッダナ物語』では、雨に濡れたことによって壊れたという言及はなく、大船を造り、その船で商売に行き、その道中、島の仏像堂で壊れた仏像を発見したことになっている。

さらに、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では仏像の指を修復する前に、「ボーディサッタは、“今、私の積徳の機会である”と考えました」[17]という行がある。タイ版の両テキストにはこの行はない。また、『ヴァッダナ物語』では、仏像を修復する前に仏像を供養し、仏像を供養することに対して、“今、私の積徳の機会である”と考え、従者にも仏像を供養させている[18]。そして、仏像を供養した後、さらなる積徳として仏像を修復している。ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』や『ヴァッダナ物語』では、ボーディサッタは仏像を修復することや供養することは積徳業であることを知っていて善業をなしていることになる。

ビルマ版『ヴァッダナ物語』でのみ仏像の指を修復するための土を取りに行く使者が登場している。また、『ヴァッダナ物語』では上衣の布などで作った幡で供養し、タイ版『ヴァッタングリ王物語』では一枚の衣を着せて仏像を供養している。

ボーディサッタの誓願では、以下の表に示したようにタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』・ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』・『ヴァッダナ物語』の 3 話に類似する偈文を見出せる。これらに対して、タイ版『ヴァッタングリ王物語』では散文で表されている。

第⑤節 類似偈

T-Kbv 第 42 ~ 44 偈	*Zp-Vrj* 第 3 ~ 5 偈	*ZP-Vḍj* 第 4 ~ 6 偈
iminā pana me bhante puñakammenanāgate sabbasattuttamo buddho bhaveyyaṃ atulo jino	iminā me puññakammena bhante ahaṃ sabbaññubuddho, jino ca atulo loke bhavissāmi anāgate.	iminā me puññakammena bhante ahaṃ sabbaññu buddho, jino ca atulo loke bhavissāmi anāgate.
saṃsaranto va saṃsāre bhaveyyaṃ uttame kule balarūpaguṇupeto puñavā pavaruttamo	saṃsāre saṃsaranto ’haṃ balavā rūpasampanno, bhavissāmi bhante sadā dīghāyuko ca kalyāṇo.	saṃsāre saṃsaranto ’haṃ balavā rūpasampannno, dhanavā ñāṇasampanno bhavissāmi bhante sadā.
paccāmittāri puna nāhosi mama samukkho sabbaverabhayābhito labheyyaṃ paramaṃ sukhaṃ anāgate kāle buddho bhavissāmī ti.	paccāmittā ca corā ca mā hontu mama samukhā, sabbe verā bhayānakā mā hontu mama samukhā ti.	paccāmittā ca corā ca mā honti mama samukhā, sabbe(a)verabhayātīto ahaṃ bhante amhi sadā ti.

誓願を終えた後『ヴァッダナ物語』以外の 3 話では、死後天界に再生するが、『ヴァッダ

[17] *Zp-Vrj*, p. 415, 14: bodhisatto cintesi idāni me puññaṃ [kātum] okāso hoti.
[18] *Zp-Vḍj*, p. 526, 40 - p. 527, 1: cintesi idāni me puññakammaṃ kātum okāsaṭṭhānaṃ hoti. imasmiṃ buddhaghare mama parisena saddhiṃ vasanto aham imass’ eva buddharūpassa pūjāsakkārapuññakammaṃ mama parise kārāpessāmī ti.

ナ物語』のみ、竜王やマニメーカラーが船を財で満たし[19]、家に帰って仏像を造り、供養するという話になり、帝釈天が登場し授記を与えて物語が終わる。

第⑤節 比較表

	T-Kbv	*T-Vrsv*	*Zp-Vrj*	*ZP-Vḍj*
商人名	Kulavaddhakumāra	Kulabhaddhakumāra	Bandhamāṇava	Vaḍḍhana
都名	×	Amaravatī	Aṅguli	Aṅgavati
航海	×	×	○	○
仏像堂	×	×	○	○
壊れた原因	雨	雨	×	×
積徳の機会	×	×	修復	供養・修復
使者（土）	×	×	×	○
供養	×	一枚の衣	×	最上の幡
誓願	偈文*	散文	偈文*	偈文*
竜王	×	×	×	○
マニメーカラ	×	×	×	○

4.3.3.前世物語 2 の比較

前世物語 1 で壊れた仏像の指を修復した商人がヴァッタングリ王として再生する前世物語 2（第⑥ ~ ⑨節）を比較する。前世物語 2 が説かれるのは、タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』・タイ版『ヴァッタングリ王物語』・ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』の 3 話である。

第⑥節

この節では、3 話に大差はないが、王の名や王の名の由来となった出来事が異なっている。タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』では、象馬を遠くから見て、一本の指で数えただけで（mitamatte[20]）、象馬が倒れ込んだ、タイ版『ヴァッタングリ王物語』では、制し難い象馬を一本の指で指し示しただけで（uddiccamattena[21]）、象馬が倒れ込んだ、としている。また、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、王子が一本の指を挙げると（ukkhipanto）、威光によって動かされ面前で立てなくなった童子たちをその場に留まらせた、としている。

[19] マニメーカラー（Maṇimekhalā）は、*Ja* の第 539 話 Mahājanaka Jātaka（*Ja*, vol. 6, p. 35）に登場する海を守る天女である。

[20] “mita” は、mināti（量る）の過去受動分詞。指差して数える仕草によって象馬を倒したと考えられる。

[21] “uddicca” は、uddisati（指示する）の過去受動分詞と捉えたが、過去受動分詞の場合、一般的には uddiṭṭha と変化する。

第⑥節 比較表

	T-Kbv	*T-Vrsv*	*Zp-Vrj*
父王の名	×	×	Aṅga
王の名	Vaḍhaṅguli	Vattaṅguli[22]	Vaṭṭaṅguli
王名の由来	一本の指で数えたたけで、象馬が倒れた	一本の指で指し示しただけで象馬が倒れた	一本の指を挙げ、童子たちを制した

第⑦節

タイ版『ヴァッタングリ王物語』とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』では、ヴァッタングリ王の評判を聞きつけた百人の王がヴァッタングリ王に戦を仕掛けている。一方、ビルマ版『ヴァッタングリ王』でのみヴァッタングリ王が閻浮提百人の王に娘等を献上するよう使者を送り、それに激怒した百人の王が宣戦布告し、両者が相対することとなる。

第⑧節

タイ版『ヴァッタングリ王物語』とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』では、ほぼ同じ内容を伝えており、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』よりもヴァッタングリ王の出城の様子や敵軍の王と対峙する場面が細かく描写されている。ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、この節すべてが偈文で表されている。以下に示すようにタイ版『ヴァッタングリ王物語』とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』とに類似する 2 偈がある。

第⑧節 類似偈

T-Kbv 第 56・57 偈	*T-Vrsv* 第 1・2 偈
hatthi assā rathā pati senāya caturaṅgiṇī samantā parivārenti nagaraṃ honti siriyā jalaṃ	hattī assā rathā pati senāya caturaṅginī samantaṃ parivārenti sobhanti suriyo janaṃ
kassesā mahatisenā piṭṭhito anupatiko vividhā aparimāṇā sāgarasseva ummiyo	kassa ca senā pahati piṭṭhito anupiṭṭhiyā vividhā aparimānā sāgarasseva ummiyo

[22] *T-Vrsv* では「ヴァッタングリ」の綴りが、“Vataṅguli”・“Vaṭṭaṅguli” など一定しない。

第⑨節

帝釈天とヴァッタングリ王の対話の場面である第⑨節は、タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』とタイ版『ヴァッタングリ王物語』とが近似している。以下に示すように、類似する 13 偈を見出せる。また、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、内容はタイ版の両話と変わらないにもかかわらず、帝釈天とヴァッタングリ王との対話が 40 偈も続き冗長である。

タイ版の両話では、帝釈天が授記を与えると天界へ帰るが、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、帝釈天が授記を与え、ヴァッタングリ王自身が造像の功徳を語る場面がある。そしてこの後、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、現在時の物語に戻り、釈尊が造像の功徳を説き、パセーナディ王が造像する、というように物語が進行する。

第⑨節 類似偈

T-Kbv 第 59 ~ 71 偈	*T-Vrsv* 第 3 ~ 15 偈
puccāmi taṃ mahārāja kiṃ puñaṃ pakataṃ tayā pubbe pi yena puñena laddho te vijjayo ayaṃ	puccāmi taṃ mahārāja kiṃ puññaṃ pakataṃ tayā pubbe pi yātvaṃ puññena laddho te vijayo ayan
bāṇijohaṃ pure āsiṃ nāma kulavaḍhano	bāṇijohaṃ pure āsiṃ nāmako kulavaddhano gacchāmi tena saddhiṃ so dhanena dāyaṃ esati.
chinnaṃ ekāṅguliṃ disvā buddharūpaṃ tadā vane	chinnam ekāguliṃ disvā buddharūpassa tāvad eva tutthacitto āsiṃ na ussahāmi cetasā
madditvā mattikaṃ suddhaṃ rūpaṃ passāṅguliṃ kare tena puñānubhāvena laddho me vijjayo ayaṃ	maddhitvā mattikāsuddhaṃ guliyā aṅgulī kare tena puññānubhāvena laddho me vijayo ayaṃ
silo pi samukho gantvā maṃ duṭṭhāya sucito mayāpekāṅguliyeva pattanti puñatejasā	sihosi samukhā gantvā mama dukkhāya ghāṭakaṃ mayā cekāgulī yeva pakasāte puññatejasā
mahāgajjendasahassāni sayodhārohanāni ca rathasāyahi āgantvā suvitānipattanti te	mahāgajjendasahassāni sayodhā vāhanāni ca samukhāni ca me gantvā sucittāni pattanti ce
pacchato pi mahākuṭo mama sattanamāsayo tāpena suvito eso tasmā bhūmi tebalo	pabbato pi mahākuto sattasabbenam ālayyā kodena lacitto veṇe bhasmabhuto ci kebalo
yaṃ dhanaṃ aṅgulisuciparibhoge na khiyate mahāteje na nassanti pañcasādhāraṇā ime	jayanañ ca gulīmā laṭṭhaparibhoge na lakkhaye dānañ ca vināseti pañcasādhāraṇā ime
anāte pi buddhattaṃ samijjhissaṃ surapati mayhaṃ pi puñatejena bhavissaṃ lokanāyako	anāgate ca sambuddhaṃ sambujjhissāmi kosiya mayhaṃ pi puññatejena bhavissa lokanāyako
bhonto buddhapūjānāma appakā pi saddhāyakatā mahapphalā honti mahānisaṃsā	bhonto buddhapūjāya hi nāma appakāpi buddhassa katā mahapphalaṃ honti mahānisaṃsan
sakkoham asmi devindo āgatosmi tava santike anāgate pi buddhattaṃ pāpuṇissasi bhūpati	sakkoham asmi devindo āgatosmi tava santike anāgate pi sambuddho pāpuṇissasi bhūpati
nisinno bodhimūlasmiṃ mārayodhāvidhaṃsanaṃ kilesakhandhamāre ca maccumāraṃ asesato	nisinno bodhimūlasmiṃ mārañ ceva vidhaṃsanaṃ cakkavāḷapariyantaṃ nikkhilaṃ so parājayi kilesakkhandhamāro maccumāraṃ asesato
・・・dvatiṃsaniriye suñe karonto saggaṃ purayi dhammāmataṅ ca pāyetvā arahattamaggaṃ pāpuṇīti	dvattiṃsanarakā suñño karosi saggaṃ purayi dhammā paccāropetvā amattasagge ca pāpuṇī

4.4.造像の果報の比較

釈尊による造像の果報についての説法は、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』では第②節で、さらに第⑩節では造像と三蔵筆写の果報が説かれ、タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』では第②・④・⑩節で説かれ、タイ版『ヴァッタングリ王物語』では第④節と第⑩節とに造像の果報が説かれ、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、第②-2・④・⑩節で説かれている。最も簡潔に説かれているのはタイ版『ヴァッタングリ王物語』である。タイ版『ヴァッタングリ王物語』の第 21 偈において、造像させれば写経の果報と等しい果報が得られると説いており、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』第⑩節の影響の可能性もある。

また、タイ版の両話にのみ弥勒に見えることや帝釈天となることが果報として挙げられている[23]。造像の果報が釈尊によって説かれた後、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』では、造像の功徳を語ることができるのは釈尊以外にいない、と釈尊が語り、さらにビルマ版『ヴァッタングリ王物語』では、造像の果報を聞いたパセーナディ王が、誓願をなしている。

仏像起源伝説第②節の比較で見たようにスリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』第②節とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』第④節とに共通偈が現れ、第⑩節では以下に示すようにタイ版両話に類似する 3 偈がある。

第⑩節 類似偈

T-Kbv 第 72 ~ 75 偈	*T-Vrsv* 第 16 ~ 18 偈
sattakkhatuñ ca devindo devarajjaṃ akārayi asītiñ ca sattakkhatuṃ cakkavattisiriṃ labhe padesarajjaṃ vipullaṃ gaṇanāto asaṃkheyyaṃ bhogena onatānatthi patimākaraṇaphalaṃ	sattakkhattuṃ ca devindo devarajjam akārayi asīti ca sattakkhattuṃ cakkavatti sirivaro padesarajjaṃ vipulaṃ gaṇanāto asaṃkheyyo
yaṃ yaṃ aṅgulivikallaṃ buddharūpassa saṇḍape omatomattikāyeva phalan tissa acintayyaṃ pādahatthaṃ pi ce bhaṅgaṃ	yaṃ yaṃ agañ ca vikallaṃ buddharūpasaṃ laddhare mattimattikāyeva phalan tassa acinteyye
pītiyā yo ca saṇḍape phalan taṃ vipulan tassa ciraṃ upajji tejasā	pītiyā yo pi sandhare phalan taṃ vipullan tassa ciri uppatimo sadā

[23] 造像の果報については、本論文第 2 章において詳説。

5.小結

仏像起源伝説に言及するパーリ語蔵外仏典を比較すると、タイ版『ヴァッタングリ王物語』とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』の両話に複数の類似偈を見出すことができ、近似しているのは明らかである。この両話を見ると、タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』はタイ版『ヴァッタングリ王物語』よりも詳細に描写され、物語も長いため、タイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集から『ヴァッタングリ王物語』を取り出し、加筆増広し、タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』が成立したとも考えられる。しかし、造像の果報の説き方を見ると、タイ版『ヴァッタングリ王物語』は、ジャータカ集の一話にするためにタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』から冗長な偈文などを省き、物語の重要な要素を保持した簡潔な物語に整えたと見ることもできる。なぜジャータカ形式に整え、*Vaṭṭaṅgulirājajātaka* というタイトルで集成に加えなかったのか、という疑問は残るが、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』とタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』が同タイトルで、共通偈が見出せるため、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』との関連を考えた場合にもタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』からタイ版『ヴァッタングリ王物語』が成立したと考える方が蓋然性が高いであろう。さしあたって、ここではコーサラ国パセーナディ王が釈尊を思慕して仏像を制作したというスリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』を源泉資料とし、「商人」と「王」を前世とする前世物語が加筆されたタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』が成立し、さらに集成に収める為に編集されたのがタイ版『ヴァッタングリ王物語』であると結論づけておくこととする。

ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』と他の文献との関連については、Jaini［1983: xxxii-xxxiii］が指摘しているように文学的源泉を共有していると考えられるが、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』とは共通偈など直接的な関連を見出すことはできない。ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』のタイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集の対応話がタイ版『ヴァッタングリ王物語』であるが、タイ版の両話とビルマ版『ヴァッタングリ王物語』とを比較すると、異なるエピソードを伝えるところも多く、かなりの改変や加筆がなされ、物語の構成も整えられている。「パンニャーサ・ジャータカ」集所収のタイ版『ヴァッタングリ王物語』よりもむしろタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』の方にビルマ版『ヴァッタングリ王物語』との類似する 3 偈を見つけられ、釈尊以外に造像の功徳を語れる者はいない、という類似した言及もある。従って、タイ版『ヴァッタングリ王物語』からビルマ版『ヴァッタングリ王物語』へ展開したのではなく、タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』、あるいは、そこから展開したあるヴァージョンを源泉としてタイ版『ヴァッタングリ王物語』とビルマ版『ヴァッタングリ王物語』が別々に成立したと考えられる。

タイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集は集成であるにもかかわらず、タイ版『ヴァッタングリ王物語』のようにジャータカ形式を採らない物語が含まれていたり、全体として統

一性に欠けている。それに対して、ビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集はパーリ三蔵小部経典中のジャータカに倣ったジャータカ形式で、その名の通り 50 話の集成である。ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』と『ヴァッダナ物語』とに着目すると、釈尊の前世を「王」にするために『ヴァッダナ物語』にヴァッタングリ王として再生する前世物語が加筆された、あるいは、ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』から一度目の前世物語を抽出し、物語の後半部分を加筆したとも考えられる。タイやラオスなどに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集に『ヴァッダナ物語』に匹敵する物語が収められておらず、『ヴァッダナ物語』のような仏像の指を修復する物語を説く単独写本の報告もなく、ビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集が唯一 50 話の集成であることから、『ヴァッダナ物語』は 50 話の集成にするためにビルマで作り出された物語である可能性が高い。東南アジアに伝わる諸「パンニャーサ・ジャータカ」集は、それぞれの集成によって所収の物語や順序が異なり、その成立は未だ明らかにされていない。タイ版『ヴァッタングリ王物語』と近似した単独写本タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』が伝承されていたことが明らかとなり、タイ版『ヴァッタングリ王物語』は集成を作るために新たに作られた物語ではなく、単独話として伝承されていた物語が改変されて、集成中の一話となったと言える。従って、「パンニャーサ・ジャータカ」集研究にも、その他蔵外仏典の研究の進展が必須であることを意味している。

仏像起源伝説は、漢訳仏典にのみ説かれる物語とされてきたが、Gombrich［1978］の研究以降、南方上座部仏教の蔵外仏典に仏像起源伝説が伝わっていることが明らかとなった。Jaini［2001: 335］は、東南アジアでも非常によく知られている昇三十三天為母説法の伝説を欠いていることから、『ヴァッタングリ王物語』が『高僧法顕伝』に依存しない源泉をもつ可能性があると指摘している。漢訳仏典の伝承を受けて作られた伝説であれば、漢訳仏典で多数派のウデーナ王に帰する伝説であったであろう。しかし、パーリ語蔵外仏典では、仏像の起源をパセーナディ王に帰している。この点からも、漢訳仏典から直接影響を受けて書かれたパーリ語仏典ではないと考えられる。また、Jaini［1983: xxxii-xxxiii］が、失われた共通する文学的源泉を持つのかもしれない、と指摘していたが、それを証明する明確な証拠はなかった。本論文で新たにタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』を提示したことにより、スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』を源泉資料とし、前世物語を加筆したタイ版『コーサラ国仏像縁起譚』があり、それを集成に収めるために編集され、タイ版・ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』へとそれぞれ展開したという見解が導かれたのである。

第 2 章
造像と像供養の功徳

仏像起源伝説に言及するスリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』・タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』・タイ版『ヴァッタングリ王物語』・ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』の 4 話に説かれる仏像を造ることの功徳を概観し、新たなパーリ語蔵外仏典 *Moggallānabimbapañhāsutta*（訳号：『目連尊者の問い』、略号：*Mogg-bps*）を加え、パーリ語蔵外仏典に説かれる造像と像供養の功徳を比較検討する。

1.仏像起源伝説を説くパーリ語仏典の造像の功徳

1.1.スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』

第②節において造像の功徳、第⑩節において造像と三蔵筆写の功徳が説かれる。

第②節

木製でも石製でも象牙製でも粘土製でも銀製でも青銅製でも赤銅製でも錫製でも砂製でも大きくても小さくても仏像を造れば、計り知れないほどの功徳である

第⑩節

・地獄・餓鬼・阿修羅・畜生・辺境に再生せず、覚者や転輪聖王らの生まれる閻浮提に再生する（第 7 ~ 13 偈）

・男に生まれ、五体満足で無病である（第 14 ~ 16 偈）

・身体は黄金の塊の様で太陽のような威光を放つ（第 17 偈）

・高貴な家柄に再生し、財や土地や家族などに恵まれる（第 18 ~ 23 偈）

・天と人の幸福を得る（第 24 偈）

・有慧者となる（第 25 偈）

・3 種の悟りを得る（第 26 偈）

1.2.タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』

第②・④・⑩節で造像の功徳が説かれる。

第②節

・黄金製でも彩色製でも高くても低くても計り知れない偉大な果報を得る

第④節

・ 粘土製でも木製でも石製でも赤銅製でも錫製でも銀製でも象牙製でも仏像を造る、あるいは、仏像を修復すれば、その功徳は無量である（第 7 ~ 19 偈）

・ 五体満足である（第 21 偈）

・ 偉大な神通力、威力を有し勇猛である（第 22 偈）

・権力のある家柄に再生し、名声のある有慧者である（第 23 偈）

・宿命通を備える善人である（第 24 偈）

・人々に敬われ、天に於いても天女たちに囲まれる（第 25・26 偈）

・容姿端麗である（第 27 偈）

・無病である（第 28 ~ 35 偈）

・人間界の幸福を享受し、天界に再生し、天界の幸福を享受する（第 36 ~ 41 偈）

第⑩節

・ 天界の王として 7 度統治、80 回 100 回転輪聖王となる（第 72・73 偈）

・ 仏像を修復しても広大な威光が生じる

・仏像を造らせても太陽のような威光を持つ（第 76 偈）

・涅槃へ至る（第 77 偈）

・弥勒仏に会う（第 78 偈）

1.3.タイ版『ヴァッタングリ王物語』

第④・⑩節で造像の功徳が説かれる。

第④節

・粘土製でも、石製でも、真鍮製でも、赤銅製でも、木製でも、錫製でも、宝製でも、銀製でも、金製でも、牙製でも、角製でも、線刻製でも、何製であっても偉大な功徳を得る

第⑩節

・天界の王として 7 度統治し、80 回 100 回転輪聖王となる（第 16 偈）

・ 仏像を修復しても思議も及ばないほどの果報である（第 17 偈）

・ 長寿である（第 18 偈）

・太陽のような威光を持つ（第 19 偈）

・地獄や畜生に再生しない（第 20 偈）

・写経と等しい果報を得て、覚者となる（第 21 偈）

・ 弥勒の側に再生する（第 22 偈）

1.4.ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』

第②-2・④・⑩節で造像の功徳が説かれる。

第②-2 節

・太陽のような威光を持つ（第 115 偈）

・ 悪趣に再生せず天界や人間界に再生する（第 116 偈）

・ 幸福に再生し、親族に供養される（第 117 偈）

・ 涅槃の幸福を得る（第 118・119 偈）

・ 土製でも黄金製などでも、大きくても小さくても造像の果報は無量である（第 121 ~ 128 偈）

第④節

・最上智を得る（第 138 偈）

・長寿で容姿端麗である（第 139 偈）

・有慧者で、太陽のような威光を持つ（第 140 偈）

・星の間の月のように親族の間で輝く（第 141 偈）

第⑩節

・地獄・餓鬼・畜生・阿修羅・辺境に再生しない（第 142 ~ 147 偈）

・五体満足で無病である（第 148・149 偈）

・殺害されない（第 150 偈）

・王家かバラモン家に生まれる（第 151 偈）

・土地や財や親族に恵まれ、敬われる（第 156 偈）

・人間界の幸福を享受し、天界へ再生し天界の幸福を得る（第 161 ~ 168 偈）

・ 梵天界に再生する（第 169・170 偈）

・ 梵天界から死んで人間界へ再生し、人間界と天界を輪廻する（第 171・172 偈）

・一切智を得て独覚となり、涅槃に至る（第 173・174 偈）

・天界あるいは人間界に再生する（第 178 偈）

・常に幸福を得る（第 179 偈）

・財や智慧を有し容姿端麗である（第 180 ~ 183 偈）

・奴隷や家族に恵まれ、長寿である（第 184・185 偈）

・恐怖を超越する（第 186 偈）

・ 高貴な家柄に再生する（第 187 偈）

・ 美しく愛される（第 188 偈）

以上、仏像起源伝説に言及する 4 話のパーリ語蔵外仏典では、いかなる材料の仏像であっても、いかなる大きさの仏像であっても、造像すれば、計り知れないほど偉大な功徳を得ると説く。4 話に共通する造像の功徳として、生天、無病、繁栄、涅槃などが説かれる。タイ版の両話にのみ仏像の修復にも功徳があるということ、造像の功徳として弥勒仏に見えることが説かれている。

2.『目連尊者の問い』

『目連尊者の問い』について、Skilling & Santi Pakadeekam［2002: 146］では、“2.179. Moggallāna-Bimba-Pañhā”の項目に CMPLS Laos 79. iv と記されているが、CMPLS Laos 79. iv（Cœdès［1966: 94-95］）には、Mahāmoggallānaparinibbānavatthu と記され、カタログに記される冒頭のパーリ文も *Moggallānabimbapañhāsutta*（『目連尊者の問い』）の冒頭とは異なり、タイ国立図書館所蔵 *Moggallānanibbāna* 写本と同様であるため、本論文で言及する『目連尊者の問い』とは異なるテキストと考えられる。以下に『目連尊者の問い』の梗概を記す[1]。

2.1.『目連尊者の問い』の梗概

釈尊が造像の功徳を示して以下の物語を語る。

過去仏であるヴィパッシン仏は、誰であっても、黄金製でも、銀製でも、赤銅・青銅製でも、錫製でも、石製でも、木製でも、法を聴いて造像すれば王の幸福を得る、と造像の功徳を示した。ヴィパッシン仏の涅槃の時、ある貧しい夫婦は、「前世での行いにより貧者となり、現世においても善業をなしておらず、来世でさらなる苦しみを受けであろう」と考え、仏像を造り、誓願をなし、彼らは死後人間界や天界に再生した。

目連尊者は天界を遊行し、前世で造像したことにより天界に再生した天人の宮殿に至った。目連尊者はその天人に素晴らしい再生を得た理由を尋ねた。天人は仏像を造り、供養した結果、この素晴らしい宮殿に再生したと答えた。

目連尊者は釈尊のもとに戻り、釈尊に造像の功徳を尋ねた。釈尊は、土製の像を造れば長者となり、錫製の像を造れば婆羅門となり、木製の像を造れば最勝王となり、石製の像を造れば最上の願望を有する神々となり、青銅製の像を造れば帝釈天となり、銀製の像を造れば夜魔天の神々となり、摩尼製の像を造れば兜率天の神々となり、線刻の像を造れば梵天となり、黄金製の仏像を造れば一切智者となる、と造像の功徳を説いた。さらに、自分の為に造像すれば 1 万コーティの果報を得、像を財とすれば 7 千コーティの果報を得、造像させれば 3 千コーティの果報を得、像を喜べば 1 千コーティの果報を得る、と説いた。

目連尊者が像供養の功徳を尋ねると、釈尊は、仏像の材料毎に像供養の功徳を以下のように説いた。

土製　あらゆる欲を満たし、重閣・象の群れを有し、幸福を享受し、妻子・金銀・財を得る

錫製　信仰心ある者となり、7 百人の奴隷・奴婢・装飾した女、7 百頭の象・馬・車・牛・水牛・牝牛というたくさんの富を得る

[1] テキスト及び全訳は、本論文第 2 部テキスト・翻訳篇 pp. 89-117 を参照されたい。

木製　　知恵を有する閻浮提の王となり、9 千頭の象・馬・車・婦人・奴婢・奴僕が王国を取り囲み、金銀で満ちた摩尼製の蔵・数千の車庫を得る

石製　　あらゆる欲を満たし、天人に供養され、1 万年の寿命を得る

摩尼製　兜率天に再生し、瑠璃製の宮殿で 25 ヨージャナを天女で満たし、人間界に弥勒とともに再生する

線刻　　幸福を得て、25 ヨージャナの黄金製の宮殿が高貴な女で満たされ、弥勒がおり、一切智を得る

黄金製　天の食物・飲物・衣を享受して三十三天で数千年の寿命を全うし、王家か婆羅門家に五体満足な恵まれた身体に生まれ、布施波羅蜜をなし一切智性を得て、苦を超越してあらゆる罪が消滅し、来世で弥勒に見え、苦を経験しない

2.2.『目連尊者の問い』とその他パーリ語蔵外仏典との比較

『目連尊者の問い』では、パセーナディ王の仏像起源伝説には言及せず、過去仏であるヴィパッシン仏によって造像が善業であると説かれたというエピソードに言及し、さらに釈尊により造像の功徳だけでなく像供養の功徳も説かれている。仏像起源伝説を説く先述の 4 話では、いかなる材料で仏像を造っても得られる功徳が異なるとは説かれていないが、『目連尊者の問い』では、何製の像を造るのかによって異なる功徳を得、何製の仏像を供養するのかによって異なる功徳を得る、と説かれている。先述した仏像起源伝説に言及する 4 話とは異なり、ここに説かれる造像の功徳はすべて「○○になる」という功徳が説かれている。仏像起源伝説に言及する 4 話に説かれるような繁栄や長寿などの功徳は、『目連尊者の問い』では像供養の功徳として説かれる。錫製と木製の像供養の功徳に着目すると、錫製では 7 百人の奴隷などを得るとされ、木製では 9 千人の奴隷などを得るとされることから、明らかに仏像の材料によって得られる果報に高低があると考えられる。さらに、『目連尊者の問い』では、自分のために造像することが最も優れ、像を財とすること、造像させること、像を喜ぶことという順で得られる果報が減少するとも説かれ、より体系化された造像や像供養の功徳が説かれている。タイ版『ヴァッタングリ王物語』・タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』では、造像の功徳として弥勒に見えるなど弥勒に言及しているが、『目連尊者の問い』においても摩尼製・線刻・黄金製の像供養の功徳として、弥勒に言及しており、コム文字で伝えられている 3 話のパーリ語蔵外仏典において弥勒が言及されていることになる。

3.小結

タイ国立図書館所蔵『目連尊者の問い』と類似する蔵外仏典と考えられる写本の報告は、現段階ではない。しかしながら、*Moggallānabimbapañhāsutta* に類しないタイトルで伝承されているとも考えられ、スリランカやビルマにも伝承されている可能性も否定できず、どの領域に、どれほど流布した仏典であるのか明らかではない。さらに、『目連尊者の物語』は、ヴィパッシン仏による造像の許可、目連尊者と天人との造像に関する問答、目連尊者と釈尊との造像の功徳と像供養に関する問答、仏像の材料によって異なる造像や像供養の功徳、という要素によって物語が構成されているが、これらの物語の構成要素に関連する他の文献にも未だ至ることができていない。目連尊者が天界を巡り天人とそこに再生した善業を問答をするということは、小部経典中『天宮事経』（*Vimānavatthu*）にも説かれる。しかし、『天宮事経』では当然造像の功徳は説かれない。造像を主題とする仏典であるためその源泉は三蔵に求めることはできず、関連文献が伝承されているとすれば、それは蔵外仏典である。南伝上座部仏教国に伝わる蔵外仏典研究が進展すれば、『目連尊者の問い』の物語の構成要素を共有する他の蔵外仏典も明らかとなるであろう。『目連尊者の問い』の源泉資料とその展開は今後の研究課題の一つである。

コム文字で伝わる 3 つの仏典には「弥勒の側に再生する」や「弥勒仏に会う」などの弥勒崇拝が認められる。弥勒崇拝と仏像崇拝とに特に関連があるのか、弥勒崇拝がタイに伝わる仏典全般にみられる特徴であるのか、現段階では判断し難い。また、仏像の材料によって造像・像供養の功徳が異なるという『目連尊者の問い』の教えは、類例のない言及であり、希少な仏典であることは確かである。造像と像供養を促すために著されたと考えられるが、より望ましい仏像の材料を明示した意図は何であったのだろうか。『目連尊者の問い』は、開眼供養などの儀礼において読誦されたのだろうか。『目連尊者の問い』は研究の待たれる興味深い仏典である。

第 3 章
地獄からの救済者マーライ尊者と目連尊者
―『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料とその展開―

タイには、「プラ・マーライ」（พระมาลัย, phra malai）とよばれる蔵外の仏教説話が様々なヴァージョンで伝承され、親しまれている。「プラ・マーライ」は、地獄や天界を遍歴することのできるマーライという名の尊者が、天界で弥勒菩薩に会い、弥勒菩薩の伝言を人間界の人々へ語る、という物語である。Ba Shin［1960］によれば、タイの「プラ・マーライ」は、ミャンマーでは、Mālañ という名で知られ、1201 年の碑文に「Mālañ の物語を聞き、その後ヴェッサンタラ・ジャータカを聞いた」と記され、20 世紀初頭のミャンマーでは、Mālañ の物語に続いて『ヴェッサンタラ・ジャータカ』を説く儀礼がなされていた。また、Roveda & Yem［2010: 44-47］では、三十三天で帝釈天と対話する Preah Malai（マーライ尊者）の姿を描いたカンボジアの絵巻物が報告されている。このようにタイで「プラ・マーライ」とよばれる物語は、他の東南アジアの上座部仏教国にも伝承されている。

本章では、中部タイに伝わる「プラ・マーライ」文献を考察対象とし、諸「プラ・マーライ」文献の一つ『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料を再考し、諸「プラ・マーライ」文献の地獄からの救済の記述により、『マーレッヤデーヴァ長老物語』の展開を明らかにする。

1.「プラ・マーライ」文献群について

Brereton［1995: 15-23］によれば、「プラ・マーライ」に関するテキストは、主題や儀礼コンテキストなどの点で 2 つのタイプに大別される。以下、Brereton［1995: 15-23］に従い、諸「プラ・マーライ」文献について概観する。

1.1.タイプ 1

布施とその果報に関する記述が中心で、わずかに地獄へ言及し、物語性に欠けたテキストである。後述する④以外のテキストは、第 1 部は天界での天人との遭遇、第 2 部は弥勒の到来という 2 部構成をとる。このグループに属するのは以下のテキストである。

①ランナータイ語の *Malai Ton-Malai Plai*

②イサーンあるいはラオ語の *Malai Muen-Malai Saen*

③パーリ語の *Māleyyadevattheravatthu*

④タイ語の *Phra Malai Kham Luang*

① *Malai Ton-Malai Plai*

タム文字を使用し、偈文形式でパーリ文に続いてランナータイ語の相当文を据えるという二重の言語で書写されている。北タイの寺院では、このテキストの数百の貝葉写本を所蔵しており、現存する最古の写本は、1516 年に当たる年代の記された貝葉写本である。

② *Malai Muen-Mala Saen*

内容や構成、儀式で使用された点で、北タイの *Malai Ton-Malai Plai* の東北版と言える。タム文字の変形文字を用い、東北タイの方言あるいはラオ語で書かれ、貝葉写本は東北部全域の寺院に収められている。上述した北部のもの①とこのテキストは、『ヴェッサンタラ・ジャータカ』（*Vessantara Jātaka*）を朗詠する祭り「テートマハーチャート（เทศน์มหาชาติ）」の際に読まれた[1]。テキストの中で、弥勒が仏としてこの世にいる時代に再生したいと願う人々は、一晩で一通り『ヴェッサンタラ・ジャータカ』を聴聞すべきであると弥勒がマーライ尊者に訓戒しているため、北部と東北部では、「プラ・マーライ」物語の朗誦は、『ヴェッサンタラ・ジャータカ』を説く際の序文と考えられていたようである。

③ *Māleyyadevattheravatthu*（以下、訳号：『マーレッヤデーヴァ長老物語』、略号：*Mth-v* とする）

コム文字で書かれたパーリ語の「プラ・マーライ」文献である。この写本は、バンコクにあるタイ国立図書館に所蔵されているにもかかわらず、目録には載せられておらず、年代の記された写本もないとされている[2]。最古と考えられる写本の能書スタイルから、16 世紀ごろのものと推定され、その奥付にはバンコクの南 Phetburi にある Wat Chi-sa-in において書写されたと記されている。

④ *Phra Malai Kham Luang*（以下、訳号『プラ・マーライ・カム・ルアン』、略号：*PM-KhL*）

欽定版「プラ・マーライ」とされ、パーリ語やサンスクリットを原語とするタイ語を多用して書かれている。1737 年と記された奥付のある写本が知られている[3]。このテキストは、③『マーレッヤデーヴァ長老物語』を頭韻法などの技法によって装飾し、さらに拡張したものである。また、このテキストは、アユタヤ時代後期のタイの代表的な詩人の一人である Thammathibet 王子に帰せられる文学作品であるが、これまでにこのテキストが儀礼において朗誦された形跡はない。

---

[1] *Vessantara Jātaka* を説く祭りの時期は地方によって異なっている。北タイでは、10 月から 11 月の満月に当たる 12 番目の太陰月の間に開かれる。東北タイでは、収穫の後や暑い季節（2 月から 4 月）の始めに開かれる。この祭りは、中部や南部でも催されるが、*Vessantara Jātaka* の前に「プラ・マーライ」のテキストが読まれるのは、北部と東北部だけである。

[2] タイ国立図書館の目録（The Vajirañāṇa Library［1921: 30］）では、“Māleyyasūtra Pāli” というタイトルでリストアップしている。

[3] 宮本［2004: 14］は、『プラ・マーライ・カム・ルアン』は 1738 年の著作である、としている。

1.2.タイプ 2

先述したタイプ 1 とは対照的に、マーライ尊者の地獄遍歴や悪業とその結果に関する記述が、布施とその果報に関する記述と同等の重要な主題となっている。生々しく身の毛のよだつような地獄の描写と善悪に関する記述が、このタイプ 2 を特徴づけている。タイプ 2 のテキストは、改心し、過ちを犯させないように、悪業の結果や地獄の有様を強調している。このタイプ 2 のテキストは、説教や葬儀などの儀礼に使用されている。タイプ 2 に属するのは以下のテキストである。

① パーリ語の *Māleyyadevattheravatthudīpanīṭīkā*[4]

② タイ語の *Dika Malai Thewa Sut*

③ タイ語の *Phra Malai Sam Thammat*

④ タイ語の *Phra Malai Klon Suat*

⑤ ランナータイ語の *Malai Prot Lok*（北タイ）

⑥ 現代小説の *Phra Malai Phu Poet Narok-Sawan*

① *Māleyyadevattheravatthudīpanīṭīkā*（以下、訳号：『マーレッヤデーヴァ長老物語註』、略号：*Mth-v-ṭ* とする）

タイプ 1 の③*Mth-v* の註釈書である。バンコクのタイ国立図書館は、このテキストの 12 本の貝葉を所蔵しており、そのうちの 1 本は Phra Phutthawilat という名の僧によって書かれたことを示す奥付を有している[5]。

② *Dika Malai Thewa Sut*

Mi Chuthong によるタイプ 2 の①『マーレッヤデーヴァ長老物語註』のタイ語訳である。初版は 1954 年で、最近では 1972 年に出版された[6]。

---

[4] Brereton［1995: 18-19］では、*Māleyyavatthudipani-tika* というタイトルで言及されているが、本論文では *Māleyyadevattheravatthudīpanīṭīkā* に統一する。

[5]『マーレッヤデーヴァ長老物語註』第 2 部の終わりに「以上、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』第 2 部は、教えの中に確立するために Buddhavilāsāvhaya によって 3 年かけて書き終えられた」とあり、ここで、Phra Phutthawilat とされるのは、この Buddhavilāsāvhaya と考えられる。また、Brereton［1995］は、このテキストに関する綿密な研究はなされていない、としているが、その後バンコクのマハーチュラロンコン大学の修士論文として Phannava［2006］が提出されている。さらに本論文において筆者による初ローマ字校訂テキストと全訳を提示する。

[6] Mi Chuthong［1973］は、仏暦 2516 年の出版であるが、Brereton［1995: 19］は 1972 年に再版されたとしている。Brereton［1995: 18-19］では、このテキストと先述した①『マーレッヤデーヴァ長老物語註』をタイプ 2 に属するとしているが、『マーレッヤデーヴァ長老物語』でマーレッヤデーヴァ長老（マーライ尊者）が地獄を訪れる場面について、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』はマハーモッガラーナ長老のように地獄を訪れたと註釈しているだけで、地獄に関する

③ *Phra Malai Sam Thammat*

3 人の僧が、マーライ尊者と帝釈天と弥勒の三役に分かれて演劇のように誦読するようアレンジされたバージョンである。

④ *Phra Malai Klon Suat*（以下、訳号：『プラ・マーライ・クロン・スワット』、略号 *PM-KS* とする）

民衆版「プラ・マーライ」とされ、諸「プラ・マーライ」文献の中で最も流布しているものである。過去 2 世紀の間、盛んに書写され[7]、タイ中部と南部の葬儀において朗詠されていた。このテキストは、基本的にタイプ 1 のテキストで見られる出来事の順序に従っているが、主な違いは、地獄を訪れたマーライ尊者に関する記述の拡張にある。身の毛のよだつような拷問とグロテスクな地獄の衆生を描写すると共に、これらの状況に再生する要因となる悪業を記している。このテキストの現存する最古の写本として知られるものは、「1738 年から」と記されている。『プラ・マーライ・クロン・スワット』は、蛇腹状の厚紙製のサムットコーイ（สมุดข่อย）と呼ばれる写本に書かれ、「プラ・マーライ」の物語の場面を描いた挿絵が描かれている。

⑤ *Malai Prot Lok*

ランナータイ語で書かれ、マーライ尊者が天界を訪れる場面がなく、地獄の場面だけからなる物語である。また、タイプ 2④『プラ・マーライ・クロン・スワット』とは異なり、複数人よりも一人の僧によって亡くなった親類のために功徳を積むために朗詠された。

⑦ *Phra Malai Phu Poet Pratu Narok-Sawan*

現代の扇情的な小説として出版されたテキストの一つである。Phunsak Sakdanuwat によって書かれ、簡単な散文で、章立てされ、1977 年に出版された。このテキストは、戒律を説く仏典というよりも大衆的な小説に近く、芝居がかっており、作品のおよそ 6 割は地獄とそこに住む衆生の描写に関連している。

以上のように「プラ・マーライ」文献は、伝承されている地域や社会層、さらに誦経される儀礼コンテキストによって多様化している。

描写が重要な主題となっているとは言えず、Brereton［1995: 18-19］によってタイプ 2①②とされたこれら 2 つのテキストもタイプ 1 に属すると考えられる。

[7] Brereton［1995: 125］は、18 世紀後半、19 世紀、20 世紀初めに非常に人気があり、影響力が強く、物議をかもした文献である、としている。

2.『マーレッヤデーヴァ長老物語』

ここからは、上述した「プラ・マーライ」文献の中でもパーリ語で記された『マーレッヤデーヴァ長老物語』がどのような源泉資料に基づき成立したのかを考察していく。

2.1.『マーレッヤデーヴァ長老物語』の先行研究

『マーレッヤデーヴァ長老物語』に関する包括的な先行研究として、Eugène Denis, “Braḥ Māleyyadevattheravatthuṁ: Légende bouddhiste du saint thera Māleyyadeva”, Sorbonne: Doctoral Thesis, 1963 があるが、未刊であり入手困難である[8]。この博士論文には、『マーレッヤデーヴァ長老物語』の校訂テキストとそのフランス語訳、タイ語の『プラ・マーライ・クロン・スワット』のフランス語訳、さらに、スリランカ所伝の仏教説話集 *Rasavāhiṇī* (以下、*Ras* と略す)中の一話である「チューラガッラの物語」（ “Cūlagalla-vatthu” ）のフランス語訳が収められている。この博士論文の内容は、Denis［1965］でその概要を知ることができるだけであったが、1990 年代に至って Collins［1993］において、Denis の博士論文に収められていた『マーレッヤデーヴァ長老物語』のローマ字テキストが *Journal of The Pali Text Society* に再録され、Collins［1993］により、英訳と Denis の論文に対する考察がなされた。その後、『プラ・マーライ・カム・ルアン』を中心とした「プラ・マーライ」文献の全体像を明らかにした Brereton［1995］の第 4 章「パーリ／ラーンナーテキスト」において、さらなる考察が加えられている。

また、タイ人研究者による主な先行研究として Supaporn Makchang［1978］があり、タイ文字表記のテキストとタイ語訳が収められている[9]。

2.2.『マーレッヤデーヴァ長老物語』の梗概

『マーレッヤデーヴァ長老物語』の梗概を見る。なお、以下諸物語の梗概に付したセクション番号は本論文のテキスト・翻訳篇『マーレッヤデーヴァ長老物語・マーレッヤデーヴァ長老物語註』に従い、便宜上付したものである[10]。

〈第 1 部〉

①【帰敬文】

②【長老による天界と地獄の遍歴】

ランカー島に住むマーレッヤデーヴァ長老は、神通力によって天界と地獄を廻り人間界に戻ると、天界あるいは地獄にどのような人が生まれ、どのような体験をするのかを語った。それを

---

[8] 筆者未見。

[9] タイ人研究者による『マーレッヤデーヴァ長老物語』の先行研究については、Brereton［1995: 37-44］に詳しい。

[10] テキスト及び翻訳は、本論文第 2 部テキスト・翻訳篇 pp. 118-315 を参照されたい。

聞いた人々は教説を信じ悪事をなさず、布施等の功徳を亡き親族のためになし、天界に再生したいと願った。

③【貧者による青蓮華の布施】

ある日長老は、托鉢しに村に赴いた。その時、貧しい人が池で沐浴し 8 輪の青蓮華を取って帰路につくと、長老に遭った。彼は、その花々を長老に布施し、何度生まれ変わったとしても貧しくありませんようにと願った。長老は、その花々でチューラーマニ・チェーティヤを供養しようと考えた。

④【長老のチューラーマニ・チェーティヤへの到来】

長老は、空に昇り、チューラーマニ・チェーティヤに行き、青蓮華の花々で供養し礼拝した。

⑤【帝釈天と長老の対話】

チューラーマニ・チェーティヤにいる長老のもとに帝釈天がやって来た。長老が帝釈天に、弥勒菩薩が到来するのか、と問うと、布薩日である今日 8 日に弥勒菩薩がチューラーマニ・チェーティヤに来るであろう、と答えた。

⑥【1 人目の天人の到来】

長老と帝釈天が対話していると、百人の従者と共に 1 人の天人がやって来た。長老が、その天人が弥勒菩薩なのか、と尋ねると、帝釈天は、その天人は弥勒菩薩ではなく、前世で貧しい草刈り人として生まれ、カラスに布施をした結果、天界に再生したのだ、と功徳ある行いを説き、その天人は東の方角に座った。

（以下⑦から⑰まで残り 11 人の天人が次々に到来し、帝釈天が彼らの功徳ある行いを同様に説いた。）

⑦【2 人目の天人の到来】

従者数：千　　座る位置：西　　前世：牛飼いに布施したバラモン

⑧【3 人目の天人の到来】

従者数：1 万　　座る位置：南　　前世：沙弥に布施

⑨【4 人目の天人の到来】

従者数：2 万　　座る位置：北　　前世：常乞食比丘に布施

⑩【5 人目の天人の到来】

従者数：3 万　　座る位置：東[11]　　前世：アヌラーダプラの織師

⑪【6 人目の天人の到来】

従者数：4 万　　座る位置：西　　前世：ハリターラという富豪

---

[11] 5 人目から 12 人目の天人の座る位置について、*Mth-v* の本文では “tadantare”「そのすぐ後ろに」と述べているが、文脈から到来した天人が順に東西南北に座ったと考えられる。

⑫【7 人目の天人の到来】

従者数：5 万　　座る位置：南　　前世：サッダーティッサ

⑬【8 人目の天人の到来】

従者数：6 万　　座る位置：北　　前世：アバヤドゥッタ

⑭【9 人目の天人の到来】

従者数：7 万　　座る位置：東　　前世：賢明な沙弥で僧団に仕えた

⑮【10 人目の天人の到来】

従者数：8 万　　座る位置：西　　前世：家主に比丘への布施を促した貧者

⑯【11 人目の天人の到来】

従者数：9 万　　座る位置：南　　前世：塔をカンニカーラで供養

⑰【12 人目の天人の到来】

従者数：10 万　　座る位置：北　　前世：銀砂で塔廟を建立した草刈り人

〈第 2 部〉

⑱【弥勒菩薩のチューラーマニ・チェーティヤへの到来】

ついに天人や天女に囲まれた弥勒菩薩が、兜率天から下りチューラーマニ・チェーティヤへ到来し、東方に座った。

⑲【弥勒菩薩の前方の天女について】

長老は、やって来たのが弥勒菩薩であることを確認し、弥勒菩薩の前方にいる白い光線や装身具などを有した天女が前世でどのような功徳をなしたのか尋ねた。すると、帝釈天は、彼女は前世で白い衣などを比丘に与え、その功徳ある行いによって弥勒菩薩の前方にいるのだ、と説いた。

（以下⑳から㉒まで帝釈天が弥勒菩薩の右側・左側・後方にいる天女たちの功徳について同様に説いた。）

⑳【弥勒菩薩の右側の天女について】

荘厳する色：黄色　　前世：黄色の物を比丘に布施

㉑【弥勒菩薩の左側の天女について】

荘厳する色：赤色　　前世：赤色の物を比丘に布施

㉒【弥勒菩薩の後方の天女について】

荘厳する色：黒色　　前世：黒色の物を比丘に布施

㉓【帝釈天と長老の対話】

長老が、弥勒菩薩の波羅蜜について尋ねると、帝釈天は、弥勒菩薩の般若を明らかにし、三十波羅蜜を満たし、精進において優れた菩薩である、と説いた。

㉔【弥勒菩薩と長老との対話（弥勒の福徳）】
弥勒菩薩は、長老が閻浮提から来たことを知ると、人々の願いについて尋ねた。長老は、人々は弥勒仏に会うことを願っている、と答え、弥勒菩薩は、弥勒仏に会いたいのならば、『ヴェッサンタラ・ジャータカ』を一日で一通り聞くよう説いた。
㉕【弥勒菩薩と長老の対話（弥勒の下生）】
長老が、弥勒菩薩はいつ仏になるのか、と尋ねた。弥勒菩薩は、ゴータマ・ブッダの教説が消滅すると、人々の寿命は減少し、刀杖の時代になると賢者以外は亡び、その後賢者が功徳を積み始め、次第に寿命が長くなり老死は知られなくなる。しかし、再び放逸に至り次第に寿命が減少し、寿命が 8 万年になると、閻浮提は栄え平和になり、自らが人間界に赴くだろう[12]、と告げた。
㉖【弥勒の兜率天への帰還】
弥勒菩薩は、長老に自分の話を閻浮提の人々に伝えるよう告げ、兜率天に帰った。
㉗【長老の閻浮提への帰還】
長老も閻浮提に帰り、村に托鉢しに赴いた。人々の為に弥勒菩薩の伝言を語り、それを聞いた人々は、布施などの福徳をなし、命を終えると天界に再生した。
㉘【青蓮華を布施した貧者の再生】
青蓮華を長老に布施した貧しい人は、命を終えると、三十三天に生まれた。帝釈天が、人間界でどんな福徳をなしたのか、と天人に尋ねると、前世で青蓮華を一人の比丘に布施した結果、天人として生まれた、と答えた。帝釈天は、誰であっても弥勒菩薩の言葉に従って福徳をなせば、弥勒に会うことができ、輪廻したとしても苦界に行かないだろう、と説いた。

2.3.『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料に関する先行研究

先述のように Denis の博士論文は未見であるため、Collins［1993: 6-9］と Brereton［1995: 51-91］に基づき、『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料に関する Denis の見解を見ていく。

Denis は、「マーライ尊者とは、実在した人物なのか、あるいは全く神話上の登場人物なのか？」という問題を提起し、「マーライ尊者」のモチーフの起源を探るため Malaya あるいは Māleyya のような「マーライ」に類似する名前で呼ばれる長老が登場するパーリ文献を三蔵だけでなく蔵外仏典についても調べた。その結果、マーライ尊者という人物をスリランカの Duṭṭhagāmaṇi 王と同時代の紀元前 2 世紀にスリランカに住んでいた Maliya という名の実在した長老に帰することができるとした。そして、『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料については、スリラ

[12] 弥勒の下生に関するこの記述は、Brereton［1995: 33-34］によってすでに指摘されているように、*Dīgha Nikāya*（以下 *DN* と略す）の *Cakkavatti-Sīhanāda-Suttanta*（*DN*, 3, pp. 58-79）や、サーリプッタがブッダに未来のことについて問う *Anāgatavaṃsa* (Minayeff［1886］)にも見られる。

ンカ所伝の仏教説話集 *Sahassavatthuppakaraṇa*（以下 *Sah* と略す）と *Ras* 所収の「チューラガッラの物語」（ “Cūlagallavatthu” ）が、『マーレッヤデーヴァ長老物語』第 1 部の源泉資料であるとし、第 2 部については弥勒菩薩がブッダの教えの衰退などを説く *Saddharmālaṅkāraya* の最終章[13]が挿入されたという結論を導いた。

この Denis の論文に対して Collins［1993: 6-9］と Brereton［1995: 28］は、Denis が網羅しきれていない「マーライ」に類似する名前で呼ばれる長老が登場する物語が *Sīhaḷavatthuppakaraṇa*（以下 *Sīh* と略す）に収められていると指摘している。Collins［1993: 6-9］は *Sīh* の第 3 話「弥勒の物語」（ “Metteyya-vatthu” ）が『マーレッヤデーヴァ長老物語』の物語の要素の多くを含み、類似する偈文が見られると指摘し、また、Brereton［1995: 28］は *Sīh* の第 41 話に「マーレッヤデーヴァ長老物語」（ “Māleyyadevatthera-vatthu” ）という物語があると指摘している。

2.4.スリランカ所伝仏教説話集について

Collins［1993: 6-9］と Brereton［1995: 28］の指摘を受け、スリランカ所伝とされる仏教説話集 *Sah*・*Ras*・*Sīh* に収められている「マーライ」に類似する名前で呼ばれる長老が登場する物語を調べ直したところ、*Sah* 中に 4 話・*Ras* 中に 5 話・*Sīh* 中に 3 話あり、これら 12 話のうち 6 話は Denis によって言及されていない。

ここで、スリランカ所伝の仏教説話集について先行研究に基づいて簡単に言及し、「マーライ」に類似する名前で呼ばれる長老が登場する物語を挙げる。

(1) *Sahassavatthuppakaraṇa*[14]

アヌラーダプラの Mahāvihāra にある Guttavaṅka 僧房に住した Raṭṭhapāla が、古シンハラ語で書き留められたものからパーリ語に翻訳したとされ、その成立年代は、5 世紀後半から 9 世紀以前と考えられている。

「マーライ」に類似する名前（Māliyamahādeva）の長老が登場する物語は以下の 4 話である。

「メーガヴァンナの物語」（*Sah*, pp. 180-181）

「チューラガッラの物語」（*Sah*, pp. 224-233）

「マハッリカーの物語」（*Sah*, pp. 272-274）

「ダンタ地主の物語」）（*Sah*, pp. 281-283）

---

[13] Brereton［1995: 32］では、*Saddharmālaṅkāraya* の最終章のタイトルが記されていないが、Wickremasinghe［1900: 126-129］によると、そのタイトルは、 “Metteyya-vastuva” であり、“Metteyya-vastuva” は “Anāgata-vaṃsa-desanāva” とも呼ばれる、としている。筆者は *Saddharmālaṅkāraya* を未入手のため、 “Metteyya-vastuva” が『マーレッヤデーヴァ長老物語』第 2 部の源泉資料と考えられるのか、また、 “Metteyya-vastuva” と *Sīh* 所収の「弥勒の物語」、“Metteyya-vastuva” と *Anāgatavaṃsa*（Minayeff［1886］）との関連性については未確認である。

[14] *Sah* に関する以下の記述は、森［1973b］・Rahula［1956］によるものである。

これら 4 話には「マーライ」に類似する名前の長老が登場するものの、「チューラガッラの物語」を除くと重要な役の長老ではなく、『マーレッヤデーヴァ長老物語』との関連は見当たらない。

(2) *Rasavāhinī*[15]

13 世紀後半の人とされる Vedeha 長老による作品である。*Ras* が依拠した基本資料は *Sah* と考えられているが、*Sah* は簡潔で、散文がほとんどであるのに対し、*Ras* には多くの偈文が含まれ、さらに *Sah* には見られないエピソードが *Ras* によく見られるため、*Ras* が依拠した基本資料は *Sah* だけではないのではないかと考えられている。

また、*Saddharmālaṅkāraya* は 14 世紀の終わりあるいは 15 世紀初めに Devarakṣita Jayabāhu Dharmakīrti によって書かれた *Ras* のシンハラ語版であるが、*Ras* には収められていないいくつかの物語があり、Denis が第 2 部の源泉資料として提示した最終章も *Ras* には収められていない。

「マーライ」に類似する名前（Maliyamahādeva）の長老が登場する物語は以下の 5 話である。

「サーリ王子物語」（*Ras*, pp. 336-348）

「メーガヴァンナの物語」（*Ras*, pp. 352-356）

「チューラガッラの物語」（*Ras*, pp. 397-417）

「マハッリカーの物語」（*Ras*, pp. 457-459）

「ダンタ地主の物語」（*Ras*, pp. 462-466）

これら 5 話の内「サーリ王子物語」以外の 4 話は、偈文が多く、より詳細に描写されているが、上述した *Sah* の 4 話と共通する物語である。また「サーリ王子物語」では「マーライ」に類似する名前の長老は、名前が列挙されている 7 人の長老の内の 1 人に過ぎず、物語に深く関わる長老ではない。

(3) *Sīhaḷavatthuppakaraṇa*[16]

77 説話が現存しており、そのうち前半の 5 章 45 話は、「正篇」と言える部分であり、後半の 32 話は、後に付加されたいわば「続篇」に相当する部分と考えられている。正篇にある 3 つの奥付から、正篇の部分はクリシュナ河口の港町と考えられる Kaṇṭakasola の Paṭṭakoṭṭivihāra 出身の Dhammanandi（あるいは Dhammadinna）という長老によって著わされたとされている。*Sīh* はスリランカ所伝の仏教説話集とされているが、その校訂テキストは、スリランカの寺院で発見されたビルマ文字で書写された 2 種類の写本とビルマでコピーしてきた別の写本一種に基づいたテキストである。*Sīh* がいつ頃ビルマに伝わったのかは明確ではないが、Medhaṅkara Saṅgharāja

---

[15] *Ras* に関する以下の記述は、Matsumura［1999］によるものである。

[16] *Sīh* に関する以下の記述は、橘堂［1971］と森［1973a, 1983］、Ver Eecke［1980］によるものである。

が著わした *Lokappadīpakasāra* に、*Sīh* が引用されているため 14 世紀にビルマで知られていたことがわかっている。

「マーライ」に類似する名前（Māleyya・Māleyyadeva）の長老が登場する物語は以下の 3 話である。

「弥勒の物語」（*Sīh*, pp. 8-12）

「マーレッヤデーヴァ長老物語」（*Sīh*, pp. 101-102）

「ドゥッタガーマニ王物語」（*Sīh*, pp. 103-106）

『マーレッヤデーヴァ長老物語』と同様のタイトルが付されている *Sīh* 所収「マーレッヤデーヴァ長老物語」では、同じ名前の長老が登場するものの、その物語は異なっており、貧しい長老尼がマーレッヤデーヴァ長老にわずかな粥を与え、その善業により得られた果報を説く物語である[17]。

2.5.『マーレッヤデーヴァ長老物語』と「チューラガッラの物語」

Denis が『マーレッヤデーヴァ長老物語』第 1 部の源泉資料と考えた「チューラガッラの物語」と『マーレッヤデーヴァ長老物語』とを比較検討する。「チューラガッラの物語」は、*Sah* と *Ras* とに収められており、*Ras* の方が *Sah* より偈文を多く用い、詳細な描写が増えているが、両話の大筋は一致している。以下に *Sah* 所収「チューラガッラの物語」の梗概を示し、『マーレッヤデーヴァ長老物語』と比較検討した結果を示す。

2.5.1.***Sah*** 所収「チューラガッラの物語」の梗概

①【長老の優婆塞の許への訪問】

ある日マリヤマハーデーヴァ長老は腹痛に苦しみ、薬となる粥を得る為に Cūlagalla という名の優婆塞のもとに向かった。

②【長老と優婆塞のチューラーマニ・チェーティヤへの訪問】

粥が煮えるまで、長老はチューラーマニ・チェーティヤを供養する為に三十三天に優婆塞を連れて行った。

③【1 人目の天人の到来】

長老と優婆塞はチューラーマニ・チェーティヤを供養しに来た銀色の装身具等で荘厳された 1 人の天人を見た。優婆塞が、その天人が弥勒菩薩なのか、と問うと、長老は、その天人は弥勒菩薩ではなく、前世で牛飼いだった時、蟻塚を供養した結果、天界に生まれた、と答えた。

---

[17] *Sīh* 所収「マーレッヤデーヴァ長老物語」と類似する物語としては、*Sah* と *Ras* 所収の「マハッリカーの物語」が挙げられる。

（以下④から⑦まで同様に天人たちが到来し、彼らが前世でなした功徳について長老が説いた。）

④【2 人目の天人の到来】

荘厳するもの（色）：珊瑚（色）　前世：牧牛者、砂の塔を建立

⑤【3 人目の天人の到来】

荘厳するもの（色）：金（色）　前世：牧牛者の子、砂の塔を建立

⑥【4 人目の天人の到来】

荘厳するもの（色）：マニ（色）　前世：牧牛者の子、塔を建立

⑦【5 人目の天人の到来】

荘厳するもの：七宝　前世：様々なものを布施した男

⑧【弥勒菩薩の到来】

天人たちに取り囲まれてやって来た弥勒菩薩は、優婆塞と長老に会い、長老が優婆塞の功徳ある行いについて語ると、弥勒菩薩は優婆塞に天衣を贈った。

⑨【長老と優婆塞の帰還】

閻浮提に帰ると、長老は粥を食べて腹痛が治ると精舎に戻り、優婆塞は天界で弥勒菩薩に会い天衣を貰ったことを人々に伝え、その 7 日後に命を終え、兜率天に再生した。

2.5.2.『マーレッヤデーヴァ長老物語』と「チューラガッラの物語」との比較

共通点は、長老がチューラーマニ・チェーティヤを訪れ、そこに次々と到来する天人たちが弥勒菩薩であるのかどうかという問答があり、その天人たちの前世での善業が語られるということである。

相違点は、長老は天界にのみ訪れ、地獄を廻ったという描写がないことである。また、『マーレッヤデーヴァ長老物語』ではチューラーマニ・チェーティヤを訪れた天人たちの前世を問うのがマーレッヤデーヴァ長老で、それに答えるのが帝釈天であった。一方、「チューラガッラの物語」では、問うのは優婆塞で、マリヤマハーデヴァ長老が答えている。また、『マーレッヤデーヴァ長老物語』では、従者の人数が増加しながら 12 人の天人が到来しているが、「チューラガッラの物語」では 5 人しか到来しておらず、従者の数よりむしろそれぞれの天人を荘厳する色によって区別しており、天人の前世での行いも一致しない。

さらに、「チューラガッラの物語」では、『マーレッヤデーヴァ長老物語』第 2 部にみられる弥勒菩薩を囲む 4 人の天女の描写や、それに続く帝釈天と長老の対話や弥勒菩薩と長老の対話の描写もない。『マーレッヤデーヴァ長老物語』では閻浮提に帰ると長老が人々に『ヴェッサンタラ・ジャータカ』の朗詠を聞きなさいという弥勒の言葉を伝えているが、「チューラガッラの物語」では、優婆塞が弥勒菩薩から贈られた天衣について人々に語っている。

以上のように、『マーレッヤデーヴァ長老物語』と「チューラガッラの物語」は、類似する名前の長老が登場し、チューラーマニ・チェーティヤを訪れ、到来する天人たちが弥勒菩薩であるのか否か、という問答を含んでいるが、両話はかなり相違していることが判る。

2.6.『マーレッヤデーヴァ長老物語』と「弥勒の物語」

先述した *Sah*・*Ras*・*Sīh* に収められている「マーライ」に類似する名前の長老が登場する 12 話を翻訳したところ、*Sīh* に収められている「弥勒の物語」が『マーレッヤデーヴァ長老物語』に最も類似していた[18]。

以下に *Sīh* 所収「弥勒の物語」の梗概を示し、『マーレッヤデーヴァ長老物語』と比較検討した結果を示す。

2.6.1.***Sīh*** 所収「弥勒の物語」の梗概

①【青蓮華を長老に布施】（*Mth-v*③・④）

マーレッヤ長老が托鉢しに村に入ると、ある人が長老を見て 8 輪の青蓮華を長老に布施した。長老は花々をチューラーマニ・チェーティヤに供えよう、と考えて、空に昇りチューラーマニ・チェーティヤに向かった。

②【帝釈天と長老の対話】（*Mth-v*⑤）

帝釈天が従者を伴って長老に近づき、帝釈天は長老に弥勒菩薩が今日 8 日にチューラーマニ・チェーティヤに来るだろう、と伝えた。

③【1 人目の天人の到来】（*Mth-v*⑩）

そこに、1 人目の天人が到来し、長老が帝釈天に、その天人が弥勒菩薩なのか、と問うと、帝釈天は、その天人は弥勒菩薩ではなく、前世ではアヌラーダプラの織り師でたくさんの功徳を積んだのだ、と答え、天人は南方に立った。

（以下④から⑥まで帝釈天が天人の前世での行いについて同様に説いた。）

④【2 人目の天人の到来】（*Mth-v*⑪）

前世：ハリターラのティッサという施主　　立ち位置：西

⑤【3 人目の天人の到来】（*Mth-v*⑫）

前世：サッダーティッサ　　立ち位置：北

---

[18] Collins［1993: 6-9］では、*Sīh* 所収の「弥勒の物語」が『マーレッヤデーヴァ長老物語』の物語の要素を多く含み、類似する偈文がみられるとしているが、*Sīh* 所収「弥勒の物語」が『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料と考えられるか否か、ということについて詳細な議論には及んでいない。

⑥【4 人目の天人の到来】（*Mth-v*⑬）

前世：ドゥッタガーマニアバヤ　　立ち位置：東

⑦【弥勒菩薩と 4 人の天女の到来】（*Mth-v*⑱ ~ ㉒）

ついに弥勒菩薩が種々の色・赤色・赤黄色・黄色で荘厳された 4 人の天女と共に到来すると、帝釈天が彼女たちの前世での功徳ある行いについて説いた。

前世：花で供養　　立ち位置：右

前世：塔を供養　　立ち位置：左

前世：カンニカーラで供養　立ち位置：右

前世：銅旗を作る　　立ち位置：左

⑧【弥勒菩薩と長老の対話】（*Mth-v*㉕）

長老が閻浮提から来たことを知ると、弥勒菩薩は人々の資糧について尋ねた。長老は、人々は善業をなし弥勒に会うことを願っている、と答えると、弥勒菩薩は自身の波羅蜜について長老に語った。

⑨【長老の帰還】（*Mth-v*㉖・㉗）

弥勒菩薩は兜率天に帰り、長老も村へ戻り、人々に弥勒菩薩との会話について語り、それを聞いた人々は天界に再生した。

2.6.2.『マーレッヤデーヴァ長老物語』と「弥勒の物語」との比較

共通点はその大筋である。両話の対応箇所は、上述した「2.6.1. *Sīh* 所収「弥勒の物語」の梗概」の右側に、「2.2. 『マーレッヤデーヴァ長老物語』の梗概」で付した番号を記した。「弥勒の物語」においてチューラーマニ・チェーティヤに到来する 4 人の天人が『マーレッヤデーヴァ長老物語』の 5 人目から 8 人目に到来する天人の前世とほぼ合致することが判る。

また、多少異なるが同様の偈文が見られる。以下に挙げる一連の偈文は、『マーレッヤデーヴァ長老物語』の方は第㉕節、「弥勒の物語」の方は第⑧節に含まれ、弥勒菩薩が自身について語っている偈文である。

『マーレッヤデーヴァ長老物語』㉕ ［*Mth-v*, pp. 53-54］	「弥勒の物語」⑧ ［*Sīh*, p. 11］
yaṃ kiñci kusalaṃ katvā mamaṃ patthenti mānusā	yaṃ kiñci kusalaṃ katvā mamaṃ patthenti mānusā/
saṃsārabhayabhītā te bhavissaṃ bhavamocako.	saṃsārabhayabhītānaṃ bhavāmi bhavamocako//
avijjāghorapabhavaṃ mohajālasamākulaṃ	avijjābhavanaṃ ghoraṃ taṇhājālasamākulaṃ/
vuyhantaṃ caturoghesu lokaṃ santārayiss' āhaṃ.	vuyhantaṃ caturoghehi lokaṃ santārayissāhaṃ/
kilesapaṅkamakkhite taṇhātakkārasevite	kilesāvaṭṭapakkhante taṇhātakkarasevite/
saṃsāradisamuḷhe mokkhamaggaṃ adesayiṃ.	saṃsāranadisamūḷhe sumaggaṃ dassayissāhaṃ//
Sañjīve Kāḷasutte ca Tāpane ca Patāpane	sañjīve kālasutte ca tāpane mahātāpane/
Aviciniraye satte saggamaggaṃ adesayiṃ.	avīciniraye satte sabbe nibbāpayissāhaṃ//
aññāṇabandhanā bandhe taṇhājālavasaṃgate	aññāṇabandhanā baddhe taṇhājālavasaṃ gate/
chetvāna bandhanā satte sampāpessāmi nibbutiṃ.	chetvāna bandhanaṃ sabbe sampāpessāmi nibbutiṃ//

相違点としては、第一に、「弥勒の物語」では、マーレッヤ長老が地獄へ訪問していないことである。

第二に、到来する天人の人数や彼らの前世での善業などが異なっており、「弥勒の物語」では、『マーレッヤデーヴァ長老物語』のように次第に従者の数が増すことに触れていない。

第三に、弥勒菩薩と一緒に到来した天女たちの描写が異なっている。『マーレッヤデーヴァ長老物語』では、4 人の天女の前世、象徴する色、弥勒菩薩を中心としてどの位置にいるのかが 1 人ずつ詳細に描写されているのに対し、「弥勒の物語」では、4 人の天女についてまとめて描写されている。また、天女を荘厳している 4 種の色やそれぞれの善業も異なっており、天女たちの立ち位置も『マーレッヤデーヴァ長老物語』では弥勒菩薩を囲むように配置されているが、「弥勒の物語」では、左右に 2 人ずついることになる。

第四に、人々が弥勒仏に会いたいならば『ヴェッサンタラ・ジャータカ』を一日で一通り聞くよう弥勒菩薩が長老に伝言した場面、青蓮華を布施した貧しい人の再生の場面が「弥勒の物語」にはない。

以上のように、『マーレッヤデーヴァ長老物語』と「弥勒の物語」を比較した結果、天人や天女の描写に相違があり、「弥勒の物語」には見られない場面があるものの、物語の粗筋はほぼ一致していることが判る。

2.7.『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料

以上の考察により、*Sah* と *Ras* 所収の「チューラガッラの物語」よりも *Sīh* 所収の「弥勒の物語」の方が『マーレッヤデーヴァ長老物語』に類似しており、*Sīh* 所収の「弥勒の物語」を源泉資料と考えれば、Denis の見解のように『マーレッヤデーヴァ長老物語』第 1 部の源泉資料を *Sah* と *Ras* 所収の「チューラガッラの物語」、第 2 部の源泉資料を *Saddharmālaṅkāraya* の最終章というように 2 つの源泉資料を提示する必要はない。

「マーライ」という名の尊者のエピソードは、様々な文献に散見されるが、『マーレッヤデーヴァ長老物語』は、弥勒を主人公として説かれている *Sīh* 所収の「弥勒の物語」を核とし、「マーライ尊者」を主人公として編集された可能性がある。また、帰敬偈から始まり、布施をした貧しい男の再生の場面で物語を終えるという物語の構成面を整え、さらに、天人と共に到来する従者数の増加や天女の立ち位置など詳細な描写においても『マーレッヤデーヴァ長老物語』は *Sīh* 所収の「弥勒の物語」よりも体系的にまとめられた物語であると言えよう。*Sīh* 所収の「弥勒の物語」は、既に森［1973a］の翻訳研究があるが、「プラ・マーライ」文献との関連は指摘されていない。スリランカ所伝の仏教説話集の一話として研究されてきた *Sīh* 所収の「弥勒の物語」が、東南アジアで編集され、タイで今もなお親しまれている「プラ・マーライ」文献へ発展を遂げたのである。

Sīh 所収の「弥勒の物語」には見られず『マーレッヤデーヴァ長老物語』にのみ現れる地獄の描写などの物語の構成要素は、先述したパーリ語文献以外の源泉資料に基づき、加筆されていったと考えられる。これらの物語の構成要素は、*Sīh* 所収の「弥勒の物語」から『マーレッヤデーヴァ長老物語』などタイに伝わる「プラ・マーライ」文献群への発展において非常に重要である。なぜなら、「プラ・マーライ」文献群の中でも最も親しまれているタイ語の『プラ・マーライ・クロン・スワット』では、地獄の描写が半分を占めるようになるからである。次に、長老の地獄遍歴の描写に着目し、「プラ・マーライ」文献の展開について考察を進める。

3.『マーレッヤデーヴァ長老物語』の展開

『マーレッヤデーヴァ長老物語』・その註釈文献『マーレッヤデーヴァ長老物語註』[19]・欽定版『プラ・マーライ・カム・ルアン』・『プラ・マーライ・クロン・スアット』に説かれる長老の地獄遍歴の記述の原文と和訳を以下に挙げる[20]。

3.1.『マーレッヤデーヴァ長老物語』（*Mth-v*, pp. 19-20）

so pana thero punappunaṃ niraye paccamānānaṃ *nārakānaṃ pavuttim āharitvā* tesaṃ ñātakānaṃ kathetvā dānādīni puññāni kārāpetvā tesaṃ uddissa puññānumodanena laddhapuññaphalena devalokaparāyane karonto tatth' eva vihāsi. so pi iddhibalena devalokañ ca yamalokañ ca gacchati. devaloke ratanattaye pasannānaṃ upasāsakānaṃ upāsikānaṃ mahantam isiriyaṃ disvā āgantvā "asuko ca upāsako asukā ca upāsikā asukasmiṃ nāma devaloke nibbattetvā mahāsampattim anubhavantī" ti manussānaṃ kathesi. yamaloke pāpamanussānaṃ mahantaṃ dukkhaṃ disvā āgantvā "asuko ca asukā ca asukasmiṃ niraye nibbattetvā mahantaṃ dukkham anubhavantī" ti manussānaṃ kathesi. manussā sāsane pasīdanti pāpāni na karonti dānādīni puññāni ñātakānaṃ kālakatānaṃ uddissiṃsu te uddissa puññānumodanena laddhapuññaphalena devalokaparāyanā honti.

【和訳】

そしてその長老は、しばしば地獄で煮られている地獄の者たちのために伝言を持っていき、彼らの親族に語り、布施などの功徳をさせ、彼らのために指定させ、功徳の随喜によって得られた功徳の果報によって、天界に［再生することを］目的とする者となり、まさにそこ（天界）に住していました。また彼は、神通力によって天界と閻魔界へ赴きました。三宝の備わった天界へ明浄な優婆塞や優婆夷の偉大な自在を見にやって来ると、「そのような優婆塞やそのような優婆夷は、実にそのような天界に生まれて、大きな幸福を享受します」と人々の為に語りました。閻魔界に悪人たちの大きな苦を見にやって来ると、「そのような男やそのような女はそのような地獄に生まれて、大きな苦を経験します」と人々の為に語りました。人々は諸々の教説を信じ、悪事をなさず、布施をはじめとする諸々の功徳を亡き親族たちのために指定しました。彼らは［功徳を］指定し、功徳の随喜によって得られた功徳の果報によって、天界に［再生することを］目的とする者となりました。

---

[19] 『マーレッヤデーヴァ長老物語註』は、先述したように『マーレッヤデーヴァ長老物語』の注釈書である。『マーレッヤデーヴァ長老物語註』では、三蔵やその注釈、副註、さらに、蔵外仏典を引用し注釈している。本論文第 1 部研究篇第 4 章において詳説。

[20] 引用関係を明確にするため、便宜上枠線を引く。

3.2.『マーレッヤデーヴァ長老物語註』（*Mth-v-ṭ*, pp. 132-135）[21]

narakānaṃ pavuttiṃ āharitvā ti ettha so pana kira thero sattānaṃ upakārako mahāmoggallānathero viya. tena vuttaṃ.

thero gantvā abhikkhaṇaṃ ñātuṃ narake vattamānaṃkaṃ
yathā pi moggallāno ca desetvā dhammam uttamaṃ
nārakānaṃ pamocetuṃ devathero tathā ayaṃ.
yathā pi moggallāno nāsetvā narakaggiyo
vuṭṭhidhāraṃ pavatteti devatthero tathā ayaṃ.
yathā pi moggallāno ca nāsetvā lohakumbhiyo
nāseti uracakkāni thero so maleyyo tathā.
yathā pi moggallāno ca pātetvā simbalivanaṃ
nāseti pabbataṅgāraṃ devatthero tathā ayaṃ.
yathā pi moggallāno ca katvā khāranadiṃ madhuṃ
pāyesi amataṃ satte devatthero tathā ayaṃ.
yathā pi moggallāno ca netvā nārakapesanaṃ
kathesi ñātake nesaṃ devatthero tathā ayaṃ.
tasmā mālayyadevatthero sabbattha pākato
iddhinibbatto moggallāno ca devatthero thito pa ti.

bahuguṇo narakānaṃ devānaṃ ca bahuguṇo. tesaṃ hi vattamānānaṃ netvā āha ca ñātīnaṃ. nārakā vā pi petā vā disvā mālayyam āgataṃ vanditvā sādareneva evam āhaṃsu, tassa ca bhante sattupakārā ca gantvāna asukaṃ nāma niggamaṃ evaṃnāmā ca ñātikā kathetha vattamānānaṃ, karotha bahukaṃ subhaṃ, sāretha buddhādiguṇe, kappetha saphalañ ca no anādidānam attam pi datvā vā pi sahatthenāparesaṃ vānumodento kappetha saphalañ ca no sutvā tesaṃ kathaṃ thero gantvā taṃ tehi yācituṃ yan tehi kathitaṃ vācaṃ tesaṃ ñātikānam āha ca. evaṃnāmo ca puriso evaṃnāmā ca itthikā bahupāpakarā loke thitā ajja aviciye evaṃnāmo ca puriso evaṃnāmā ca itthikā bahupāpakarā loke petāni honti idāni ca disvā maṃ evam āhaṃsu sabbe rodaparāyanā evaṃnāmā ca ñātikā evaṃnāmā mātāpitā evaṃnāmā puttadārā sace amhe sinehakā dānādiṃ pi puñaṃ katvā phalaṃ kappetha no ica. sutvā sabbe namassitvā devattheraṃ mahiddhikaṃ pattapuvādikapuñaṃ katvā kappenti taṃ phalaṃ. sabbe te anumoditvā taṃ puñaṃ ñātikappitaṃ muñcitvā te tato dukkhā nibbattiṃ susurālaye tasmā hi māleyyadevatthero nāma mahiddhiko attano katakicco ca sattānam upakārako ti.

---

[21] 以下に挙げる *Mth-v-ṭ* は、底本に従う。校訂については、*Mth-v-ṭ*, pp. 132-135 を参照されたい。

【和訳】

nārakānaṃ pavuttiṃ āharitvā（地獄の者たちに伝言を持っていき）とは、ここではその長老が、衆生の資助者マハーモッガラーナ長老のようである［という意味である］。

だから言われたのである。

［マーレッヤデーヴァ］長老は繰り返し、地獄で起こっていることを知るために［地獄へ］行くのである、モッガラーナが地獄の者たちを解放させるために無上の法を示すように、デーヴァ長老もそのようである。

そして、モッガラーナが地獄の火を滅して雨を生じさせるように、デーヴァ長老もそのようである。

そして、モッガラーナが銅釜を破壊させ、胸輪を破壊させるように、かのマーレッヤ長老もそのようである。

そして、モッガラーナがシンバリ樹林を倒し、炭火の山を破壊させるように、かのデーヴァ長老もそのようである。

そして、モッガラーナが灰汁河を蜜にし、甘露を衆生に飲ませるように、かのデーヴァ長老もそのようである。

そして、モッガラーナが地獄の使者を連れて行き、彼らの親族に語るように、かのデーヴァ長老もそのようである。

それ故に、マーラッヤデーヴァ長老はあらゆる所において有名である、モッガラーナ長老が神通力を生じた、デーヴァ長老も同様である、と。

地獄に於けるたくさんの功徳を有し、天界のたくさんの功徳を有する［マーレッヤデーヴァ長老］は、［彼らの伝言を］持って彼らの生きている親族たちのために語った。地獄の者たち、あるいは餓鬼たちはマーラッヤがやってくるのを見て、敬意を持って礼拝しこう言った。

「尊者よ、衆生の資助者であるあなたは、そのような名前の町へ行き、このような名前の生きている親族たちに語って下さい『沢山の善業をなして下さい、仏などの徳を記憶させて下さい、果のあることをなしてください、食物などの布施を自分にも与え、自らの手で他人を喜ばせ、我々に果のあることをなしてください』」

長老は彼らの話を聞いて［人間界へ］行き、彼ら（地獄の者たち、あるいは、餓鬼たち）によって語られた言葉を、彼らに求められたことを、彼らの親族たちに語った。

「このような名前の男とこのような名前の女は、たくさんの悪業をなし、今日、阿鼻地獄界にいる、このような名前の男とこのような名前の女はたくさんの悪業をなし、世において今、餓鬼となっている、［彼らは］私に会い、こう言いました『泣いて悲しんでいるこのような名前の親族が、このような名前の父母が、このような名前の息子娘が皆、我々を愛しているのであれ

ば、布施などの福徳をなしこの世で果報をなして下さい。』」

［その言葉を］聞いて、皆は偉大な神通力を持つデーヴァ長老を礼拝し、鉢を満たすなどの福徳業をなし、その果報をなした。彼らは皆、親族によってなされたその福徳を喜び、その苦しみから解放され、善き神々の家に再生した、それ故にマーレッヤデーヴァ長老は偉大な神通力を有し、自らのなすべきことをなす衆生の資助者である、と［言われるのである］。

3.3.『プラ・マーライ・カム・ルアン』(*PM-KhL*, pp. 6-8)

ยถาปิ โมคฺคลฺลาโน จ ดุจพระโมคคัลลาน์ล้นเลิศ ประเสริฐเมตตาจิตร เสด็จด้วยฤทธิสามรรถ ไปโปรดสัตว์นรกานต์ แล้วเห็จทยานยังสวรรค์ โปรดอมรสรรพเทเวศร์ ด้วยธรรเมศประเสริฐ การุญเลิศสบสมัย

เทวตฺเถโร ฐิโต ตถา ส่วนพระมาลัยเรืองฤทธิ์ ฤๅผิดเพียงพิมพ์เดียว ธโทนเทียวหรรเห็จ ครั้งหนึ่ง เสด็จคลาไคล ยังต่ำใต้นรกานต์ หวังประทานความสวัสดิ์ ให้ฝูงสัตว์รำงับ ดับกรรหายทุกข์เทวศ ด้วยพระเดชพระองค์ จงจักให้สุขัง ครั้นสัตว์ สั่งความอนาถ มาถึงญาติพงศ์พันธุ์ ให้ธรงธรรม์ธรับรอง ธปองมาแจ้งทุกสิ่ง หฤทัยยิ่งการุญญา ธพิจารณาฝูงสัตว์ ทนทุกข์สหัสสาหส กำสรดแสนสุดเทวศ ด้วยอาเภทผลกรรม ทำมาเองฤๅหยุด

พหูคุโณ นรกานํ เทวานญฺจ พหูคุโณ ธธรงคุณสุดสรวงสวรรค์ ทั้งนิริยันยมโลก หวังดับโศกโศกาครั้งหนึ่งจราหรรเห็จ ลัดมือเด็ดเดียวดล นรกายลบทันนาน ด้วยฤทธิญาณจำเรอญ ก็พัญเออญภูลลิงหาศน์ ปทุมมาศเท่ากงจักร พระองค์อรรคเสด็จนั่งเป็นบัลลังก์ไพจิตร์ ธก็ทำฤทธิ์มหัศจรรย์ เป็นฝนสวรรค์เซงซู่ ดับเพลิงวู่วอดวาย ทำลายโลหกุมภิ เป็นธุลีม้วยหมด แม่น้ำกรดแสบร้อน แห้งขอดข้อนเหือดหาย ภูเขาเพลิงทลายดับดาษ ไม้งิ้วขาดหนามขจัด

สรรพสัตว์นิริยา ดับทุกขาเกษมสานต์ วันทนาการกราบเกล้า พระเจ้ามาแต่ใด จึงมาให้ศุขแก่ข้า พระเถราพจนาท เรามาแต่ชาติมนุสสาฝูงนรกาพั่งข่าว อันธกล่าวเปรมปรีดิ์ จึ่งทูลคดีพระเป็นเจ้า จงโปรดเกล้าสัตตา บอกฐานาที่อยู่ขอพระพู้เป็นเจ้า จงบอกเล่าแก่ญาติ แห่งข้าบาทอันมี ในบุรีชื่อนั้น ในบ้านอันชื่อนี้ ชนบทมีชื่อไกลบอกนามในบิตุเรศ อยู่ประเทศที่นั้น นามพงศ์พันธุ์นานา บุตรธิดาสามี มาตุภคินีพี่ชาย ให้ทั้งหลายเร่งทำ กุศลกรรมส่งมา ให้บูชาพระพุทธ ธรรเมศอุดมเลิศ สงฆ์ประเสริฐศีลาจารย์ แล้วให้ทานยาจกทักษิโณทกส่งมา แก่ฝูงข้าทุกตน จึ่งจะพ้นจากทุกขา

พระเถราฟังสาร รับพจมานทุกอัน ธเหาะหรรษ์ด้วยฤทธิรุด

【和訳】

yathā pi moggallāno ca…マーライ尊者は、神通力で地獄にいる衆生を救済しに行き、いつの時代においても最良のダルマと最高の慈悲によって、あらゆる神々を救済しに天界へ飛翔して行った、卓越した慈悲心を備えた偉大なる目連尊者のようである。

devatthero ṭhito tathā…一方、輝かしい神通力を持ったマーライ尊者は、［目連と］同じように、ひとりで飛翔した。ある時、［マーライ尊者は］地獄へ下り、彼の威力によって幸福を与え衆生の苦しみを消そうとし、幸福をもたらした。［地獄にいる］衆生が親族に哀れな姿を伝えるよう［マーライ尊者に］頼むと、［マーライ尊者は］すべてを伝えようと考えた。心は慈悲に満ちていた。［マーライ尊者は］自らの行いの結果としての、尽きることのない、強烈な苦しみや非常に多くの悲しみに耐えている［地獄の］衆生のことを考えた。

bahuguṇo nārakānaṃ devānaṃ ca bahuguṇo…［マーライ尊者は］天界と閻魔界の両方における最高の徳を持ち、苦しみや悲しみを鎮めたいと考えた。ある時、飛翔し、あっという間に地獄に至った。彼の神通力によって転輪ほどの大きさの金色の蓮の獅子座が現れた。最上なる人（マーライ尊者）は美しい玉座に掛けた。非常に不思議な神通力で、天の雨をザーザー降らせて燃えている炎を消し尽くし、銅釜を破壊して粉々にし、ヒリヒリと痛む酸の水が流れる河を干上がらせて消失させ、炎の山を破壊し消滅させ、刺の樹から刺を抜いて取り除いた。

地獄の衆生は、苦しみがなくなり、喜んだ。額づいて礼拝し、尊敬を持ってお辞儀して尋ねた、「あなた様はどこからいらっしゃって、そして私たちに幸福をもたらすのですか？」長老（マーライ尊者）は答えた。「私は人間界から来ました」と。地獄にいる者たちはマーライ尊者の言ったことを聞いて喜び、そして［救済］方法を（マーライ尊者に）告げた。「どうか居場所を伝えてください。主であるお方にお願いします、遠い名前の田舎のこの名前の村のその名前の町にいる、私の親族に教えてください。」その場所にいる父の名前を告げ、息子・娘・夫・母・姉妹・兄弟の様々な親族の名前を告げた。「すべての者たち（親族）に急いで善業させ、指定させ、ブッダ・高貴なダルマ・戒の教授者である僧団を供養させ、乞求者に布施を与え、滴水を我々みんなに送らせます。そうすれば、苦しみから解放されるでしょう。」

長老（マーライ尊者）は彼らの言葉を聞き、それぞれの言葉を受け取り、喜び、神通力によって飛翔した。

3.4.『プラ・マーライ・クロン・スワット』（*PM-KS*, p. 16）

พระมาลัย ไปโปรดสัตว์ดุจองค์พระโมคคัลลาน์ญาณ ให้นรก เย็นสำราญ พ้นจากยากเพียงปางตาย เมื่อพระมาลัย เธอยังอยู่ หม้อเหล็กนั้น แตกย่อยหาย ครั้นเธอ เสด็จผันผายจากนรก ด้วยฤทธี ผลบาปกรรม อำนวยให้ นรกไซร้ กลับทุกข์มีหม้อเหล็กอันพลัดพรายธุลี ที่แหลกนั้น ประมวลมา คุมเข้าเป็นดวงกลม ต้มสัตว์ไว้ ร้อนนักหนาเพราะบาป ใช้ชีบาให้เสียกิจ พระวินัย

【和訳】

マーライ尊者は、目連尊者のように、衆生を救済しにいき、地獄を涼しく快適にし、死ぬような苦しみから解放した。マーライ尊者がまだ［地獄に］いる時、鉄釜は木っ端みじんに壊れてなくなった。［マーライ尊者が］神通力によって地獄から帰っていくと、悪業が地獄を苦しみあるものに戻し、破壊され木っ端みじんになった鉄釜は（破片が）集まった。（鉄釜は）組み合わさってまるくなり、衆生を煮ていた。とても熱かった。僧侶を使いヴィナヤ（律）を犯させたという悪業のためである。（地獄の描写の一部抜粋）

3.5.諸「プラ・マーライ」文献の引用関係

以上のように 4 話の「プラ・マーライ」文献に説かれるマーライ尊者の地獄遍歴の記述をみると、『マーレッヤデーヴァ長老物語』に見られる nārakānaṃ pavuttim āharitvā（地獄の者たちのために伝言を持って行き）という句について『マーレッヤデーヴァ長老物語註』では、マーレッヤデーヴァ長老が目連尊者のように地獄の者たちに法を示したなど、目連尊者の比喩（yathā pi moggallāno ca）を用いて注釈している。そして、この yathā pi moggallāno ca などのパーリ語句がタイ語とパーリ語で書かれた欽定版『プラ・マーライ・カム・ルアン』に引用されていることがわかる。『プラ・マーライ・カム・ルアン』の結びでは、この作品を「プラ・マーライ」文献のパーリ語に従って叙述した、と記し[22]、また、Brereton［1995: 173］は『プラ・マーライ・カム・ルアン』は、パーリ語の『マーレッヤデーヴァ長老物語』のいくつかの版の一つからの描写を増広し精巧にした多くの文章を含んでいる、と指摘している。『プラ・マーライ・カム・ルアン』の地獄の描写で引用されている yathā pi moggallāno ca・devatthero ṭhito tathā・bahuguṇo nārakānaṃ devānaṃ ca bahuguṇo という 3 種のパーリ語句は、Denis によって校訂された『マーレッヤデーヴァ長老物語』（*Mth-v*, pp. 19-20）には異読としても現れず、その注釈書である『マーレッヤデーヴァ長老物語註』において現れている。すなわち、『プラ・マーライ・カム・ルア

[22] *PM-KhL*, p. 73.

ン』の著者とされる Thammathibet 王子が基本資料としたのは、『マーレッヤデーヴァ長老物語』だけでなくその注釈書も含めたパーリ語の「プラ・マーライ」文献と言えるのである。

マーライ尊者の地獄遍歴の描写に着目すると、『プラ・マーライ・カム・ルアン』において『マーレッヤデーヴァ長老物語』の注釈書『マーレッヤデーヴァ長老物語註』から、パーリ語句を引用していることから、『プラ・マーライ・カム・ルアン』の成立した 1737 年以前に『マーレッヤデーヴァ長老物語』とその注釈文献『マーレッヤデーヴァ長老物語註』が成立していたことがわかる。すなわち、『マーレッヤデーヴァ長老物語』→『マーレッヤデーヴァ長老物語註』→『プラ・マーライ・カム・ルアン』の順に成立したことになる。

タイで最も流布している『プラ・マーライ・クロン・スワット』では、どのような悪業によりどのような地獄に再生するのかが説かれ、地獄の描写が増大している。この『プラ・マーライ・クロン・スワット』がいつどのように成立したのかは、明らかではないが、マーライ尊者が目連尊者のように地獄の衆生を救済しに行った、という言及がみられるため、『マーレッヤデーヴァ長老物語』から直接展開したのではなく、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』や『プラ・マーライ・カム・ルアン』などの目連尊者に言及したテキストの影響を受けて成立したと考えられる。

4.目連尊者

ここからは、先述したマーライ尊者の地獄遍歴の記述で、マーライ尊者（マーレッヤデーヴァ長老）が目連尊者のようである、と喩えられている点に着目していく。マーライ尊者は目連尊者のように衆生の資助者であり、法を示し、地獄の火を破壊させ、雨を降らせ、地獄の釜を破壊した等と説かれている。地獄に関する言及は、パーリ仏典の中でも初期に成立したとされる *Dhammapada* や *Suttanipāta* において既に見られるが[23]、パーリ三蔵中の地獄の描写で目連尊者の地獄遍歴は言及されていない[24]。「プラ・マーライ」文献の多くで、マーライ尊者は目連尊者のようであると喩えられているが、目連尊者が地獄遍歴をし、地獄の衆生を救済したという物語はどこにおいて語られているのであろうか。

4.1.目連尊者の地獄遍歴

目連尊者の地獄遍歴を説く仏教説話として、大衆部に帰属するとされる梵語の仏教説話集 *Mahāvastu-avadāna*（以下、訳号：『マハーヴァストゥ・アヴァダーナ』、略号：*Mv* とする）がある[25]。ここでは、目連尊者が地獄を巡り、八大地獄それぞれの地獄で苦しんでいる者たちを見て、ジェータヴァナに帰り、その様子を四衆に告げ、いかなる悪業もこの世で行ってはならないと説いている。そして、地獄の有様が詳細に説かれ、いかなる業果により、それぞれの地獄へ生まれ変わるのか、さらに、地獄名の由来についても説かれている。『マハーヴァストゥ・アヴァダーナ』では、目連尊者の地獄遍歴について説いているが、目連尊者の威力により、地獄が破壊され、地獄の衆生が救済されたということには言及していない。

4.2.目連尊者と餓鬼

説一切有部の文献に属するとされる梵語の仏教説話集 *Avadānaśataka*（以下、訳号：『アヴァダーナ・シャタカ』、略号：*Av-ś* とする）の第 45 話「目連」では、目連尊者が餓鬼の依頼により餓鬼の親族が布施をなし、餓鬼界から救済することが説かれている[26]。その梗概は、目連尊者が王舎城で 500 人の餓鬼を見ると、餓鬼たちは目連尊者に「前世での悪業により餓鬼の境涯に生まれ変わった。親族が私の名前で布施を指定すれば、餓鬼の生から解放されるだろう」と伝言を依頼した。目連尊者は、親族にその伝言を語り、布施会のための準備をさせた。布施会の準備が整った時には、餓鬼の姿が見えなくなってしまった。目連尊者が釈尊に問うと、餓鬼たち

---

[23] *Dhp*, pp. 86-89, *Sn*, pp. 123-131. 中村［1996a: 53-54, 1996b: 142-148］参照。
[24] 目連尊者は、釈尊の弟子の中でも神通第一として知られる十大弟子の一人である。目連尊者については、*DPPN*, vol. 2, pp. 541-668、山辺［1984: 112-153］に詳しい。
[25] *Mv*, vol. 1, pp. 5-27. 平岡［2010: 4-17］参照。
[26] *Av-ś*, pp. 256-260. 岩本［1968: 176-178］参照。

は目連尊者にも探せない所へ吹き飛ばされた、と語り、釈尊の神通力により餓鬼たちを布施会の場所に呼び寄せ、餓鬼たちに親族による布施を見せて記憶させた。釈尊は、布施を指示して、この布施の福徳が届くように、餓鬼界から速やかに上昇するように、と説き、その説法を聞いた餓鬼たちは三十三天に再生し、天に生まれた餓鬼たちが、前世を思い出し、釈尊のもとを訪れ、聞法した、というものである。

以上のような『アヴァダーナ・シャタカ』の記述は、諸「プラ・マーライ」文献の地獄遍歴の描写の後半に見られる餓鬼（地獄の衆生）の伝言を人間界にいる親族へ伝言し、親族による布施により悪趣から救済されるという点と共通している。しかしながら、『アヴァダーナ・シャタカ』では、餓鬼界からの救済で、諸「プラ・マーライ」文献では地獄からの救済が説かれている点が異なっている。また、諸「プラ・マーライ」文献の地獄遍歴の描写の前半に説かれる目連尊者の威力による地獄の破壊には言及していない。

餓鬼の救済を主題とした小部経典中 *Petavatthu*（以下、訳号：『餓鬼救済物語』、略号：*Pv* とする）において、目連尊者は、餓鬼界を訪れ、餓鬼にどのような悪業をなしたのか、を尋ね、その話を釈尊に伝える者の一人として登場する[27]。この『餓鬼救済物語』の注釈書である *Petavatthu-aṭṭhakathā*（以下、訳号：『餓鬼救済物語註』、略号：*Pv-a* とする）では、天・人・畜生・地獄にはそれぞれの境涯の食があるため、人界から布施を指定しても助けとはならないが、餓鬼だけはその果を受け取れる、という *Aṅguttara Nikāya*（以下、*AN* と略す）の文言を引用し、注釈している[28]。『マーレッヤデーヴァ長老物語註』は、この『餓鬼救済物語註』の注釈を引用し、さらに、*Milindapañhā*（以下、訳号：『ミリンダ王の問い』、略号：*Mil*）を引用し、餓鬼に指定したとしても、4 種の餓鬼のうち「他人の施しによって生きる餓鬼」しかその果報を得ることができない[29]、と注釈している。『マーレッヤデーヴァ長老物語』など諸「プラ・マーライ」文献では、布施の指定による地獄の衆生の救済が説かれているが、古典的なパーリ語仏典に説かれることとは相反しており、その相違を『マーレッヤデーヴァ長老物語註』では、指摘している。しかしながら、タイでは、たとえ地獄へ堕ちていたとしても、布施の指定により悪趣に再生した家族らを救済できるという思想が、定着し、マーライ尊者は、地獄の衆生を救済する資助者として親しまれているのである[30]。

---

[27] 藤本［2007: 304-306］参照。
[28] *Pv-a*, p. 28. 藤本［2006: 191-193］参照。*AN*, vol. 5, pp. 269-270.
[29] *Mil*. p. 294. 中村・早島［1964: 61-62］参照。
[30] Brereton［1995: 124］は、*Mokkala Tham Pet*（目連尊者が餓鬼に問う）という目連尊者と餓鬼との問答を主題とした北タイ語やラオ語で書かれたテキストに言及しているが、タイ語やその他の外国語に翻訳されたことはなく、その内容はわからないとしている。

4.3.目連救母伝説

目連尊者による悪趣からの救済を説く文献として、餓鬼に再生した母を救済する『仏説盂蘭盆経』をはじめとする「目連救母伝説」がよく知られている。「目連救母伝説」は様々の物語に展開し、伝承されているが、ここでは、その原型とされる『仏説盂蘭盆経』・敦煌出土『大目乾連冥間救母変文』・日本に伝わる盆踊唄正本『目連尊者地獄巡り』という 3 話について先行研究に基づき述べておくこととする。

4.3.1.『仏説盂蘭盆経』[31]

岩本［1968: 9-23］によると『仏説盂蘭盆経』は、隋代の『歴代三宝紀』（597）や唐代の『開元釈教録』（730）などの説では、西晋の武帝の時代（265-290）に竺法護が訳したとされるが、梁の天監年間（502-519）の後半に先述された『出三蔵記集』では訳者不明とされている。宗密の『盂蘭盆経疏』によると、前述の竺法護訳とされるもの、法炬が晋の恵帝の時代（290-306）に訳した『灌臘経』、東晋の時代（317-420）の訳者不明の『報恩奉盆経』[32]の 3 種の漢訳があったとされるが、現存するのは、『仏説盂蘭盆経』と『報恩奉盆経』である。『仏説盂蘭盆経』と呼ばれる仏典が 5 世紀の終わり、乃至、6 世紀初めに存在していたと考えられている。この『仏説盂蘭盆経』は、目連救母伝説の母胎とされ、梵語や他の言語の原典が伝承されておらず、漢訳のみが伝承されている。

その梗概は、目連尊者が神通力で亡き母が餓鬼道に堕ち苦しんでいることを知り、母に食物を与えようとしたが、口に入る前に炭と化してしまった。そこで、目連尊者は母の救済方法を釈尊に問うと、目連尊者一人の力では救済できず、安居の最終日である自恣の日、7 月 15 日に、盂蘭盆の中に飲食を供え、衆僧に施せばその功徳によって餓鬼界から逃れることができると、答え、教えの通りに目連尊者はなし、衆僧が歓喜し、その威神力によって目連尊者の母が救済された、というものである。

4.3.2.『大目乾連冥間救母変文』[33]

目連尊者の地獄遍歴に言及するものとして、8 世紀頃作成されたとされる敦煌出土『大目乾連冥間救母変文』がある。

その梗概は、羅卜（出家以前の目連尊者）が僧侶らへ供養するよう母に依頼して商売へ出掛けた。その間、母は供養をなさなかったにもかかわらず、帰宅した息子に、福徳をなしたと嘘

---

[31] 『大正』No. 685, 779a-c.
[32] 『大正』No. 686, 780a.
[33] 『大目乾連冥間救母変文』に関する以下の記述は、柿市他［1994, 1996, 1997］、岩本［1968: 36-39］、筑後［2008］によるものである。

をついた。そのため母は死後阿鼻地獄へ堕ちた。出家し阿羅漢果を得た目連尊者は、母を探し求めたが、見つけられず、釈尊に母の居場所を尋ねた。釈尊は、母は阿鼻地獄にいることを告げると、目連尊者は母を探して、種々の地獄を巡り、阿鼻地獄にまで至った。阿鼻地獄は目連尊者にも耐え難い所であり、釈尊のもとに帰り、これまでの経緯を語り、助力を懇願した。目連尊者は、釈尊に授けられた錫杖によって阿鼻地獄の門を開き、母を探した。遂に母との再会を得たが、地獄で苦しむ母を嘆き悲しみ、再び釈尊のもとを訪れ懇願した。釈尊は帝釈天らを引き連れて地獄を破壊し、母を地獄から餓鬼道に救済した。そして、目連尊者が、母のために施し、7 月 15 日に盂蘭盆をつくったことにより、母は畜生道に生まれ変わり、黒狗となった。目連尊者は黒狗となった母を伴って 7 日間、経典を読誦し、母は女の姿に戻り、遂に罪が滅し、忉利天に再生した、というものである。

4.3.3.盆踊唄正本『目連尊者地獄巡り』

『目連尊者地獄巡り』と題する盆踊唄の正本が明治年間に至るまで刊行されていた。京都大学国文学教室所蔵の頴原文庫に含まれるものが、岩本［1968: 147-169］に言及されている。

その梗概は、釈尊が、亡くなった父母の在処を尋ねた目連尊者に、父は阿弥陀浄土に、母は八万地獄の釜底にいると、答えた。目連尊者は釈尊に許しを請い、地獄巡りを始めた。母を探して種々の地獄を巡り、八万地獄へと辿り着いたが、その扉を開けられず、閻魔大王に扉を開けてほしい、と懇願した。閻魔大王は八万地獄の臣下である八面大王を呼び出し、地獄の扉を開かせた。八面大王は釜の中から、母を金棒に繋ぎ上げ、目連尊者に見せた。目連尊者は、その姿を見る事もできず、娑婆の姿で見せてほしいと懇願し、陽炎の様な母と対面した。時が迫り、母は八万地獄の釜底へ投げ込まれ、目連尊者は母を救えないまま、釈尊のもとへ帰った。釈尊は目連尊者に、千部施餓鬼を行って地獄へ行くよう告げ、御経を認めて目連尊者に与えた。目連尊者は、千部施餓鬼をなし、御経を手にして八万地獄へ向かった。目連尊者が八万地獄の釜に御経を投げ込むと、大釜は 8 つに割れ、8 葉の蓮華となり、その蓮華に乗って母は浮かび、地獄や餓鬼にいる他の衆生も救われた。救済された母は、他者も救われたことを妬ましい、と言ったことにより、再び地獄へ落とされそうになるが、目連尊者が身代わりになると釈尊に懇願したため許された、というものである。

4.3.4.目連尊者による救済

以上、「目連救母伝説」を説く 3 話をみると、目連尊者の母が堕ちた悪趣は、『仏説盂蘭盆経』では、餓鬼道、『大目乾連冥間救母変文』では、阿鼻地獄で、そこから種々の方法によって、餓鬼道、畜生道、人道、天道という段階を経て救済され、『目連尊者地獄巡り』では、八万地獄の釜底である。また、その救済方法は、『仏説盂蘭盆経』では、衆僧への布施による衆僧の威神力

により救済され、『大目乾連冥間救母変文』では、地獄から餓鬼へは釈尊や帝釈天らの威力によって、餓鬼から畜生へは盂蘭盆を造った善根によって、畜生から人へは御経の読誦によって、人から天へは罪の消滅によって救済され、『目連尊者地獄巡り』では、施餓鬼をなし、釈尊から授けられた御経を釜へ投下することにより地獄の釜が破壊され、その釜が蓮華となり、その蓮華に乗って母が救済されている。

『マーレッヤデーヴァ長老物語註』・『プラ・マーライ・カム・ルアン』・『プラ・マーライ・クロン・スワット』では、マーライ尊者が目連尊者のように地獄の釜などを破壊し、地獄の衆生を救済したと記しているが、目連尊者の威力によって地獄が破壊され、地獄の衆生が救済された、という物語は、これら「目連救母伝説」を説く文献にも説かれていないのである。

4.4.『目連尊者の物語』

ここで、*Mahāmoggallānattheravatthu*（以下、訳号：『目連尊者の物語』、略号：*Mogg-vth* とする）を提示する[34]。これは、タイ国立図書館が所蔵するコム文字パーリ語の貝葉写本に基づく初校訂テキストである。このタイトルの写本は、タイ国立図書館にも 1 本しか所蔵されておらず、タイ国立図書館の所蔵写本目録（The Vajirañāṇa Library［1921］）にもリストアップされていない[35]。このテキストは、 “bra moggalā cao supin” とコム文字タイ語でタイトルが書かれた表紙の後に *Supinakumārajātaka* という物語の後に続けて、綴じられていたが、両話の筆跡が異なっているため、別人によって書写されたと考えられる。

その梗概は、目連尊者は、阿鼻地獄へ行きたいと釈尊へ許しを請い、地獄へ向かった。目連尊者が、地獄へ行くと、彼の威力により、雨が降り、銅釜は壊れ、灰汁河は干上がるなどし、地獄の衆生は苦しみから解放された。地獄の衆生は、人間界から来た目連尊者に、各々の家族に布施などの福徳をなし、施水を落とし、布施の果報を我々に指定してほしいという伝言を依頼する。目連尊者は人間界へ戻り、地獄の衆生の伝言を彼らの家族へ伝えると、その家族たちは、福徳をなし、地獄の衆生に指定した。それにより、地獄の衆生たちは地獄の苦しみから脱し、天界に再生し、家族たちもまた、死後天界に再生した。目連尊者が地獄の火を天界に持って行くと、神々は、楽に居座ることができなくなった。それを知った帝釈天が、目連尊者に天界に長く滞在しないよう告げ、目連尊者は、地獄の火が害をもたらさないところへ置きに行き、釈尊のもとに帰り、釈尊は、布施について説法した。

先述した『マーレッヤデーヴァ長老物語註』などに見られる目連尊者の比喩と類似する描写が、『目連尊者の物語』に現れていることが判る。以下に、それぞれのパーリ語文を挙げ、対応

---

[34] テキスト及び翻訳は、本論文第 2 部テキスト・翻訳篇 pp. 316-322 を参照されたい。
[35] タイ国立図書館目録カードのタイトルは *Moggallānasutta* であり、請求番号は、1582/ca/1 である。

箇所を示す[36]。表内の①～⑤は『目連尊者の物語』で語られる順序を示している。

『マーレッヤデーヴァ長老物語註』（*Mth-v-ṭ*, pp. 132-133）	『目連尊者の物語』（*Mogg-vth*, p. 317）
thero gantvā abhikkhaṇaṃ ñātuṃ narake vattamānaṃkaṃ yathā pi moggallāno ca desetvā dhammam uttamaṃ nārakānaṃ pamocetuṃ devathero tathā ayaṃ.	
yathā pi moggallāno nāsetvā narakaggiyo vuṭṭhidhāraṃ pavatteti devatthero tathā ayaṃ.	①devo vassanti
yathā pi moggallāno ca nāsetvā lohakumbhiyo nāseti uracakkāni thero so maleyyo tathā.	②lohakumbhiyo bhijanti
yathā pi moggallāno ca pātetvā simbalivanaṃ nāseti pabbataṅgāraṃ devatthero tathā ayaṃ.	⑤patanti simbalirukkhā ④vikiranti āṅgārapabbatā
yathā pi moggallāno ca katvā khāranadiṃ madhuṃ pāyesi amataṃ satte devatthero tathā ayaṃ.	③khāraṇadiyo sussanti
yathā pi moggallāno ca netvā nārakapesanaṃ kathesi ñātake nesaṃ devatthero tathā ayaṃ.	
tasmā mālayyadevatthero sabbattha pākato iddhinibbatto moggallāno ca devatthero thito pa ti.	

『マーレッヤデーヴァ長老物語註』に現れる目連尊者の比喩と同様の内容が、『目連尊者の物語』で語られているが、その順序や、使用する動詞が異なり、表現は一致していない。従って、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』の著者が、『目連尊者の物語』と同系統の写本を見ながらこの比喩を著したのではなく、『目連尊者の物語』と類似する説話が様々に伝承されており、それらに基いて著した、あるいは、類似する物語を想起して著した、と考えられる。

4.5.目連尊者とマーライ尊者

梵文仏典『マハーヴァストゥ・アヴァダーナ』では、目連尊者の地獄巡りに言及し、『アヴァダーナ・シャタカ』などでは、目連尊者が餓鬼の伝言を人間界に伝え、布施の指定により餓鬼を救済することに言及している。しかし、これらの文献では、地獄の破壊に言及せず、地獄の

[36] 以下に挙げる両テキストは、底本に従う。校訂については *Mth-v-ṭ*, pp.132-133・*Mogg-vth*, p. 317 を参照されたい。

衆生からの伝言ではなく、餓鬼からの伝言を伝え、餓鬼を救済している。日本に伝わる「目連救母伝説」の盆踊唄『目連尊者地獄巡り』において地獄の釜の破壊が言及されるが、ここでは、目連尊者の威力によって地獄の釜が破壊され、母を救済したのではなく、釈尊から授かった御経を釜に投じたことによって破壊されている。

本節で提示した『目連尊者の物語』は、目連尊者が地獄に到来したことにより地獄が破壊され、さらに、地獄の衆生を救済するための伝言をその家族へ伝え、布施を指定させ救済した、と説いており、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』などに言及される目連尊者の比喩と類似した内容を伝えている。マーライ尊者の比喩の源泉となる目連尊者の説話が蔵外パーリ語文献としてタイに伝承されていることが明らかとなった[37]。

5.小結

中部タイでは、『プラ・マーライ・クロン・スワット』が流布し、寺院壁画にマーライ尊者が地獄の衆生に慈悲をたれている姿で描かれていることから[38]、「プラ・マーライ」というと、地獄を想起させる説話であるが、この地獄の描写はパーリ語の『マーレッヤデーヴァ長老物語』では、具体的な地獄の描写はなく、さらに、その源泉資料と考えられる *Sīh* 所収「弥勒の物語」には、地獄の描写は全くない。すなわち、「弥勒の物語」から『マーレッヤデーヴァ長老物語』への展開においてマーレッヤ長老（マーライ尊者）の地獄巡りの描写が加筆されたと考えられ、この「マーライ尊者の地獄遍歴」の記述に焦点を当てると、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』・『プラ・マーライ・カム・ルアン』・『プラ・マーライ・クロン・スワット』では、目連尊者の比喩を用い、マーライ尊者の地獄遍歴を説いていることがわかる。『マーレッヤデーヴァ長老物語』から他の「プラ・マーライ」文献への展開において、目連尊者が地獄を遍歴する姿と重ね合わせてマーライ尊者の地獄遍歴が加筆されたのである。

また、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』・『プラ・マーライ・カム・ルアン』の引用関係をみると、『プラ・マーライ・カム・ルアン』に引用されるパーリ語句が、『マーレッヤデーヴァ長老物語』ではなく、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』から引用していることから、『マーレッヤデーヴァ長老物語』、その注釈書『マーレッヤデーヴァ長老物語註』、『プラ・マーライ・カム・ルアン』の順で成立したと考えられる。『プラ・マーライ・クロン・スワット』が、どのような

---

[37] 目連尊者の地獄遍歴に言及する文献として、Brereton［1995: 124］は、*Mokkala Pai Du Narok*（目連尊者が地獄を見に行く）、*Mokkala Long Lok*（目連尊者が世界に下る）という目連尊者の地獄遍歴を主題としたラオ語や北タイ語で書かれたテキストがあるが、タイ語やその他の西洋諸語に翻訳されていない、と述べている。これらの文献の内容がいかなるものであるのかは未確認であるが、本章で言及した『目連尊者の物語』と何らかの関連がある可能性は高く、今後研究を進めて行かなければならない。

[38] ソン・シマトラン［1989: 61-64］

文献に影響され、成立してきたのかについては、パーリ律やタイ語仏典『三界経』の影響が指摘されているが[39]、扇情的な地獄の描写がどのように加筆されてきたのかは、未だ明確な見解は提示されていない。また、「弥勒の物語」から『マーレッヤデーヴァ長老物語』への展開において加筆されたと考えられる『ヴェッサンタラ・ジャータカ』の朗詠を聴聞すれば、弥勒仏に会うことができるという重要な物語の要素については、『ヴェッサンタラ・ジャータカ』の朗詠の前に「プラ・マーライ」を読誦する習慣のある北タイや東北タイなどに伝わる「プラ・マーライ」文献を含めて再考しなければならない。

『マーレッヤデーヴァ長老物語註』・『プラ・マーライ・カム・ルアン』・『プラ・マーライ・クロン・スワット』では、マーライ尊者は目連尊者のようである、と説いているが、この目連尊者のモチーフは、パーリ三蔵や、梵文仏典には言及されておらず、漢訳仏典などの「目連救母伝説」においても目連尊者の威力により地獄が破壊されたという物語は存在しなかった。本論文で新たに提示したパーリ語蔵外仏典『目連尊者の物語』により、目連尊者が地獄を訪れ、彼の威力により地獄に転変をもたらし、地獄の衆生の伝言を人間界に伝え、地獄の衆生を地獄から救済するという説話が、タイに伝承されていることが明らかとなった。

Anuman Rachathon は、「プラ・マーライ」文献の一つである『プラ・マーライ・カム・ルアン』の序文において、マーライ尊者が地獄の衆生を救済する点で地蔵菩薩と類似した特徴を有していることや、弥勒菩薩に言及する物語であることから、「プラ・マーライ」は大乗的な物語である[40]、と指摘している。また、『タイ日大辞典』では、“พระมาลัย（マーライ尊者）”を「地蔵菩薩」、“มาลัยสูตรคำหลวง（malai sut kham luang、『プラ・マーライ・カム・ルアン』）”を『地蔵菩薩経』とし[41]、さらに、“กษิติครรภ（地蔵菩薩）”の項では、華僑は“ตี๋จังพู่สะ (ticang phusa)”、タイ人は“พระมาลัย (phra malai)”と呼ぶ[42]、としている。本章前半でみたように、マーライ尊者は、*Sīh* 所収「弥勒の物語」で天界へ行き、天人と問答をするマーレッヤという名の長老から展開したのである。また、本章後半でみたように、マーライ尊者は、目連尊者のように地獄の衆生を救済したと説かれている。マーライ尊者は、目連尊者に喩えられているのであって、地蔵菩薩であるとも、地蔵菩薩のようであるとも、説かれていないのである。従って、マーライ尊者が地蔵菩薩である、というのは、誤った見解である。大乗仏教では、釈尊の没後から弥勒仏が現れるまでの間の衆生の救済者として地蔵菩薩という存在を求め、一方、南方上座部仏教では、釈尊の時代に衆生を救済した目連尊者のような地獄からの救済者としてマーライ尊者を求めており、双方とも地獄からの救済者を欲したことになるのである。

---

[39] Brereton［1995: 117-125］
[40] *PM-KhL*, pp. IV-V.
[41] 冨田［1997: 1157］
[42] 冨田［1997: 127］

第 4 章
『マーレッヤデーヴァ長老物語註』について

Māleyyadevattheravatthudīpanīṭīkā（以下、訳号：『マーレッヤデーヴァ長老物語註』とする）は、*Māleyyadevattheravatthu*（以下、訳号：『マーレッヤデーヴァ長老物語』とする）の注釈書である。『マーレッヤデーヴァ長老物語』は、第 3 章に言及するように既に先行研究があり、ローマ字校訂テキスト及び英訳が出版されている[1]。一方、その注釈である『マーレッヤデーヴァ長老物語註』は、Brereton［1995: 18-19］によれば、先行研究はなく、Mi Chuthong［1973］によるタイ語訳がある、とされている。Brereton［1995: 18-19］の言及の後、タイの僧院大学マハーチュラロンコン大学にタイ文字校訂テキストとタイ語訳を収めた修士論文 Phannava［2006］が提出された。本論文では、初のローマ字校訂テキストと和訳を提示している[2]。

『マーレッヤデーヴァ長老物語註』は、蔵外仏典『マーレッヤデーヴァ長老物語』の注釈書であるが、これまでにこのような東南アジア撰述の蔵外の説話の注釈書研究は全くなされておらず、蔵外仏典の注釈書がどのようなものであるのかすら知られていない。本章では、東南アジア撰述の蔵外仏典の注釈書『マーレッヤデーヴァ長老物語註』の著者が、どのような語句を注釈すべき重要語句であると捉えていたのか、どのような知識に基づき注釈しているのかを考察する。さらに、典拠に挙げられた仏典名や著者名から『マーレッヤデーヴァ長老物語』の成立年代を再考する。

1.『マーレッヤデーヴァ長老物語註』における注釈

『マーレッヤデーヴァ長老物語註』では、語句の言い換えによる語義説明や文法の説明に留まらず、三蔵の注釈文献などを引用して注釈している語句がある。以下に、同様の言及が認められ、典拠と考えられる仏典が明らかとなったものについて、どのような語句に対して、どのような典拠を用いて注釈しているのか、以下に挙げる。“tena vuttaṃ（だから言われたのである）”や“tathā hi vuttaṃ（同様に言われたのである）”という句に続いて言及されるため、何らかの典拠があることを示しているが、既刊テキストに同様の語句を求めることができず、典拠不明の引用も残る。これら典拠を特定できなかった注釈、及び、文法説明を除き以下に挙げる。なお、テキスト・翻訳篇『マーレッヤデーヴァ長老物語・マーレッヤデーヴァ長老物語註』に従い、セクション番号と見出しを付す。注釈の詳細は本論文第 2 部テキスト・翻訳篇 pp. 118-315 を参照されたい。

---

[1] Collins［1993］.
[2] 本論文の校訂テキストでは、Phannava［2006］と同様の写本を用いているが、底本や転写方針、校訂方針は異なる。

①【帰依文】

『マーレッヤデーヴァ長老物語』の冒頭の三帰依について、*Dhammasaṅgaṇī* の副註 *Dhammasaṅgaṇīmūlaṭīkā*（略号：*As-mṭ*）と Buddhaghosa による *Dhammasaṅgaṇī* の注釈書 *Atthasālinī*（略号：*As*）とを引用し、三宝に帰依する目的を論じている。さらに仏・法・僧という三宝がいかなるものであるのかを説明し、「善逝（sugata）」の語義解釈については、Buddhaghosa による *Visuddhimagga*（略号：*Vism*）と *Vinaya* の注釈書 *Samantapāsādikā*（略号：*Sp*）から一部を引用し、その詳細は *Vism* と *Sp* に譲っている。『マーレッヤデーヴァ長老物語』の冒頭の帰依文を注釈することで、『マーレッヤデーヴァ長老物語』を著した目的について解説している。

②【長老による天界と地獄の遍歴】

「ターンバパンニ島に（Tāmbapaṇṇidīpe）」や「マーレッヤデーヴァ長老が（Māleyyadevatthero）」という固有名の解説をしており、*Saddavuttivaṇṇanā* を引用して「長老が（Thero）」という語の解釈を示している。

「地獄の者たちのために伝言を持って行き（nārakānaṃ pavuttim āharitvā）」について、*Mahāmoggallānattheravatthu*（略号：*Mogg-vth*）に類する言及を示し、マーレッヤデーヴァ長老は目連尊者のような資助者であると注釈している。また、*Milindapañhā*（略号：*Mil*）を引用し、4 種の餓鬼のうち、他人の施しによって生きる餓鬼のみが果を得ることができ、さらに *Petavatthu-aṭṭhakathā*（略号：*Pv-a*）に引用される *Aṅguttara Nikāya*（略号：*AN*）の記述を引用し、地獄・畜生・人間・神々にとって布施は役に立たず、餓鬼のみに布施が役立つという教えを示し、地獄の衆生には布施の果報を転送することはできないと注釈している。

③【貧者による青蓮華の布施】

「劣ったものであれ、優れたものであれ（lūkhaṃ paṇītaṃ vā）」について、*Dīgha Nikāya*（略号：*DN*）の第 5 経 “kūṭadantasutta” に対する Buddhaghosa による注釈書 *Sumaṅgalavilāsinī*（略号：*Sv*）とその副註 *Līnatthavaṇṇanā*（略号：*Sv-ṭ*）の解説を引用し、布施には奴隷・友・主の 3 種があるとし、*Paṭṭhāna-aṭṭhakathā*（略号：*Paṭṭh-a*）を引用し、「deti（与える）」という語の解釈を示している。

④【長老のチューラーマニ・チェーティヤへの到来】

「神通力の基礎（abhiññāpādakaṃ）」について、Anuruddha による *Abhidhamma* の綱要書 *Abhidhammatthasaṅgaha*（略号：*Abhidh-s*）を引用し、5 種の神通力を示し、Sāriputta による *Sp* の副註 *Sāratthadīpanī*（略号：*Sp-ṭ*）を引用し、神通力とは何かを示している。

「第四禅に（catutthajjhānaṃ）」について、*Sp* を引用し、禅定とは何か、禅定の種類、第四禅について解説し、*Visuddhimaggagaṇṭhī* を引用し、第四禅に入る段階を示している。

⑥⑦⑧【1 ~ 3 人目の天人の到来】

Majjhima Nikāya（略号：*MN*）の “Dakkhiṇāvibhaṅgasutta” とその注釈書 *Papañcasūdanī*（略号：

Ps）により、布施をする対象によって得られる果報が異なるということを示している。

⑫⑬【7・8 人目の天人の到来】

「アバヤドゥッタの弟（Abhayaduṭṭhassa bhātā）」・「アバヤドゥッタ（Abhayaduṭṭho）」について、*Mahāvaṃsa*（略号：*Mhv*）の言及を受けて、各々弥勒の第二の声聞、第一の声聞であると述べている。

㉓【帝釈天と長老の対話】

「十波羅蜜（dasapāramī）」などの語句について Dhammapāla による *Cariyāpiṭaka*（略号：*Cp*）の注釈書 *Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā*（略号：*Cp-a*）の言及を受けて、波羅蜜の語義解釈、十波羅蜜や三十波羅蜜について注釈している。

「最上の一切知仏たちによって（seṭṭhasabbaññūbuddhehi）」について、*Sv* や *Dhammapada-aṭṭhakathā*（略号：*Dhp-a*）の言及を提示し、解説している。

「正覚（sambodhi）」について、*Dasabodhisatta-uddesa*（略号：*Dasab*）を示し、弥勒菩薩を含めた十菩薩が正覚を得ると説いている。

㉔【弥勒菩薩と長老の対話（弥勒の福徳）】

「『マハーヴェッサンタラ・ジャータカ』を一日で完全に聞きなさい（Mahāvessantarajātakaṃ ekadivase yeva parinitṭhitaṃ suṇantu）」という句について、なぜ『ヴェッサンタラ・ジャータカ』であるのか、さらに、*Suttanipāta*（略号：*Sn*）・その注釈書 *Paramatthajotikā I*（略号：*Pj I*）・Mahāyasa による文法書 *Kaccāyanasāra* を引用し、なぜ一日でと限定したのかを注釈している。

「菩提樹の切断（bodhisattassa chedakan）」について、*AN* の Buddhaghosa による注釈書 *Manorathapurānī*（略号：*Mp*）を示し、菩提樹の取り扱いの是非について解説している。

12 世紀の Kassapa の作とされる *Anāgatavaṃsa*（略号：*Anāg*）を引用し、どのような悪業をなせば弥勒に見えることができず、どのような善業をなせば弥勒に見えることができるのかを説いている。

㉕【弥勒菩薩と長老の対話（弥勒の下生）】

「刀中劫（satthantarakappo）」について *Sv* の注釈を提示し、3 種の中劫のうちの刀中劫であると注釈している。

「サカタ（sakaṭa）」について、*Vinayālaṅkāraṭikāpālimuttakavinayavinicchayasaṅgaha*（略号：*Pālim-nṭ*）を引用し、度量衡の説明をし、さらに、*Anāg* を引用し、未来に実る米について注釈している。

「時・地方・島・家柄・母と言われる 5 つの考察をして（kāladesadīpakulamātāyusaṃkhātāni pañcavilokanāni viloketvā）」について、*Dhp-a* や *Anāg* の Upatissa による注釈書 *Amatarasadhārā*（略号：*Anāg-a*）を示し、5 つの観察をそれぞれ説明している。

「輪廻の方に迷い込んだ者たち（saṃsāradisasamuḷhe）」について、六方で昏迷した者たちと注釈し、その六方について *DN* の言及を示し、注釈している。

Jātaka-aṭṭhakathā（略号：*Ja*）の第 530 話 “Saṃkiccajātaka” を引用し、どのような悪業をなすことによって「黒縄地獄に（kāḷasutte）」堕ちるのか、八大地獄の四門にそれぞれ 4 つの小地獄があり、全部で 128 小地獄 となると注釈している。

㉖【弥勒の兜率天への帰還】

「満月時における月のように（puṇṇamāyaṃ yathā cando）」について、*Sv* の月の満ち欠けの注釈を示し、布薩日について解説している。

「ライオンが（sīho）」について、*Saṃyutta Nikāya*（略号：*SN*）の Buddhaghosa による注釈書 *Sāratthappakāsinī*（略号：*Spk*）や *SN* の記述を示し、4 種のライオンのうち鬣ライオンが意味されているとしている。

「ガルダが（garuddho）」について、*Sv* や *Apadāna* の言及を示し、ガルダの大きさや特徴について注釈している。

「山の中で（nagamajjhe）」について、*Pj I* を引用し、7 つの山々があると注釈している。

㉗【長老の閻浮提への帰還】

Vism や Dhammapāla によるその副註 *Paramatthamañjūsā*（略号：*Vism-mhṭ*）から一部を引用し、無限遍浄戒についてその概要を示している。

㉘【青蓮華を布施した貧者の再生】

「五支の楽器を響かせて（pañcaṅgikasaṃghuṭṭhe）」について *Ps* などの注釈書の言及に基づき注釈している。

以上の如く、三蔵や Buddhaghosa・Dhammapāla による注釈書だけでなく、*Anāg* などの蔵外仏典も典拠となっていることがわかる。三宝への帰依・地獄・布施・禅定などに注釈を加えており、『マーレッヤデーヴァ長老物語』の物語をよりわかりやすくするための注釈書というよりも、むしろ『マーレッヤデーヴァ長老物語』に現れる仏教用語について、自らの言葉で注釈するのではなく、Buddhaghosa らによる著作を引用し、注釈者の知識によって彩られたものである。『マーレッヤデーヴァ長老物語註』がなければ『マーレッヤデーヴァ長老物語』の内容が理解困難であるというものではなく、『マーレッヤデーヴァ長老物語』から切り離し得る注釈書である。

2.『マーレッヤデーヴァ長老物語註』の成立年代

2.1.先行研究

『マーレッヤデーヴァ長老物語註』は、『マーレッヤデーヴァ長老物語』と同様に 2 部からなる著作であり、第 1 部の最後に「『マーラッヤ物語註』第 1 部が、Tilokatilaka-anantabuddhasirisaddhammakittimānandapañña という名の長老によって作り終えられた」と記され、第 2 部の最後に「『マーラッヤ物語註』第 2 部は、教えの中に確立するために Buddhavilāsāvhaya によって 3 年かけて書き終えられた」と記されている。これについて、Phannava［2006: 13-27］は、Tilokatilaka-anantabuddhasirisaddhammakittimānandapañña という著者は Dhammakittimahāsāmī で、第 1 部の成立年代を西暦 1389 ~ 1405 年とし、第 2 部の書写者は Dhammakittimahāsāmī の弟子 Buddhavilāsāvhaya であるとしている。 さらに、第 1 部が Dhammakittimahāsāmī によって “katā（作られた）” のであり、第 2 部は Buddhavilāsāvhaya によって “likkhitā（書かれた）” とし、第 2 部は、Dhammakittimahāsāmī が Buddhavilāsāvhaya に刻ませたという見解を導いている。

2.2.『マーレッヤデーヴァ長老物語註』に引用される仏典名及び著者名

注釈書に引用される語句だけでは、典拠を特定することが困難な場合もあるが、仏典名や著者名を伴って言及される場合は、その典拠を特定することが可能である。『マーレッヤデーヴァ長老物語註』の著者が明らかにその仏典を知っており、その言及を用いて注釈したと言える。すなわち、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』よりも前に典拠となる仏典が成立していなければならない。以下に、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』に言及される仏典名、著者名を挙げ、その仏典について Hinüber［1996］・橘堂［1997］・Skilling & Santipakdeekham［2002］に基づき簡単に解説する。

・*Visuddhimagga*：4・5 世紀の Buddhaghosa による著作。

・*Samantapāsādikā*：*Vinaya* の Buddhaghosa による注釈書。

・*Saddavuttivaṇṇanā*: Saddhammaguru（Saddhammapāla の説もあり）の 17 世紀前半の著 *Saddavutti* の注釈書である。*Saddavutti-purāṇa-ṭīkā*、あるいは、*Ṭīkā-saddavutti-vitthāra* の名で知られ、ビルマのパガンの Sāriputta 長老の著書である[3]。

・“Tirokuṭapetavatthuvaṇṇanā”：*Pv* の Dhammapāla による注釈書 *Pv-a* の第 1 章第 5 話。

・*Bālāvatāra*：簡潔な文法の入門書。スリランカでは一般的であるが、ビルマやタイでは一般的ではない。14 世紀の Mahāsāmī Dhammakitti I あるいは II の作とされるが、著者、年代は不詳である。

---

[3] 橘堂［1997: 265］によると、*Saddavutti* には、*abhinava-ṭīkā*（マンダレーの DakkhinārāmādhipatiMahāthera 著、1858 年）や Jāgarācariya による注釈書もある。

・“Kūṭadanta”：*DN* の第 5 経 “kūṭadantasutta” 。

・*Paṭṭhānaṭṭhakathā*：アビダルマ七論の一つ *Paṭṭhāna* の Buddhaghosa による注釈書。

・Anuruddha：Abhidhamma の要綱 *Abhidhammasaṅgaha* の著者。10 世紀・11 世紀頃の人とされる。

・*Sāratthadīpanī*：*Vinaya* の注釈書 *Samantapāsādikā* の Sāriputta による副註。

・*Visuddhimaggagaṇṭhī*：*Vism* の Chapaṭa による副註。

・“Dakkhiṇāvibhaṅgasuttaṭṭhakathā”：*MN* の第 142 経 “Dakkhiṇāvibhaṅgasutta”の注釈。

・“Himavantaṭṭhakathā”：*Ja* の第 547 話 *Vessantarajātaka* の一節の名称と思われる。

・*Dhammapada* “upāsakadhammasavanatthu”：*Dhp-a* の第 18 章第 9 節 “pañcaupāsakavatthu”。

・*Suttanipāta* “kasibhāraddhājasutta”：*Sn* の第 4 経 “Kasibhāradvājasutta”。

・*Kaccāyanasāra*：Mahāyasa による 14 世紀の作、6 章 71 偈からなる Kaccāyana 文法の要点を解説したものである。

・*Anāgatavaṃsa*：南インド Coḷa 出身の Kassapa（12 世紀）の作とされる。

・*Vinayaṭīkā*：17 世紀のビルマのラタナプラの Tipiṭakālaṅkāra 長老による *Pālimuttakavinayavinicchayasaṅgaha* の注釈書 *Vinayālaṅkāraṭikāpālimuttakavinaya-vinicchayasaṅgaha*。

・*Saṃkiccapaṇḍitajātaka*: *Ja* の第 530 話 *Saṃkiccajātaka*。

以上のように、これまでの研究により文献の成立年代や著者の年代が明らかとなっているものから『マーレッヤデーヴァ長老物語註』の成立年代を探ると、*Saddavutti*（17 世紀前半）の注釈書 *Saddavuttivaṇṇanā* と *Vinayālaṅkāraṭikāpālimuttakavinayavinicchayasaṅgaha*（17 世紀）という 2 つの文献が引用されていることから、17 世紀以降に成立したと考えられる。さらに、Phannava［2006: 27］は、第 1 部は Tilokatilaka-anantabuddhasirisaddhammakittimānandapañña によって作られ、第 2 部は Dhammakittimahāsāmī の弟子である Buddhavilāsāvhaya によって刻まれたとしているが、第 1 部の著者と第 2 部の筆写者が師弟関係にあったかどうかは、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』に何ら言及されておらず、不確かな結論であり、Tilokatilaka-anantabuddhasirisaddhammakittimānandapañña と Buddhavilāsāvhaya とが同一人物である可能性もある。また、Phannava［2006: 27］は、第 1 部は Tilokatilaka-anantabuddhasirisaddhammakittimānandapañña によって作られた（katā）であり、第 2 部は Buddhavilāsāvhaya によって刻まれた（likkhitā）とし、“katā（作られた）” と “likkhitā（書かれた）” という語を使い分けているという見解を示しているが、現段階では断定はできない。他の蔵外仏典の注釈文献において、これらが異なる意味で用いられているのかを検討しなければならない。

3.小結

『マーレッヤデーヴァ長老物語註』は、『マーレッヤデーヴァ長老物語』の物語の一部となるものではなく、『マーレッヤデーヴァ長老物語』に現れる重要な用語を三蔵の注釈書などから引用し解説するものであり、17 世紀以降に成立したと考えられる。三蔵から蔵外仏典に至るまで様々な引用を用いて注釈していることから、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』が豊かな知識に基づき著作されたことを表している。蔵外仏典の注釈研究はこれまで全くなされていないが、蔵外仏典の注釈文献は、注釈文献の成立時に注釈者がどのような知識を持っていたのかを示す非常に興味深い研究対象である。『マーレッヤデーヴァ長老物語註』において何らかの典拠に基づき言及されているが、その典拠を明らかにできていないものもあり、これらは、既刊の三蔵やその注釈文献などの古典的な仏典ではなく、蔵外仏典を典拠としていると考えられるため、蔵外仏典全体の研究が進展すれば、成立年代をさらに限定し、注釈者の知識が何に基づくものであるのかを明らかにできる。

第 5 章
『スピナクマーラ前世物語』―出家による救済―

タイ国立図書館所蔵 *Supinakumārajātaka*（以下、訳号：『スピナクマーラ前世物語』、略号、*Sk-j*）は、未刊テキストであり、そのタイトルから前世物語と推測されるが、その内容は未だ明らかにされていない。本章では、『スピナクマーラ前世物語』を概観し、類似するタイトルで知られる他の仏典との関連を探る。

1.『スピナクマーラ前世物語』[1]

タイ国立図書館所蔵写本に記されたタイトルは、*Supinnakumārajāṭaka* であり、『目連尊者の物語』（*Mahāmoggallānattheravatthu*）と一緒に綴じられていたが、明らかに両話の筆跡は異なる[2]。また、『スピナクマーラ前世物語』も前半の 2 葉（ka, a – kā, b）と後半の 3 葉（4, a – 6, b）で筆跡が異なり、フォリオ番号も連続していない。書写者は代わっているが、物語は連続しているため、語句の重複や欠落はないと思われる[3]。タイ国立図書館の目録（The Vajirañāṇa Library［1921］）にはリストアップされていないが、Skilling & Santi Pakdeekham［2004: 55］によれば、*Banchi ruang nangsu nai ho phra samut watchirayan*, phak thi 1, phanaek bali, ph. s. 2459 (*Catalogue of Books in the Vajirañāṇa Library*, Part 1, Pāli Section, 1916)には、Supinakumārajātaka というタイトルがリストアップされている[4]。

1.1.『スピナクマーラ前世物語』の梗概

①【母の夢と年長者の予言】

サーヴァッティーから遠く離れた猟師の村の猟師長の息子スピナクマーラがいた。スピナクマーラの母は結生を得た時、薪を取りに森に入って道に迷い、そこに偉大な苦行者が現れ、彼女に摩尼宝珠を与えるという夢をみた。目を覚まし、年長者から、最上の息子を得るという予言を得た。

---

[1] テキスト及び翻訳は、本論文第 2 部テキスト・翻訳篇 pp. 323-338 を参照されたい。

[2] 『目連尊者の物語』では、“mahāmoggallāṇatheravatthunitthitaṃ”と物語の最後に記されているが、本文中では、“mahiddhika mahānubhāva”や“thera”と記されるだけで“moggallāna（目連）”という名は明記されない。

[3] タイ国立図書館の請求番号 1582/ca/1、タイトルโมคฺคลฺลานสุตฺต（moggallānasutta）。

[4] 筆者未見のため、ここに挙げられる *Supinakumārajātaka* が、『スピナクマーラ前世物語』と同様の物語であるかは明らかではない。『スピナクマーラ前世物語』は、タイ国立図書館で先述した『目連尊者の物語』を請求した際に、偶然読む機会を得た写本である。そのため、*Supinakumārajātaka* というタイトルからタイ国立図書館で資料収集をしておらず、目録カードを未確認である。

②【スピナクマーラの誕生から出家】

母は金色の男子を出産し、父はスピナクマーラと名付けた。スピナクマーラが 7 歳の時父は病によって死んだ。父は生前、福徳を為さなず、スピナクマーラは、父の死後、精舎へ行き、16 歳まで比丘僧伽に仕え、ある日、和尚に出家を願い出た。和尚は、両親の許しを得なければ出家を認めないと告げ、スピナクマーラは母に出家の承諾を得るために帰省した。母は息子の出家を一度は拒んだが、息子をとめることができず、出家を許した。精舎に戻ったスピナクマーラは、母の許しを得たことを告げ、沙弥として出家した。

③【母の堕地獄】

夜魔王は、従者に、閻浮提に福徳をなさない者がいれば地獄へ投下するよう命じた。2 人の夜魔の守護者が、森で眠っているスピナクマーラの母を見つけ、地獄へ連れて行った。母は遠くから見える地獄の火を見て、息子の袈裟の色と同じだと告げ、嘆き悲しんだ。すると、地獄に黄金の蓮が現れ、冷たくなり、2 人の夜魔の守護者は、奇妙な出来事を見て、母を連れて、夜魔王の所へ戻った。夜魔王は、息子が出家したことを知り、母は地獄から脱した。

④【スピナクマーラと母の対話】

母は息子の許へ行き、地獄から脱したことを告げると、スピナクマーラは、戒の偉大さを語った。そしてスピナクマーラは具足戒を得て修習した。

⑤【母父の救済】

母は死後三十三天に再生した。一方、悪業により餓鬼に再生していた父は、長老となったスピナクマーラの許を訪れた。長老が餓鬼の正体を尋ねると、その餓鬼は父親であったことを明かした。長老が、餓鬼のために布施をすると、その餓鬼は天人に再生した。その天人は、スピナクマーラの許にやって来て、戒の威力により天界に再生したことを告げた。

1.2.『スピナクマーラ前世物語』の主題

『スピナクマーラ前世物語』は、-jātaka（前世物語）とタイトルに付されているにもかかわらず、第 1 偈を物語の冒頭に据えるというジャータカ形式をとっておらず、物語の終わりにも、現世と前世との連結がなく、スピナクマーラが誰の前世として語られているのかが判らない。前世物語というよりもむしろ、猟師として殺生をなし悪業を積んだ両親を出家したことにより悪趣から救済する、出家の功徳を説く物語であると言える。

2．類似するタイトルの仏典

ここからは *Supinakumārajātaka* というタイトルと類似するタイトルの 3 話の物語に言及し、『スピナクマーラ前世物語』との関連の有無を確認する。

2.1．『夢による予言前世物語』

類似するタイトルの物語として、パーリ三蔵に含まれる 547 話のジャータカの第 77 話『夢による前世物語』（*Mahāsupinajātaka*）がある[5]。以下にその梗概を挙げる。

コーサラ国王が眠りについて、明け方に 16 の夢を見て、恐怖から目を覚ました。王がバラモンに尋ねると、バラモンは、王国の障碍・生命の障碍・富の障碍のいずれかが起こる悪い夢であると答え、王はその対策を尋ねた。バラモンたちはあらゆる四辻で犠牲祭を行うよう告げ、王はその言葉通り生け贄のために生類を集めた。王妃は王に最上のバラモンである釈尊にも夢の対策を尋ねるよう勧めた。

王は釈尊の許を訪れ、王に夢を語った。まず、第一の夢は、4 頭の牡牛が四方から王庭にやってきて、人々はそれを観ようと集まり、戦いの様相を示し、吼えたりしたが、結局戦わずに立ち去った、と告げた。これに対し釈尊は、この夢の結果は、現在には起こらず、雨が正しく降らず飢饉となった未来に起こるだろう、いまにも雨が降るかのように雷が鳴り出し、雷鳴がひらめいたのに、牡牛が戦いをやめたように、雨が降ることなく雲が散ってしまう。バラモンたちは自らの生活の為にあのような対策を告げたのである、と語った。

そして、王が、樹の夢、牝牛の夢、仔牛の夢、馬の夢、牝ジャッカルの夢、水瓶の夢、蓮華の夢、生米の夢、栴檀の夢、ひょうたんの夢、岩石の夢、カエルの夢、カラスの夢、ヤギの夢について語ると、その結果を釈尊が答え、前世物語を語り始めた。

昔、ブラフマダッタ王が同様の夢をみて、バラモンの助言により犠牲祭をなした。自らの利益のために王に犠牲祭をするよう勧めたバラモンと絶縁したバラモンの若い弟子が、王の庭園に至り、苦行者（ボーディサッタ）に近づき、王がバラモンに唆されているため、生き物が怖れていることを告げた。ボーディサッタは、王を連れてきてくれれば夢の結果を説明しよう、と告げ、若いバラモンは王を連れて庭園へ来て、王が夢を語ると、ボーディサッタは夢の結果を説明し、バラモンと一緒になって犠牲祭をしてはならないと説いた。

---

[5] *Ja*, vol. 2, pp. 334-345. 中村［1987: 24-36］参照。

2.2.「パンニャーサ・ジャータカ」集所収『スピナ前世物語』

東南アジアにのみ伝わる蔵外のジャータカの集成として「パンニャーサ・ジャータカ」集がある[6]。その中でもタイ国立図書館写本に基づきタイ語訳されたタイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集の「後分」の第 7 話に『スピナ前世物語』（*Supinajātaka*）という物語が収められている[7]。ビルマに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集などには収められていない物語である。この物語の校訂テキストは出版されていないため、マハーチュラロンコン大学に提出された修士論文 Chalao Techawanto Tathongduang［2008: 171-213］に基づき、以下に梗概を示す。

コーサンビカという名の長者と妻スマナーの間に、男子が生まれたが、彼らはその男子を僧園近くの墓地に捨てた。その僧園に住むサーミカという名の長老が徳をそなえた象の夢をみた後、墓地で男子を見つけ僧坊へ連れて帰った。コーサンビーのパランタタ王とケーサマーリー妃は、子供に恵まれなかったため、長老がパランタタ王に捨てられていた男子のことを語ると、王はその子を「スピナクマーラ」と名付け育てた。スピナクマーラは 16 歳になると受戒し、スピナカという比丘となった。出家から 6 年後スピナカは閻浮提唯一の王となる夢を見て、その夢を父王に語った。パランタタ王は自らの地位を揺るがす存在となることを怖れ、スピナカを投獄した。

川遊びに行ったパランタタ王は、美しい華鬘を見つけその持ち主を探させたが、見つからず、白猿王がパドゥマケーサラーという都のマッラ王の娘パドゥマヴァティー王女が美しい娘であると助言すると、王はその娘を得たいと思い、パドゥマケーサラーに使いを送ったが、戦となり、王の家臣たちは逃げ帰ってきてしまった。王妃は王にスピナに命じて女宝を得るよう提案し、王はスピナに女宝を連れて来させ、その後スピナを殺そうと考えた。解放されたスピナは、長老のもとを訪れ、長老は白猿が女宝を得る方法を授け、その通りになせば、唯一王となるだろう、と言ってスピナを送り出した。

スピナはマガダ国へ至り、白猿王に会い、白猿王の助言に従って、娘が現れるのを待ち構えていた。パドゥマヴァティー王女はそこへやって来て、スピナと対面し、二人は惹かれ合った。スピナは、パドゥマヴァティーを連れて船に乗ったが、船から落ちた宝を探している間に、パドゥマヴァティーを乗せた船はコーサンビーに向けて出発した。置き去りにされたスピナは白猿王に相談した。白猿王はウドゥンバラ島へ行ってマニを得て、水面を歩いて、種々の都を経由してコーサンビーへ帰るよう助言した。

スピナは言われた通りにウドゥンバラ島でマニを得て、ダンダカラへ行き天の杖を得て、クンビガハへ行き天の瓶を得て、ベーリタラへ行き天の太鼓を得て、アシパッタへ行き天の剣を得て、コーサンビーへ帰った。

---

[6] 「パンニャーサ・ジャータカ」集については、本論文研究篇 第 1 章 pp. 11-14 において詳説。
[7] Sinlapabannakhan［2006 (2): 385-427］.

一方、パドゥマヴァティーを乗せた船もコーサンビーへ到着し、パドゥマヴァティーを見て王は喜び、宮殿に住まわせた。スピナが帰国していることを知った大臣たちは、王に謁見するよう命じたがスピナは応じなかった。怒った王が軍を送ったが、天の杖によって軍は倒れ、天の太鼓によってスピナは輝く宮殿を得た。そしてパランタタ王が自ら出陣したが、天の杖で軍が倒れるのを目の当たりにし、恐怖から屈服した。そして、スピナは天の瓶によって倒れた軍隊を生き返らせ、パドゥマヴァティーをスピナの宮殿へ連れて来させた。

コーマ国のパドゥマヴァティーの家では、王女がいなくなったと大騒ぎになっていた。コーサンビーを訪れた商人がスピナ王のもとにパドゥマヴァティーがいることを知り、マッラ王に伝えた。マッラ王は怒って戦をしようとしたが、スピナの偉大さを知り、家系を絶やさないためにパドゥマヴァティーの息子を送ってほしいという手紙を送った。懐妊したパドゥマヴァティーはコーマ国で出産するため、スピナと一緒にコーマ国へ向かった。コーマ国で 2 人の息子が誕生し、成長した長男にコーマ国を継がせ、スピナとパドゥマヴァティーは次男クンジャラ王子を連れてコーサンビーへ帰った。そして、16 歳になったクンジャラ王子は女宝を探す旅に出た。

ヒマラヤに住むある苦行者が、怪我をした象を介抱し、キンナリーの卵から産まれた女児を育てていた。その娘の華鬘を見つけたクンジャラ王子は、苦行者の庵にたどり着き、その娘と対面し、ふたりは惹かれ合い、苦行者に別れを告げ、象に乗ってコーサンビーへ向かった。コーサンビーへ帰って、婚礼をなし、スピナ王は王位を譲った。スピナ王とクンジャラ王子は死後天界に再生した。

2.3. 『サーマネーン・スピンの物語』

バンコクの東、約 70 キロメートルの地点にバーン・ナイという戸数 59 戸、383 人の小村があり、このバーン・ナイ村で 1964 年 10 月から 12 月にフィールド調査を実施した人類学者が、古老から聞き採録した古謡の中に『サーマネーン・スピンの物語』がある[8]。石井［2002: 99-104］は、この古謡を引用し、タイの民衆の仏教理解のあり方を考察している。『サーマネーン・スピンの物語』を石井［2002: 99-104］から引用する。

ナークよ、よくおきき
三衣をまとうその前に
坊さまとなる心得をば
お前に語って進ぜよう。
これはとうといお経にある話。

[8] Attagara［1967: 91–97, 567-569］.

10 のいましめを守った
人も知る
サーマネーン・スピンの物語。

みほとけの道を説き明かそうと
和尚さまがおっしゃった。
むかしむかし、あるところに
狩人の夫婦が住んでいた。
くる日もまたつぎの日も
夫婦は野山を駆けめぐり
生類の命を奪って
罪業を重ねていた。
功徳を積むことも忘れて。

この世の齢が尽きたとき
男は地獄に堕ちていった。
あとに残った狩人の妻は
ひとりの息子のスピンをば
菩提樹のように
いつくしみ、育んでいた。
やがて物心のつくほどに成人すると
スピンはこう考えた。
わたしの父は狩人。
わたしの母も狩人。
両親には慈悲の心がない。
ただいたずらに生類を殺めては
罪業を重ねている。
寺の和尚さまもおっしゃった。
あの世では
きっと地獄に堕ちようぞ、と。

そこで、あるとき、スピンは
こっそり家をぬけだして

頭を丸めて、サーマネーンとなった。
今日よりさき
決して罪をおかすまいぞ、と
堅く心に誓いを立てて。

地獄の底では
亡者の罪科かきしるした
閻魔帳くる大王の目に
ひとりの女の名がとまった。
さまざまな悪業を犯した
狩人の女。
やがて女はひきだされ
閻魔大王のお調べ受けた。
亡者の身体を焼き焦がす
焦熱地獄の火を見たときに
女の心にふと浮かんだのは
金色に輝く
わが子スピンの袈裟姿。
「申し上げます、大王さま。
このわたくしめにも
わずかばかりの功徳が
まだまだ残っておりまする。
かわいいひとりのせがれめが
三衣をまとっておりまする。
せがれのくらしは
罪に汚れぬ聖者のくらし。
たとえわたくしめが
数々の罪を犯していようとも
血肉をわけたひとりの息子が
みほとけの道を歩んでおりますゆえに
なにとぞお慈悲を
大王さま」

閻魔大王は
女の言葉に
嘘いつわりのないことを確かめると
狩人の妻の罪を許して
この世にもどしてくださった。
悪業の報いは、こうして絶えた。
善根を積むのがよい。
この世と先の世で
きっと善果が得られるように。

サーマネーン・スピンは成人すると
やがて 227 のいましめを守る
ビクとなった。
罪深い父親を
地獄の淵から救いだす日も
やがてやってくる。
これがサーマネーン・スピンの物語。
サーマネーンとなって母を救い
ビクとなって父を救った
息子のうた。

2.4. 『スピナクマーラ前世物語』との関連

以上 3 話の類似するタイトルで知られる物語を見ると、パーリ三蔵に含まれる『夢による予言前世物語』とタイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集所収『スピナ前世物語』という類似するタイトルのパーリ語の両話は『スピナクマーラ前世物語』とは、全く異なる内容であり、関連性は認められないが、タイ語の古謡『サーマネーン・スピンの物語』は、明らかに先述した『スピナクマーラ前世物語』の類似話である。パーリ語の『スピナクマーラ前世物語』が源泉となり、現地語の古謡として語り継がれてきたのか、あるいは、現地語の古謡がパーリ語で書き記されたのか、どちらであるのかは判断できないが、『スピナクマーラ前世物語』と『サーマネーン・スピンの物語』の両話に関連があるのは明らかである。類似するタイトルで知られる『夢による予言前世物語』と『スピナ前世物語』は、釈尊の前世として夢を予言した苦行者やスピナ王の冒険を描いた前世物語であったが、『スピナクマーラ前世物語』は、-jātaka というタイトルが付されているにもかかわらず、誰の前世物語であるのか記されていない。『サーマ

ネーン・スピンの物語』は、英訳と和訳でしか知る事ができず、原語でどのように語られているのか、『サーマネーン・スピンの物語』の「物語」が“ชาดก (jātaka)”であったのか否かは不明である。

3．『スピナクマーラ前世物語』と『目連尊者の物語』

先述したように、この『スピナクマーラ前世物語』は、異なる筆跡であるが、『目連尊者の物語』の前に収められていた。『スピナクマーラ前世物語』と『目連尊者の物語』の双方に、地獄に関する描写があり、さらに、両話が何らかの関連をもって記されたことを示唆する偈文がある。以下にそれらの偈文を挙げる。

Sk-j, p. 329	*Mggth-v*, p. 319
silaṃ ābharaṇaseṭṭhaṃ	dānaṃ sahāyasambhūtaṃ
silaṃ pātheyyam uggamaṃ	dānaṃ sasampatibhājanaṃ
silaṃ apāyasañjannaṃ	dānaṃ daliddahāsanaṃ
sisam mokkhapathavaram	**dāna saṅgassa sopānaṃ**
silaṃ sattassa sopāṇaṃ	dānam mokkhapathavaram
silaṃ buddhānagocaraṃ	dānaṃ appāyasañjanaṃ
	dānaṃ budānaṃ gocaraṃ

『スピナクマーラ前世物語』では戒について、『目連尊者の物語』では布施について説く偈文であるが、類似する表現が用いられており、両話に何らかの関連があることを意味している。戒を守り、布施を施す ānisaṃsa（功徳）を説く一連の物語として創作された可能性がある。あるいは、出家し戒を守ることが地獄から父母を救済する功徳となり、地獄の衆生に指定して布施することも地獄から救済する功徳である、と地獄からの他者救済方法を説く一連の物語である可能性もある。

4. 小結

『スピナクマーラ前世物語』は、パーリ三蔵やタイに伝わる「パンニャーサ・ジャータカ」集中の類似するタイトルの物語とは関連がなく、タイの古謡として報告された『サーマネーンスピンの物語』と関連があり、出家の功徳を説く仏典であることが明らかとなった。また、『スピナクマーラ前世物語』と一緒に収められていた『目連尊者の物語』とは関連する偈文を見出すことができることから、何らかの関連があると言える。

『スピナクマーラ前世物語』は、タイトルは、-jātaka とされているにもかかわらず、誰の前世物語であるのかが明示されていない。仮に、『スピナクマーラ前世物語』が、目連尊者の前世物語であったとしたならば、前世において、スピナクマーラ（目連尊者）が沙弥であることにより地獄から母を救済し、出家者であることにより餓鬼界から父を救済した。さらに、現世において、地獄を訪れ地獄を破壊し、地獄の衆生の伝言を人間界の親族に伝え、布施をさせ、地獄の衆生を救済する、という前世と現世における目連尊者の救済物語となる。このようにスピナクマーラが目連尊者の前世であると考えると、悪趣に堕ちていた母を目連尊者が救済する『仏説盂蘭盆経』などに説かれる「目連救母伝説」が想起される[9]。第 3 章で言及したように中国や日本において多様化し、盂蘭盆会の因縁譚となるものである。目連尊者が地獄から母を救済するというモチーフが上座部仏教にも伝承されていたとすれば、大変興味深いが、本論文で両話の校訂テキストに用いた写本は 1 本のみである。『スピナクマーラ前世物語』と同様の物語が、*-jātaka* とは異なるタイトルで伝わっており、前世物語でない可能性もある。また、『スピナクマーラ前世物語』と『目連尊者の物語』が、他の写本において連続する物語として書写されているのか否かも現段階では不明である。両話の関連については、写本を再調査し、再考しなければならない。

[9] 『仏説盂蘭盆経』の原型をパーリ語仏典に求めた研究がある。藤本［2003: 47-54］は、『アヴァダーナ・シャタカ』中「目連」と『餓鬼救済物語』中「舎利弗母餓鬼事」と『仏説盂蘭盆経』とを比較研究している。餓鬼に再生している女が、4 つ前の生のときサーリプッタの母であり、サーリプッタがその女餓鬼に指定して、比丘僧伽に布施をしたことにより、女餓鬼は随喜し天界に再生したという物語である『餓鬼救済物語』中「舎利弗母餓鬼事」が、『仏説盂蘭盆経』の原型であるとの結論を導いている。

結論

タイには膨大な量の蔵外仏典写本が伝えられているが、その多くは写本のままであり、校訂テキストとして入手できるものは一握りに過ぎない。校訂テキスト化されて、初めて共有できる研究対象となり得るが、蔵外仏典研究の現状は、研究の拠り所となる校訂テキストがなく、研究に着手することが困難な状況にある。写本をテキスト化し、研究の拠り所を広げ、より多くの研究者と共有していくことが蔵外仏典研究の促進につながる。本論文では、膨大な量の蔵外仏典の一端にすぎないが、タイ国立図書館所蔵の貝葉写本による統一された校訂方針に基づく6話の仏典の校訂テキストを提示した。本研究により、蔵外仏典研究の拠り所を僅かながら広げることができたと考える。タイに伝わるパーリ語蔵外仏典の研究は、「パンニャーサ・ジャータカ」集研究が中心であったため、その他のパーリ語蔵外仏典が、どのような教えを伝えるものであるのかすら知られてこなかった。本論文では、中部タイに伝わる貝葉写本から新たな仏典を読み解き、それらの仏典が説く教えを導き出してきた。特にパーリ三蔵に言及されることのない仏像と地獄救済に関するパーリ語蔵外仏典を研究対象とし、蔵外仏典にだからこそ説かれる興味深いタイ仏教の教えを示してきた。

仏像と地獄救済に関する『ヴァッタングリ王物語』と『マーレッヤデーヴァ長老物語』の2つの蔵外仏典の源泉資料と展開を再考した結果、両話とも源泉資料はスリランカに伝わる蔵外仏典であるという結論に至った。仏像の起源や地獄救済を説くパーリ語蔵外仏典の展開において、漢訳仏典からの影響を考慮すべきかを考察したところ、類似する説話ではあるが、仏像の起源や地獄救済を説く漢訳仏典の影響を直接受けて成立したという証拠は見られなかった。上座部仏教においても、大乗仏教においても、類似する仏像の起源や地獄救済を説く説話が求められたと考えられる。本論文において源泉資料と展開を解明した2つのパーリ語蔵外仏典に限れば、パーリ三蔵を源泉資料にしたのでも、タイの土着の説話を源泉にしたのでもなく、スリランカに伝わる蔵外仏典を源泉資料とし、新たな蔵外仏典として展開し、タイで伝承されてきたと言える。

仏像の起源を説く説話は上座部仏教には伝えられていないとされていたが、Gombrich［1978］らによりスリランカやビルマにも仏像起源伝説が伝承されていると指摘された。本論文では、さらに、仏像起源伝説を説く仏典がタイにも伝承されていることを明示した。諸言語で伝承されている仏教説話の比較研究において、パーリ三蔵に言及されていないために上座部仏教には伝承されていないと結論付けられていた説話が、蔵外仏典の説話として伝承されている可能性があり、これまでの仏教説話研究に蔵外仏典の説話を加え、再考しなければならない。

また、仏像に関する蔵外仏典『目連尊者の問い』では、仏像を造った功徳や供養した功徳は仏像の材料により異なる、という類例のない教えが説かれており、蔵外仏典には、希少な伝承

が残されていることを指摘した。造像と像供養の功徳を比較検討したところ、タイに伝わる仏典にのみ弥勒信仰が見られ、諸「プラ・マーライ」文献でも弥勒菩薩が重要な役割を担い、その源泉資料は、弥勒を主人公とした *Sīh* 所収の「弥勒の物語」であった。本研究により、タイに伝わる蔵外仏典では、パーリ三蔵に説かれる以上に弥勒菩薩が重要な役割を果たしていることが明らかとなり、またその具体的な様相を示すことができた。

さらに、蔵外仏典の注釈文献という先例のない研究対象として『マーレッヤデーヴァ長老物語』の注釈文献『マーレッヤデーヴァ長老物語註』の注釈を分析したが、その結果、蔵外仏典の注釈文献には、文献が成立した時代の学識者の知識が表れており、種々の文献名や著者名が引用されているため、成立年代を探る手がかりを与える貴重な文献であると指摘した。もちろん『マーレッヤデーヴァ長老物語註』だけで蔵外仏典の注釈文献がどのようなものであるのかを一般化することはできないが、類例がないだけに一定の示唆を与えることはできたと考える。『マーレッヤデーヴァ長老物語註』では、パーリ三蔵やその注釈文献だけでなく、蔵外仏典から引用し註釈している。そのため、典拠を明らかにできていない注釈も多く残ったままである。蔵外仏典の成立を明らかにするにはその他の蔵外仏典研究の進展も不可欠であり、今後新たな写本研究に着手していくことが重要な課題となろう。

タイの蔵外仏典の説話は、布施や持戒という仏教の教えを分かり易く民衆に教えるものであり、難解な教義を説く三蔵とは異なり、タイの上座部仏教徒、特に一般民衆の信仰を促す役割を果たしてきたものである。それらは、儀礼で読誦されたり、寺院壁画などに描かれたり、タイの一般民衆にも親しまれているものである。地獄救済において論じた如く、蔵外仏典に表れる教えが、必ずしも正典としてのパーリ三蔵に従ったものではないことも明瞭となった。パーリ三蔵では、布施の際、亡き親類・縁者に施したとしても、餓鬼しかそれを享受することはできないと説く。一方、『マーレッヤデーヴァ長老物語註』などの諸「プラ・マーライ」文献や『目連尊者の物語』では、地獄の衆生が救済されているのである。正典であるパーリ三蔵の教えからすれば、これら蔵外仏典に説かれる教えは誤っていることになる。しかし、現代タイにおいてマーライ尊者は地獄からの救済者として認知されている。タイ民衆の仏教では、三蔵の教えよりも蔵外仏典の教えが受け入れられているのである。パーリ三蔵に忠実な仏教の教えではなくても、それが正しい教えとして伝承されれば、タイ仏教としては誤った仏教ではない。タイ仏教は、在家信者にとっての仏教と出家者にとっての仏教とが異なっているのである。タイでは、出家者にとっての仏教は、確固たるパーリ三蔵の教えに基づくものであるが、在家信者にとっての仏教は、独自に展開してきた蔵外仏典に基づく時代や社会に即した順応性のある仏教なのである。『スピナクマーラ前世物語』において、スピナクマーラの父母は生前の悪業により悪趣に再生した。このように、世俗では、五戒の教えを知りながらも殺生を生業にする者もおり、五戒すら守ることが困難な者もいる。彼らは皆その悪業により地獄へ堕ちてしまう。彼ら

を救済する手段として親族による布施や出家が蔵外仏典に説かれ、タイ仏教は現実に即して変化してきたのである。パーリ三蔵が体現するのは、揺るぎない仏の教えであり、理念上、いつの時代であっても、どこにおいても、変わることのないものと考え得るものであるのに対し、蔵外仏典は、仏教が受容されていく中で、仏の教えと異なる教えが求められ、創造されてきたものである。これまでのタイ仏教の研究は、人類学や社会学が中心であり、タイ民衆にとっての仏教を文献学的研究により究明しようという試みは全くなされてこなかった。仏教学研究者の関心事は、仏説であり、現在信仰されている仏教ではなかったのである。しかしながら、文献学的研究がなされてこなかった蔵外仏典の説話研究が今後さらに進めば、民衆にとっての仏教がいかなるものであったのかが明確となり、寺院壁画に描かれたモチーフや儀礼行為の解明など文献学以外のタイ仏教研究全般への相乗効果も期待できると考える。

仏教学研究において、蔵外仏典は、釈尊の言葉ではないため等閑視されてきたが、本論文により、蔵外仏典は、パーリ三蔵に伝えられることのない現実の社会に応じた民衆にとっての仏教の教えを伝えるものであることが明らかとなった。釈尊の教えとして固定化された静的な仏教ではなく、タイにおいて現在まで信仰され続け、変化し続けてきた動的な仏教の、文献上に表れた一つの姿を明らかにするための研究対象として、蔵外仏典は価値ある資料である。

略号・訳号

Abhidh-s *Abhidhammatthasaṅgaha*: Saddhātissa [1989: 1-51]

AN *Aṅguttaranikāya*: Hardy [1896, 1900]

Anāg *Anāgatavaṃsa*: Minayeff [1886]

Anāg-a *Amatarasadhārā*: The National Library of Thailand [2001: 95-165]

As *Atthasālinī*: Müller [1979]

As-mṭ *Dhammasaṅgaṇīmūlaṭīkā*: Vipassana Research Institute [1998d]

Av-ś *Avadānaśataka*: Speyer [1958]：『アヴァダーナ・シャタカ』

Bālāv *Bālāvatāro*: Phra Khanthasaraphiwong [1998]

Cp-a *Cariyāpiṭaka-aṭṭhakathā*: Barua [1979]

Dasab *Dasabodhisatta-uddesa*: Martini [1936]：『十菩薩説』

Dhp *Dhammapada*: Hinüber & Norman [1994]

Dhp-a *Dhammapada-aṭṭhakathā*: Norman [1970]

DN *Dīghanikāya*: Carpenter [1992], Davids & Carpenter [1995]

DPPN *Dictionary of Pali Proper Name*: Malalasekera [1960]

Ja *Jātaka-aṭṭhakathā*: Fausbøll [1877, 1883, 1887, 1891, 1896]

Mhv *Mahāvaṃsa*: Geiger [1908]

Mil *Milindapañhā*: Trenckner [1962]：『ミリンダ王の問い』

Mil-ṭ *Milindaṭīkā*: Jaini [1961]

MN *Majjhimanikāya*: Chalmers [1994]

Mogg-bps *Moggallānabimbapañhāsutta*: 本論文第 2 部 pp. 89-107：『目連尊者の問い』

Mogg-vth *Mahāmoggallānattheravatthu*: 本論文第 2 部 pp. 316-320：『目連尊者の物語』

Mp *Manorathapūraṇī*: Walleser & Hermann [1967]

Mth-v *Māleyyadevattheravatthu*: Collins [1993: 19-60]：『マーレッヤデーヴァ長老物語』

Mth-v-ṭ *Māleyyadevattheravatthudīpanīṭīkā*: 本論文第 2 部 pp. 118-246：『マーレッヤデーヴァ長老物語註』

Mv *Mahāvastu-avadāna*: Senart [1882]：『マハーヴァストゥ・アヴァダーナ』

Nett *Nettipakaraṇa*: Hardy [1961]

Paṭṭh-a *Pañcappakaraṇa-aṭṭhakathā*: Davids [1988]

Pālim-nṭ *Vinayālaṅkāraṭīkā*: Vipassana Research Institute [1998b]

Pj I *Paramatthajotikā I*: Smith [1978]

Pj II *Paramatthajotikā II*: Smith [1989]

PM-KhL *Phra Malai Kham Luang*: Fine Arts Department [1935]：『プラ・マーライ・カム・ルアン』

PM-KS *Phra Malai Klon Suat*: Saw Thammaphakkadi [1977]：『プラ・マーライ・クロン・スワット』

Ps *Papañcasūdanī*: Woods & Kosambi [1977], Horner [1977]

Pv *Petavatthu*: Jayawickrama [1977]：『餓鬼救済物語』

Pv-a *Petavatthu-aṭṭhakathā*: Hardy [1894]：『餓鬼救済物語註』

Ras *Rasavāhinī*: Gandhi [1989]

Saddhamma-s *Saddhammasaṅgaha*: Saddhānanda [1890: 21-90]

Sah *Sahassavatthuppakaraṇa*: Ver Eecke and Filliozat [2003]

Sīh *Sīhaḷavatthuppakaraṇa*: Ver Eecke [1980: 1-158]

S-Kbv *Kosalabimbavaṇṇanā*: Gombrich [1978: 289-295]：スリランカ版『コーサラ国仏像縁起譚』

Sk-j *Supinakumārajātaka*: 本論文第 2 部 pp. 323-332：『スピナクマーラ前世物語』

Sn *Suttanipāta*: Andersen & Smith [1913]

SN *Saṃyuttanikāya*: Feer [1975]

Sp *Samantapāsādikā*: Takakusu & Nagai [1975]

Spk *Sāratthappakāsinī*: Woodward [1977]

Sp-ṭ *Sāratthadīpanī*: Vipassana Research Institute [1998a]

Sv *Sumaṅgalavilāsinī*: Davids & Carpenter [1968], Stade [1971]

Sv-pṭ *Līnatthappakāsinī I*: Silva [1970]

Th *Theragāthā*: Oldenberg & Pischel [1966]

T-Vrsv *Vaṭṭaṅgulirājasuttavaṇṇanā*: 本論文第 2 部 pp. 28-46：タイ版『ヴァッタングリ王物語』

T-Kbv *Kosalabimbavaṇṇanā*: 本論文第 2 部 pp. 55-76：タイ版『コーサラ国仏像縁起譚』

Vism *Visuddhimagga*: Davids [1975]

Vism-mhṭ *Visuddhimaggamahāṭīkā*: Vipassana Research Institute [1998e]

Vv *Vimānavatthu*: Jayawickrama [1977]：『天宮事経』

Zp-Vrj *Vaṭṭaṅgulirājajātaka*: Jaini [1983: 414-432]：ビルマ版『ヴァッタングリ王物語』

Zp-Vḍj *Vaḍḍhanajātaka*: Jaini [1983: 525-534]：ビルマ版『ヴァッダナ物語』

『大正』 『大正新修大蔵経』：大蔵出版 [1924-32]

『南伝』 『南伝大蔵経』：大蔵出版 [1935-41]

参考文献

外国語文献

Andersen, Dines and Helmer Smith

1913 *The Sutta-Nipāta*, London: The Pali Text Society.

Attagara, Kingkeo

1967 "The Folk Religion of Ban Nai: A Hamlet in Central Thailand", Thesis, Bloomington: Indiana University.

Ba Shin

1960 "Shyaṅ Mālai of the Burmese", *Bulletin of the Burma Historical Comission* 1(2): 147-152.

Barua, D. L.

1979 (1939) *Achariya Dhammapāla's Paramatthadīpanī, Being the Commentary on the Cariyā-piṭaka*, London: The Pali Text Society.

Brereton, Bonnie Pacala

1995 *Thai Tellings of Phra Malai: Texts and Rituals Concerning a Popular Buddhist Saint*, Arizona: Arizona State University.

Buachukan (Phramaha Caran Uttmathammo)

2003 "Pannyasachadok pacchimaphak ruangthi 9-11: kantruatchamra laesuksachoengwikhro", Bangkok: Master's Thesis, Mahachulalongkorn University.

Burlingame, Eugene Watson

1969 (1921) *Buddhist Legends: Translated from the Original Pali Text of the Dhammapada Commentary*, pt. 2, London: The Pali Text Society.

Carpenter, J. Estlin

1992 (1911) *The Dīgha Nikāya*, vol. 3, Oxford: The Pali Text Society.

Chalao Techawanto Tathongduang (Phramethi Sutaphorn)

2004 "Pannyasachadok pacchimaphak ruangthi 5-8: kantruatchamra laesuksachoengwikhro", Bangkok: Master's Thesis, Mahachulalongkorn University.

Chalmers, Robert

1994 (1899) *The Majjhima-Nikāya*, vol. 3, Oxford: The Pali Text Society.

Churnlaw, Bimala

1963 *A Manual of Buddhist Historical Traditions: Saddhamma-Saṅgaha*, Calcutta: University of Calcutta.

Cicuzza, Claudio

2011 *A Mirror Reflecting the Entire World: The Pāli Buddhapādamaṅgala or "Auspicious Signs on the Buddha's Feet", Critical Edition with English Translation*, Bangkok & Lumbini: Fragile Palm Leaves Foundation & Lumbini International Research Institute.

Cœdès, George

1966 *Catalogue des manuscrits en Pāli, Laotien et Siamois Provenant de la Thaïlande*, Copenhagen: Bibliothèque royale de Copenhague.

Cœdès, Georges (ed.), Jacqueline Filliozat (edition prepared)

2003 *The Paṭhamasambodhi*, Oxford: The Pali Text Society.

Collins, Steven

1993 "Braḥ Māleyyadevattheravatthu", *Journal of the Pali Text Society* 18: 1-96.

Coomaraswamy, Ananda K.

1956 *Mediaeval Sinhalese Art: Being a Monograpy on Mediaeval Sinhalese Arts and Crafts, Mainly as Surviving in the Eighteenth Century, with an Account of the Structure of Society and the Status of the Craftsmen*, New York: Pantheon Books.

Davids, Caroline A. F. Rhys

1975 (1920) *The Visuddhi-Magga of Buddhaghosa*, London: The Pali Text Society.

1988 *Tikapaṭṭhāna of the Abhidhamma Piṭaka*, London: The Pali Text Society.

Davids, T. W. Rhys and J. Estlin Carpenter

1968 (1886) *Sumaṅgala-Vilāsinī: Buddhaghosa's Commentary on the Dīgha Nikāya*, pt. 1, London: The Pali Text Society.

1995 (1890) *The Dīgha Nikāya*, vol. 1, Oxford: The Pali Text Society.

Denis, Eugène

1965 "L'Origine cingalaise du P'răḥ Malăy", in *Felicitation Volumes of Southeast-Asian Studies Presented to His Highness Prince Dhaninivat*, Bangkok: The Siam Society, pp. 329-338.

Éditions de l'Institut Bouddhique

1958 *Paññāsajātaka*, vol. 4, Ganthamālā 10, Phnom Penh: Éditions de l'Institut Bouddhique.

Fausbøll, V.

1877 *The Jātaka: Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha*, vol. 2, London: Trübner.

1883 *The Jātaka, Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha*, vol. 3, London: Trübner.

1887 *The Jātaka, Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama*

Buddha, vol. 4, London: Trübner.

1891 *The Jātaka, Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha*, vol. 5, London: Trübner.

1896 *The Jātaka, Together with its Commentary, Being Tales of the Anterior Births of Gotama Buddha*, vol. 6, London: Trübner.

Feer, M. Léon

1875 "Les Jātakas", *Journal Asiatique* 7(5): 357-434.

1975 (1890) *Saṃyutta-Nikāya*, pt. 3, London: The Pali Text Society.

Fine Arts Department of Thailand

1935 *Phra Malai Kham Luang*, attributed to Prince Thammathibet, Bangkok: Fine Arts Department.

1997 *Chiang Mai Chadok*, 2 vols., Bangkok: Fine Arts Department.

2000 *Baep rian nangsu phasa boran (The Textbook of Ancient Language)*, Bangkok: Krom Silapakon.

Finot, Louis

1917 "Rechercher sur la littérature laotienne", *Bulletin de l'École Française d'Etrême-Orient* 17: 1-221.

Gandhi, Sharada

1989 *Rasavāhinī: A Stream of Sentiments (Being the Previous Birth Stories of the Buddha)*, Delhi: Parimal Publications.

Geiger, Wilhelm

1908 *The Mahāvaṃsa*, London: The Pāli Text Society.

1964 (1912) *The Mahāvaṃsa or the Great Chronicle of Ceylon*, London: The Pali Text Society.

Gombrich, Richard F.

1978 "Kosala-Bimba-Vaṇṇanā", in *Buddhism in Ceylon and Studies on Religious Syncretism in Buddhist Countries*, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, pp. 281-303.

Hardy, E.

1894 *Being the Commentary on the Peta-vatthu*, London: The Pali Text Society.

1896 *The Aṅguttara-Nikāya*, pt. 3, London: The Pali Text Society.

1900 *The Aṅguttara-Nikāya*, pt. 5, London: The Pali Text Society.

1961(1902) *The Netti-Pakaraṇa: with Extracts from Dhammapāla's Commentary*, London: The Pali Text Society.

Hardy, R. S.

1860 *Eastern Monachism*, London: Williams and Norgate.

Hinüber, Oskar von

1996 *Indian Philology and South Asian Studies vol. 2: A Handbook of Pāli Literature*, Berlin & New York : Walter de Gruyter.

Hinüber O. von and K. R. Norman

1994 *Dhammapada*, Oxford: The Pali Text Society.

Horner, I. B.

1977 *Papañcasūdanī: Majjhimanikāyaṭṭhakathā of Buddhaghosācariya*, pts. 4-5, London: The Pali Text Society.

Horner, I. B. and Padmanabh S. Jaini

1985 *Apocryphal Birth-Stories (Paññāsa-Jātaka)*, vol. 1, London: The Pali Text Society.

Jaini, Padmanabh S.

1961 *Milinda-Ṭīkā*, London: The Pali Text Society.

1981/1983 *Paññāsa-Jātaka or Zimme Paṇṇāsa*, vol. 1, vol. 2. London: The Pali Text Society.

1986 *Apocryphal Birth-Stories (Paññāsa-Jātaka)*, vol. 2, London: The Pali Text Society.

2001 "On the Buddhist Image", in *Collected Papers on Buddhist Studies*, Delhi: Motilal Banarsidass, pp. 331-338.

Jayawickrama, N. A.

1977 *Vimānavatthu and Petavatthu*, London: The Pali Text Society.

Keawsai (Phramaha Akhom Samaneeko)

2005 "Pannyasachadok pacchimaphak ruangthi 1-4: kantruatchamra laesuksachoengwikhro", Bangkok: Master's Thesis, Mahachulalongkorn University.

Kern, H.

1974 *Manual of Indian Buddhism*, Delhi: Motilal Banarsidass.

Khamkamon (Phramaha Thanin Aathitwaro)

2003 "Panyasachadok ruangthi 8-27: kantruatchamra laesuksachoengwikhro", Bangkok: Master's Thesis, Mahachulalongkorn University.

Kieffer-Pülz, Petra

2011 *Sīmāvicāraṇa: A Pali letter on monastic Boundaries by King Rāma IV of Siam*, Bangkok & Lumbini: Fragile Palm Leaves Foundation & Lumbini International Research Institute.

Klomklang (Phramaha Mana Muniwangso)

2004 "Panyasachadok ruangthi 1-7: kantruatchamra laesuksachoengwikhro", Bangkok: Master's Thesis, Mahachulalongkorn University.

Kyaw, U Ba

2007 (1980) *Eludication of the Intrinsic Meaning: So Named the Commentary on the Peta Stories (Paramattha-dīpanī nāma Petavatthu-aṭṭhakathā),* Lancaster: The Pali Text Society.

Malalasekera, G. P.

1928 *The Pāli Literature of Ceylon*, London: Royal Asiatic Society of Great Britain and Ireland.

1960 (1937) *Dictionary of Pāli Proper Names*, 2 vols., London: The Pali Text Society.

Martini, F.

1937 "Dasa-bodhisatta-uddesa, texte pāli publié avec une traduction et un index grammatical", *Bulletin de l'École Franşaise d'Extrême-Orient* 36: 287- 413.

Masefield, Peter

2008 "Indo-Chinese Pali", *Mahachulalongkorn Journal of Buddhist Studies* 1: 1-9.

Matsumura, Junko

1999 "Remarks on the Rasavāhinī and the Related Literature", *Journal of the Pali Text Society* 25: 155-172.

Mi Chuthong

1973 *Nithan Phra Malai*, Bangkok: Bannasin.

Minayeff, J

1886 "Anāgata-vaṃsa", *Journal of the Pali Text Society* 1886: 4-53.

Müller, Edward

1979 (1897) *The Atthasālinī: Buddhaghosa's Commentary on the Dhammasaṅgaṇī*, London: The Pali Text Society

The National Library of Thailand

1921 *Banchi khamphi phasa bali lae phasa sansakrit an mi chabap nai ho phra samut watchirayan samrap phra nakhon mua pi wok p. s. 2463 (Catalogue of Texts in Pāli and Sanskrit in the Collection of the Vajirañāṇa Library in the Monkey Year BE 2463)*, Bangkok: Sophonphiphatthanakon.

2001 *Amatarasadhārā: Atthakathā-anāgatavaṅsa*, Bangkok: Krom Silapakon.

Ñāṇamoli, Bhikkhu

1977 (1962) *The Guide (Netti-ppakaraṇaṃ), According to Kaccāya Thera*, London: The Pali Text Society.

Norman, H. C.

1970 (1906) *The Commentary on the Dhammapada*, vol. 2, London: The Pali Text Society.

Oldenberg, Hermann and Richard Pischel

1966 (1883) *Thera- and Therī- Gāthā: Stanzas Ascribed to Elders of the Buddhist Order of Recluses*, London: The Pali Text Society.

Otani University

2004 *Paññāsajātaka: Thai Recension Nos. 12-18, 22-39 Kept in the Otani Uinversity Library, Transliteration from Manuscripts in Khumer Script*, Kyoto: Pāli Manuscripts Research Project, Shin Buddhist Comprehensive Research Institute.

Phannava（Phramaha Phiratthakon Angsumali）

2006 "Malayyavatthuthipanidika: kantruatchamra lae suksawikhro", Bangkok: Master's thesis, Mahachulalongkorn University.

Phra Khanthasaraphiwong

1998 *Bālāvatāro* (witten by Phra Thammakitti), Lampang: Citwathanakanphim.

Rahula, Walpola

1956 *History of Buddhism in Ceylon: the Anuradhapura Period 3rd Century BC-10th Century-AC*, Colombo: Gunasena.

Roveda, Vittorio and Sothon Yem

2010 *Preah Bot : Buddhist Painting Scrolls in Cambodia*, Bangkok: River Books.

Saddhānanda, Nedimāle

1890 "Saddhamma Saṃgaho", *Journal of the Pali Text Society* 1890: 21-90.

Saddhātissa, D.

1974 "Pāli Literature of Thailand", in *Buddhist Studies in Honour of I. B. Horner*, edited by L. Cousins, A. Kunst, and K. R. Norman, Dordrecht & Boston: D. Reidel Publishing Company, pp. 211-225.

Saddhātissa, Hammalawa

1989 *The Abhidhammatthasaṅgaha of Bhadantācariya Anuruddha, and the Abhidhammatthavibhāvinī-Ṭīkā of Bhandantācariya Sumaṅgalasāmi*, Oxford: The Pali Text Society.

Santi Pakdeekham

2009 *Jambūpati-sūtra: A Synopotic Romanized Edition*, Bangkok & Lumbini: Fragile Palm Leaves Foundation & Lumbini International Research Institute.

Saw Thammaphakkadi

1977 *Phra Malai Klon Suat*, Bangkok: S. Thammaphakkadi.

Senart, E.

1882 *Le Mahāvastu: texte sanscrit, publié pour la première fois et accompagné d'introductions et d'un commentaire par É. Senart*, vol. 1, Paris: À L'Imprimerie Nationale.

Silva, Lily De

1970 *Dīghanikāyaṭṭhakathāṭīkā: Līnatthavaṇṇanā*, vol. 1, London: The Pali Text Society.

Sinlapabannakhan

2006 (1956) *Panyasachadok*, 2 vols., Bangkok: Sinlapabannakhan.

Skilling, Peter

2009 "An Impossible Task? The Classical "edition" and Thai Pāli Literature", *Thai International Journal for Buddhist Studies* 1: 33-43.

Skilling, Peter and Santi Pakdeekham

2002 *Materials for the Study of the Tripiṭaka, vol. 1: Pāli Literature Transmitted in Central Siam: A Catalogue Based on the Sap Songkhro*, Bangkok: Fragile Palm Leaves Foundation & Lumbini International Research Institute.

2004 *Materials for the Study of the Tripiṭaka, vol. 2: Pāli and Vernacular Literature Transmitted in Central and Northern Siam*, Bangkok: Fragile Palm Leaves Foundation & Lumbini International Research Institute.

Smith, Helmer

1978 (1915) *The Khuddaka-Pāṭha: Together with its Commentary Paramatthajotikā I*, London: The Pali Text Society.

1989 *Sutta-Nipāta Commentary: Being Paramatthajotikā*, vol.2, London: The Pali Text Society.

Speyer, J. S.

1958 *Avadānaśataka: A Century of Edifying Tales Belonging to the Hīnayāna*, 'S-Gravenhage: Mouton.

Stede, W.

1971 (1932) *The Sumaṅgala-Vilāsinī, Buddhaghosa's Commentary on the Dīgha-Nikāya*, pt. 3, London: The Pali Text society.

Supaporn Makchang

1978 "Mālayyadevattheravatthu: kaantruatchamra lae kaansuksaa choengwikhro", Bangkok: Master's Thesis, Chulalongkorn University.

Takakusu, J. and M. Nagai

1975 (1924) *Samantapāsādikā: Buddhaghosa's Commentary on the Vinaya Piṭaka*, vol.1, London: The Pali Text Society.

Terral, G.

1956 “Samuddaghosajātaka: conte pali tiré du *Paññāsa-jātaka*”, *Bulletin de l'École Franşaise d'Extrême-Orient* 48: 249- 351.

Thongpan (Phramaha Prasit Ahingsako)

2004 “Panyasachadok pathomphak ruangthi 28-44: kantruatchamra laesuksachoengwikhro”, Bangkok: Master’s Thesis, Mahachulalongkorn University.

Tin, Muang

1958 *The Expositor (Atthasālinī): Buddhaghosa’s Commentary on the Dhammasangaṇī, the First Book of the Abhidhamma Piṭaka*, vol. 1, London: The Pali Text Society.

Trenckner, V.

1962 *The Milindapañho: Being Dialogues between King Milinda and the Buddhist Sage Nāgasena*, London: Pali Text Society.

Triphongsin (Phramaha Prasanchai Thewangkaro)

2004 “Panyasachadok pathomphak ruangthi 45-50: kantruatchamra laesuksachoengwikhro”, Bangkok: Master’s Thesis, Mahachulalongkorn University.

Unebe, Toshiya in Collaboration with Yoshitaka Hayakawa, Mikimasa Ishino, Toshiki Maruyama, Satoko Yamamoto and Xia Zhou

2007 “Three Stories From the Thai Recension of the Paññāsa-jātaka: Transliteration and Preliminary Notes”, *Journal of the Scool of Letters, Nagoya University* 3: 1-23.

The Vajirañāṇa Library

1921 *Banchi khamphi phasa bali lae phasa sansakrit an mi chabap nai ho phra samut watchirayan samrap phra nakhon mua pi wok p. s. 2463 (Catalogue of Texts in Pāli and Sanskrit in the Collection of the Vajirañāṇa Library in the Monkey Year BE 2463)*, Bangkok: Sophonphiphatthanakon.

Ver Eecke, Jacqueline

1980 *Le Sihalavatthuppakaraṇa: Texte Pāli et Traduction*, Paris: Ecole française d'Extrême-Orient.

Ver Eecke-Filliozat, Jacqueline and Jean Filliozat

2003 *Sahassavatthuppakaraṇaṃ, as a Contribution to the Royal Cremation Ceremonies of Phra Thammarajanuwat (Kamon Kovido Pali VI)*, Bangkok: Sangha Assembly of Region III.

Vipassana Research Institute

1998a *Sāratthadīpanī-Ṭīkā*, vol. 1, Dhammagiri Pāli Ganthamālā 96, Igatpuri: Vipassana Research Institute.

1998b *Vinayālaṅkāra-Ṭikā*, vol. 1, Dhammagiri Pāli Ganthamālā 104, Igatpuri: Vipassana Research Institute.

1998c *Vinayavinicchaya-Ṭīkā*, vol. 1, Dhammagiri Pāli Ganthamālā 108, Igatpuri: Vipassana Research Institute.

1998d *Dhammasaṅgaṇī-Mūlaṭīkā: Dhammasaṅgaṇī-anuṭīkā*, Dhammagiri Pāli Ganthamālā 130, Igatpuri: Vipassana Research Institute.

1998e *Visuddhimagga-Mahāṭīkā*, vol. 1, Dhammagiri Pāli Ganthamālā 139, Igatpuri: Vipassana Research Institute.

Walleser, Max and Hermann Kopp

1967 *Manorathapūraṇī: Buddhaghosa's Commentary on the Aṅguttara-Nikāya*, vol. 2, London: The Pali Text Society.

Wickremasinghe, Don Martino de Zilva

1900 *Catalogue of the Sinhalese Manuscripts in the British Museum*, London: The British Museum.

Wijeratne, R. P. and Rupert Gethin

2002 *Summary of the Topics of Abhidhamma (Abihdhammatthasaṅgaha) by Anuruddha, Exposotion of the Topics of Abhidhamma (Abhidhammatthavibhāvinī) by Sumaṅgala: Being a Commentary to Anuruddha's "Summary of the Topics of Abhidhamma"*, Oxford: The Pali Text Society.

Woods, J. H. and D. Kosambi

1977 (1922) *Papañcasūdanī: Majjhimanikāyaṭṭhakathā of Buddhaghosācariya*, pt. 1, London: The Pali Text Society.

Woodward, F. L.

1977 *Sārattha-ppakāsinī: Buddhaghosa's Commentary on the Saṃyutta-Nikāya*, vol. 2, London: The Pali Text Society.

Yamamoto, Satoko

2008 "20. Vaṭṭaṅgulirāja-sutta-vaṇṇanā", 畝部［2008a: 52-62］.

日本語文献

石井米雄

2002 (1991)　『タイ仏教入門』めこん。

岩本裕

1968　『目連伝説と盂蘭盆』法蔵館。

畝部俊也

2008a　『パーリ語およびタイ語写本による東南アジア撰述仏典の研究 17520046 平成 17 年度 ~ 平成 19 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書（代表者：畝部俊也）』。

2008b　「パンニャーサ・ジャータカ研究報告―大谷大学写本欠損部分の三話を巡って―（口頭発表記録：東海印度学仏教学会第 53 回学術大会）」、畝部［2008a: 2-12］。

2012　『タイ国ワット・ラジャシッダラム寺院他所蔵写本に基づく蔵外仏典の研究 21520055 2009 年度 ~ 2011 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告（研究代表者：畝部俊也）』。

大谷大学図書館

1995　『貝葉写本目録：大谷大学図書館所蔵』大谷大学図書館。

柿市里子・渋谷誉一郎・遊佐昇

1994, 1996, 1997　「敦煌出土『大目乾連冥間救母変文』校勘訳注 (1) - (3) 」『東洋学研究』31: 381-433, 33: 65-88, 34: 123-146。

片山一良

2002　『中部（マッジマニカーヤ）』後分五十経篇 2、パーリ仏典〈第 1 期〉6、大蔵出版。

2003　『長部（ディーガニカーヤ）』戒蘊篇 2、パーリ仏典〈第 2 期〉2、大蔵出版。

2004　『長部（ディーガニカーヤ）』大篇 1、パーリ仏典〈第 2 期〉3、大蔵出版。

2005　『長部（ディーガニカーヤ）』パーティカ篇 1、パーリ仏典〈第 2 期〉5、大蔵出版。

勝本華蓮

2007　『チャリヤーピタカ註釈―パーリ原典全訳―』国際仏教徒協会。

橘堂正弘

1971　「Sīhaḷavatthuppakaraṇa と Lokappadīpakasāra」『印度學仏教學研究』19(2): 819-821。

1997　『スリランカのパーリ語文献』山喜房佛書林。

雲井昭善

2008 (1997)『新版 パーリ語佛教辞典』山喜房佛書林。

スキリング、ピーター／畝部敏也（訳）
2004 「東南アジアにおけるジャータカとパンニャーサ・ジャータカ」『大谷大学真宗総合研究所研究紀要』22：11–74。
ソン・シマトラン／坂本比奈子（訳）
1989 「タイの寺院壁画―その地域的特徴、壁画の物語とその変遷―」、石沢良昭（編）、『タイの寺院壁画と石造建築』めこん、pp. 23-89。
大蔵出版
1924-32 『大正新修大蔵経』全 85 巻、高楠順次郎・渡辺海旭（編）、大蔵出版。
1935-41 『南伝大蔵経』全 65 巻、高楠順次郎（監修）、大蔵出版。
高田修
1983 (1967) 『仏像の起源』岩波書店。
田辺和子
1980 「Paññāsajātaka の中の Sudhana-jātaka について」『印度学仏教学研究』28 (2): 930-925。
1981 「タイに伝わる『パンニャーサ・ジャータカ』（50 ジャータカ）」『仏教学』11: 65-88。
筑後誠邦
2008 「『大目乾連冥間救母変文』における救済方法の考察」『印度學佛教學研究』57(1): 99-102。
寺崎敬道
1992 「造像の功徳について」『駒沢大学仏教学部論集』23: 275-286。
冨田竹二郎（編）
1997 『タイ日大辞典』めこん。
中村元
1995 『仏教美術に生きる理想』中村元選集〔決定版〕第 23 巻、春秋社。
1996a (1978) 『ブッダの真理のことば　感興のことば』岩波書店。
1996b (1984) 『ブッダのことば：スッタニパータ』岩波書店。
1997 (1982) 『仏弟子の告白：テーラガーター』岩波書店。
中村元（監修・補注）
1982a 『ジャータカ全集』第 5 巻、春秋社。
1982b 『ジャータカ全集』第 8 巻、春秋社
1987 『ジャータカ全集』第 2 巻、春秋社。
1988 『ジャータカ全集』第 10 巻、春秋社。
1989 『ジャータカ全集』第 6 巻、春秋社。
中村元・早島鏡正
1964 『ミリンダ王の問い』第 3 巻、東洋文庫 28、平凡社。

長沢和俊
1971　『法顕伝・宋雲行記』東洋文庫 194、平凡社。
平岡聡
2010　『ブッダの大いなる物語―梵文『マハーヴァストゥ』全訳―』上、大蔵出版。
藤本晃
2003　「『仏説盂蘭盆経』の源流―*Petavatthu* II. 2「舎利弗母餓鬼事」との比較考察―」『パーリ学仏教文化学』17: 47-54。
2006　『廻向思想の研究―餓鬼救済物語を中心として―』国際仏教徒協会。
2007　『死者たちの物語―『餓鬼事経』和訳と解説―』国書刊行会。
古山健一
1997　「パーリ十波羅蜜について」『駒沢大学大学院仏教学研究会年報』30: 126-104。
三上潮
1989　「Anāgatavaṃsa の研究」『龍谷大学大学院研究紀要人文学部』10: 168-172。
1990　「Anāgatavaṃsa 試訳」『龍谷大学大学院仏教学研究室年報』4: 36-31。
水谷真成
1999　『大唐西域記２』東洋文庫 655、平凡社。
峰岸真琴
2001　「クメール文字」、河野六郎・千野栄一・西田龍雄（編）『言語学大辞典』別巻 世界文字辞典、三省堂、pp. 349-357。
宮本なつみ
2004　「タイ語『プラ・マーライ』に見られる「業」と「積善」」『南方文化』31: 13-35。
村上真完・及川真介
1985　『仏のことば註：パラマッタ・ジョーティカー』第 1 巻、春秋社。
1986　『仏のことば註：パラマッタ・ジョーティカー』第 2 巻、春秋社。
1996 (1988)　『仏のことば註：パラマッタ・ジョーティカー』第 3 巻、春秋社。
森祖道
1973a　「Sīhaḷavatthupakaraṇa 訳註（II）―第 1 章第 3・4・5 話―」『城西人文研究』1: 80-101。
1973b　「Mahāvaṃsa Ṭīkāに見られるSahassavatthu」『印度学仏教学研究』22(1): 115-120。
1983　「LE DASAVATTHUPPAKARAṆA Édité et traduit par Jacqueline VER EECKE, LE SĪHAḶAVATTHUPPAKARAṆA Texte pāli et traduction par Jacqueline VER EECKE」『城西人文研究』10: 147-168。
山辺習学
1984　『仏弟子伝』法蔵館。

山本聡子
2008　「ヴァッタングリ王物語―タイ所伝パンニャーサ・ジャータカ第 21 話和訳―」、畝部［2008a: 70-76］。
2010　「タイ所伝『マーレッヤデーヴァ長老物語』の源泉資料について」『東海仏教』55: 120-105。
2012　「パーリ文献に見られる仏像起源伝説について―タイ国立図書館所蔵『コーサラ国仏像縁起譚』を中心として―」『東海仏教』57: 88-74。

初出一覧

本論文の一部は、既発表の研究に加筆訂正したものである。以下に既発表の論文を挙げる。

第 1 部 研究篇

第 1 章	山本［2012］
第 3 章	山本［2010］

第 2 部 テキスト・翻訳篇

1. Vaṭṭaṅgulirjasuttavaṇṇanā	Yamamoto［2008］
『ヴァッタングリ王物語』	山本［2008］